袖ケ浦市堂庭山B遺跡

――袖ケ浦福祉センター授産所埋蔵文化財調査報告書――

平成8年3月

千　葉　県　社　会　部

財団法人　千葉県文化財センター

袖ケ浦市堂庭山B遺跡

——袖ケ浦福祉センター授産所埋蔵文化財調査報告書——

序　文

財団法人千葉県文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立されて以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県文化財センター調査報告第288集として、千葉県社会部の袖ヶ浦福祉センター授産所整備事業に伴って実施した袖ヶ浦市堂庭山B遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、旧石器時代や縄文時代・古墳時代の遺物が出土するなど、この地域の原始・古代の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。この報告書が、学術資料として、また郷土研究の資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成8年3月29日

財団法人千葉県文化財センター
理事長　中村好成

凡　例

1　本書は、千葉県社会部による袖ヶ浦福祉センター授産所整備事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。

2　本書に収録した遺跡は、千葉県袖ヶ浦市蔵波3,312-1ほかに所在する堂庭山B遺跡（遺跡コード481-015）である。

3　発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県社会部の委託を受け、財団法人千葉県文化財センターが実施した。

4　発掘調査及び整理作業は、調査研究部長高木博彦（平成５年度）・西山太郎（平成７年度）、市原調査事務所長石田廣美（平成５年度）・森　尚登（平成７年度）の指導のもと、下記の期間に各職員が実施した。

発掘調査　平成５年４月１日～平成５年７月31日　副所長　西川博孝　主任技師　福田　誠
平成６年２月１日～平成６年２月28日　主任技師　柴田龍司

整理作業　平成７年４月１日～平成７年11月30日　分室長　加藤正信　主任技師　高梨俊夫　技師　永塚俊司

5　本書の執筆は、技師永塚俊司がⅡ－１、Ⅲ－１を担当し、分室長加藤正信がその他を担当した。

6　発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁生涯学習部文化課、千葉県社会部障害福祉課、社団法人千葉県社会福祉事業団、同袖ヶ浦福祉センター長浦授産所、袖ヶ浦市教育委員会、吉田政行氏の御指導、御協力を得た。

7　本書で使用した地形図は、下記のとおりである。

第１図　国土地理院発行　1/25,000地形図　「姉崎」（NI-54-19-16-3）「上総横田」（NI-54-19-16-4）

第２図　袖ヶ浦市役所発行　1/2,500地形図　№14(04-3)　№15(04-4)　№19(14-1)　№20(14-2)

8　遺跡周辺航空写真は、京葉測量株式会社による平成５年撮影のものを使用した。

9　本書で使用した図面の方位は、すべて座標北である。

10　本書で使用したスクリーントーン及び記号の用例は、次のとおりである。

焼土(炉床・火床)

焼土

カマドの袖

旧石器出土状況図の記号凡例(器種・石材)

器種

★ ナイフ型石器	◎ 尖頭器（両面調整石器）	◎ スクレイパー	● 彫刻刀形石器	◐ 石核
○ 微細剥離痕のある剥片	● 剥片	• 砕片	◑ 磨石	□ 敲石
▲ 礫	△ 破損礫(礫片)			

石材

◎ 黒曜石	▲ チャート	■ 安山岩	□ 凝灰岩	▲ 頁岩
◐ メノウ	○ 砂岩	● 流紋岩	◉ 凝灰岩質頁岩	

本文目次

Ⅰ　はじめに …… 1
　1　調査の概要 …… 1
　　（1）調査の経緯と経過 …… 1
　　（2）調査の方法 …… 1
　2　遺跡の位置と環境 …… 1
　　（1）遺跡の位置 …… 1
　　（2）遺跡の環境 …… 3
Ⅱ　検出した遺構と遺物 …… 8
　1　旧石器時代 …… 8
　　（1）概要 …… 8
　　（2）石器集中地点 …… 10
　2　縄文時代 …… 65
　　（1）概要 …… 65
　　（2）遺構 …… 65
　　（3）遺物 …… 82
　3　古墳時代 …… 91
　　（1）概要 …… 91
　　（2）遺構・遺物 …… 91
　4　歴史時代 …… 119
　　（1）概要 …… 119
　　（2）遺構 …… 119
Ⅲ　まとめ …… 126
　1　旧石器時代 …… 126
　2　縄文時代 …… 127
　3　古墳時代 …… 127
　4　歴史時代 …… 128
報告書抄録 …… 巻末

挿図目次

第1図　遺跡位置図 …… 2
第2図　遺跡周辺地形図 …… 4
第3図　上層調査区 …… 5
第4図　遺構配置図・調査区配置図 …… 6
第5図　基本層序 …… 8
第6図　下層調査区と石器集中地点 …… 9

第７図　石器集中１　石器出土分布図
－器種別 …… 12
第８図　石器集中１　礫群１　構成礫の重量・
被熱状況 …… 12
第９図　石器集中１　石器出土分布図
－石材別（接合関係） …… 13
第10図　石器集中１　出土石器（１） …… 14
第11図　石器集中１　出土石器（２） …… 15
第12図　石器集中１　出土石器（３） …… 16
第13図　石器集中１　出土石器（４） …… 17
第14図　石器集中１　出土石器（５） …… 18
第15図　石器集中１　出土石器（６） …… 19
第16図　石器集中１　出土石器（７） …… 20
第17図　石器集中１　出土石器（８） …… 21
第18図　石器集中２　石器出土分布図
－器種別 …… 22
第19図　石器集中２　石器出土分布図
－石材別（接合関係） …… 23
第20図　石器集中２　礫群１　構成礫の重量・
被熱状況 …… 24
第21図　石器集中２　出土石器（１） …… 25
第22図　石器集中２　出土石器（２） …… 26
第23図　石器集中２　出土石器（３） …… 27
第24図　石器集中２　出土石器（４） …… 28
第25図　石器集中２　出土石器（５） …… 29
第26図　石器集中２　出土石器（６） …… 30
第27図　石器集中２　出土石器（７） …… 31
第28図　石器集中２　出土石器（８） …… 32
第29図　石器集中２　出土石器（９） …… 33
第30図　石器集中２　出土石器（10） …… 34
第31図　石器集中３　石器出土分布図
－器種別 …… 36
第32図　石器集中３　石器出土分布図
－石材別（接合関係） …… 36
第33図　石器集中３　出土石器 …… 37
第34図　石器集中４　石器出土分布図
－器種別 …… 39
第35図　石器集中４　石器出土分布図
－石材別（接合関係） …… 39
第36図　石器集中４　出土石器（１） …… 40
第37図　石器集中４　出土石器（２） …… 41
第38図　石器集中４　出土石器（３） …… 42
第39図　石器集中５　石器出土分布図
－器種別（接合関係） …… 44
第40図　石器集中５　礫群１　構成礫の重量・
被熱状況 …… 44
第41図　石器集中５　出土石器 …… 44
第42図　石器集中６・７・８　石器出土分布図と
出土石器 …… 45
第43図　石器集中９　石器出土分布図
－器種別 …… 46
第44図　石器集中９　石器出土分布図
－石材別（接合関係） …… 46
第45図　石器集中９　出土石器 …… 47
第46図　石器集中10　石器出土分布図
－器種別 …… 48
第47図　石器集中10　石器出土分布図
－石材別 …… 48
第48図　石器集中10　出土石器 …… 49
第49図　石器集中11　石器出土分布図と
出土石器 …… 50
第50図　石器集中12　石器出土分布図と
出土石器 …… 50
第51図　石器集中13　石器出土分布図 …… 50
第52図　石器集中外　出土石器（１） …… 51
第53図　石器集中外　出土石器（２） …… 52
第54図　炉穴実測図（１） …… 66
第55図　炉穴実測図（２） …… 67
第56図　炉穴実測図（３） …… 69
第57図　炉穴実測図（４） …… 70
第58図　炉穴実測図（５） …… 72
第59図　炉穴実測図（６） …… 73
第60図　土坑実測図（１） …… 75
第61図　土坑実測図（２） …… 76

第62図　土坑実測図（３）…… 78
第63図　土坑実測図（４）…… 79
第64図　土坑実測図（５）…… 81
第65図　縄文時代遺物（１）…… 83
第66図　縄文時代遺物（２）…… 86
第67図　縄文時代遺物（３）…… 87
第68図　縄文時代遺物（４）…… 88
第69図　縄文時代遺物（５）…… 89
第70図　001住居跡 …… 92
第71図　001住居跡出土遺物 …… 93
第72図　002住居跡 …… 94
第73図　002住居跡出土遺物 …… 95
第74図　003住居跡 …… 96
第75図　003住居跡出土遺物 …… 97
第76図　004住居跡 …… 98
第77図　004住居跡出土遺物 …… 99
第78図　005住居跡 …… 100
第79図　005住居跡出土遺物 …… 100
第80図　007住居跡 …… 101
第81図　007住居跡出土遺物 …… 102
第82図　009住居跡 …… 104
第83図　009住居跡出土遺物 …… 104
第84図　010住居跡 …… 105
第85図　011住居跡 …… 106
第86図　039住居跡 …… 107
第87図　039住居跡出土遺物 …… 107
第88図　050住居跡 …… 108
第89図　050住居跡出土遺物 …… 109
第90図　051住居跡 …… 110
第91図　052住居跡 …… 110
第92図　052住居跡出土遺物（１）…… 111
第93図　052住居跡出土遺物（２）…… 112
第94図　064住居跡 …… 113
第95図　074住居跡 …… 113
第96図　074住居跡出土遺物 …… 114
第97図　101住居跡 …… 115
第98図　101住居跡出土遺物 …… 115
第99図　102住居跡 …… 116
第100図　102住居跡出土遺物 …… 116
第101図　103住居跡 …… 117
第102図　103住居跡出土遺物 …… 117
第103図　017竪穴状遺構 …… 118
第104図　グリッド出土遺物 …… 118
第105図　076掘立柱建物跡 …… 119
第106図　087掘立柱建物跡 …… 120
第107図　091掘立柱建物跡 …… 121
第108図　015方形周溝状遺構 …… 122
第109図　046方形周溝状遺構 …… 123
第110図　073方形周溝状遺構 …… 124
第111図　078方形周溝状遺構 …… 124
第112図　090溝 …… 125

表　目　次

第１表　石器集中１　石材と器種組成 …… 54
第２表　石器集中２　石材と器種組成 …… 54
第３表　石器集中３　石材と器種組成 …… 54
第４表　石器集中４　石材と器種組成 …… 55
第５表　石器集中５　石材と器種組成 …… 55
第６表　石器集中９　石材と器種組成 …… 55
第７表　石器集中10　石材と器種組成 …… 55
第８表　石器集中11　石材と器種組成 …… 55
第９表　石器集中12　石材と器種組成 …… 55
第10表　石器集中１　石器観察表 …… 56・57
第11表　石器集中２　石器観察表 … 58・59・60・61
第12表　石器集中３　石器観察表 …… 61
第13表　石器集中４　石器観察表 …… 61・62
第14表　石器集中５　石器観察表 …… 62

第15表　石器集中６　石器観察表 …… 63
第16表　石器集中７　石器観察表 …… 63
第17表　石器集中８　石器観察表 …… 63
第18表　石器集中９　石器観察表 …… 63
第19表　石器集中10　石器観察表 …… 63
第20表　石器集中11　石器観察表 …… 64
第21表　石器集中12　石器観察表 …… 64
第22表　石器集中13　石器観察表 …… 64

図版目次

図版１　遺跡周辺航空写真
図版２　空中写真（東から・南東から・４Ｂグリッド周辺）
図版３　土層断面、石器集中２、石器集中４
図版４　石器集中１　出土石器（正面）、石器集中２　出土石器（１）（正面）
図版５　石器集中１　出土石器（裏面）、石器集中２　出土石器（１）（裏面）
図版６　石器集中２　出土石器（２）（正面）
図版７　石器集中２　出土石器（２）（裏面）
図版８　石器集中３・４・７・９・10・12　出土石器（正面）
図版９　石器集中３・４・７・９・10・12　出土石器（裏面等）
図版10　石器集中外　出土石器（正面）
図版11　石器集中外　出土石器（裏面）
図版12　炉穴（１）
図版13　炉穴（２）
図版14　炉穴（３）、土坑（１）
図版15　土坑（２）
図版16　土坑（３）
図版17　縄文時代遺物（１）
図版18　縄文時代遺物（２）
図版19　縄文時代遺物（３）
図版20　縄文時代遺物（４）
図版21　縄文時代遺物（５）
図版22　001住居跡、002住居跡、002住居跡カマド
図版23　003住居跡、003住居跡カマド、004住居跡
図版24　004住居跡カマド、005住居跡、005住居跡カマド
図版25　007住居跡、009住居跡、010住居跡
図版26　039住居跡、050住居跡
図版27　051住居跡、052住居跡、052住居跡カマド
図版28　074住居跡、101住居跡、102住居跡
図版29　住居跡出土遺物（１）
図版30　住居跡出土遺物（２）
図版31　住居跡出土遺物（３）
図版32　住居跡出土遺物（４）
図版33　住居跡出土遺物（５）
図版34　住居跡出土遺物（６）
図版35　掘立柱建物跡
図版36　方形周溝状遺構（１）
図版37　方形周溝状遺構（２）、発掘調査風景

Ⅰ はじめに

1 調査の概要

（1）調査の経緯と経過

袖ヶ浦福祉センター内の授産所の施設の老朽化等に伴い、施設の改築が計画され、千葉県社会部障害福祉課から千葉県教育委員会に計画対象地内の埋蔵文化財所在の有無についての照会がなされた。現地踏査の結果、対象地内に埋蔵文化財の所在が確認されたため、その取扱いについて協議が重ねられた結果、記録保存の措置を講ずることとなり、発掘調査は、財団法人千葉県文化財センターが実施することとなった。

発掘調査は、平成5年4月1日から平成5年7月31日まで実施し、一部既存建物の解体終了後の翌平成6年2月1日に再開し、2月28日に調査を終了した。対象面積8,700㎡の確認調査の結果、上層遺構として縄文時代早期の遺物包含層と古墳時代後期の集落跡、奈良・平安時代の方形周溝状遺構が検出された範囲7,100㎡について本調査を実施し、また下層遺構として旧石器時代の石器の検出された13地点、348㎡にわたって本調査を実施した。

発掘調査の結果、旧石器時代の石器集中地点13か所から約280点の石器が出土したほか、縄文時代早期の炉穴28基、土坑46基、古墳時代後期の竪穴住居跡18軒、竪穴状遺構1基、歴史時代の掘立柱建物跡3棟、方形周溝状遺構4基が検出され、遺物としては縄文時代早期の撚糸文・条痕文系土器、土師器・須恵器等が検出された。

（2）調査の方法（第4図）

発掘調査は、公共座標に応じて地区割りを行い大グリッドを20m、その大グリッド内に2mの小グリッドを設定し、南北10グリッド、東西10グリッドの計100分割とした。大グリッドは東西方向に西から東に向かってアルファベットの大文字Aから順にB、C、DとJまで、また南北方向に北から南に順に1から7まで付け、数字アルファベットの順に組み合わせて呼ぶことにした。1A、3Cのように大グリッドを呼称するわけである。小グリッドの名称は大グリッド内で北西隅を00とし、そこから東に向かって01、02、03と09まで、次の段の西端からまた東に向かって10、11、12というようにつけた。最後の段は90、91、……98、99となり、小グリッドは00から99までの2桁の数字で表される。先の大グリッドに小グリッド名を付け、2B−34、6F−28といったように小グリッドを呼称した。

遺構は、土層観察用ベルトを残して掘り下げ、後に土層観察を行った。出土遺物は大きい遺物については出土位置を記録し小破片は一括して取り上げた。小遺構については土層観察用ベルトを残さずそのまま覆土を掘り下げたものもある。遺構に帰属しない遺物は、グリッド名を付して一括して取り上げた。旧石器時代の遺物のうち、本調査区からの出土遺物は、出土地点を記録し取り上げを行った。

2 遺跡の位置と環境（第1～4図）

（1）遺跡の位置

堂庭山B遺跡は、小櫃川の沖積平野の北端台地縁辺部から約2.5㎞北側に入り込んだ袖ヶ浦台地上に位置している。遺跡の南に小さな谷が所在し、谷筋は小櫃川へは注がずに東京湾側へ流れ、蔵波川という小

第1図　遺跡位置図(1:25,000)

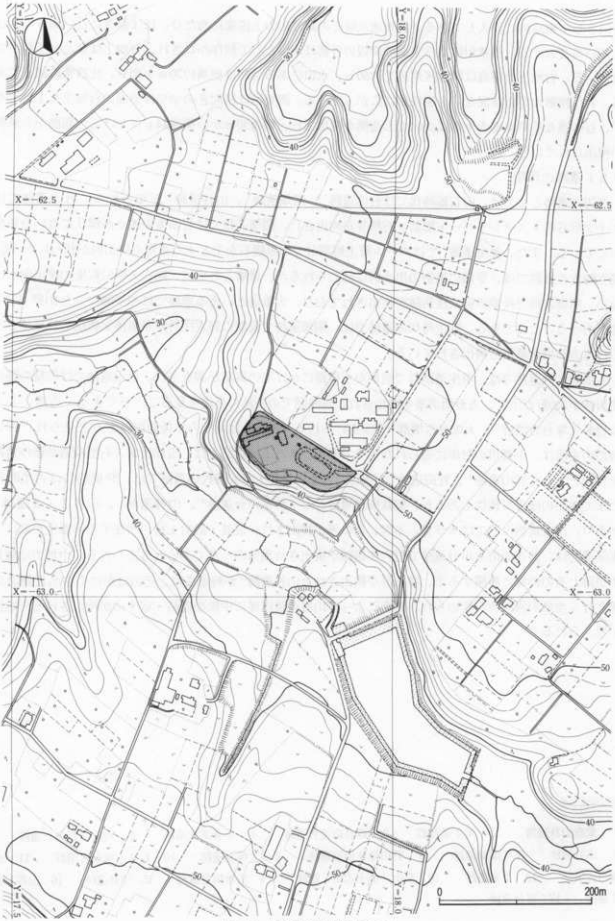
河川として東京湾に流入している。調査地点はその蕨波川の上流部に当たり、ほぼ源流に近い部分に所在していると言える。蕨波川に限らず遺跡周辺の谷筋は水田として耕作がなされ、台地上は畑として利用されている。台地上の標高は調査区周辺で約50ｍ、水田のある谷筋は標高約30ｍを測り、比高差約20ｍである。谷は複雑な開析状況を示し樹枝状に広がっている。調査区は南向きのやや緩斜面の台地上を主とするが、谷へ連なる斜面部の上部にかけても遺構が検出され、標高50ｍから標高44ｍにかけての範囲から遺構が検出されている。

（２）遺跡の環境

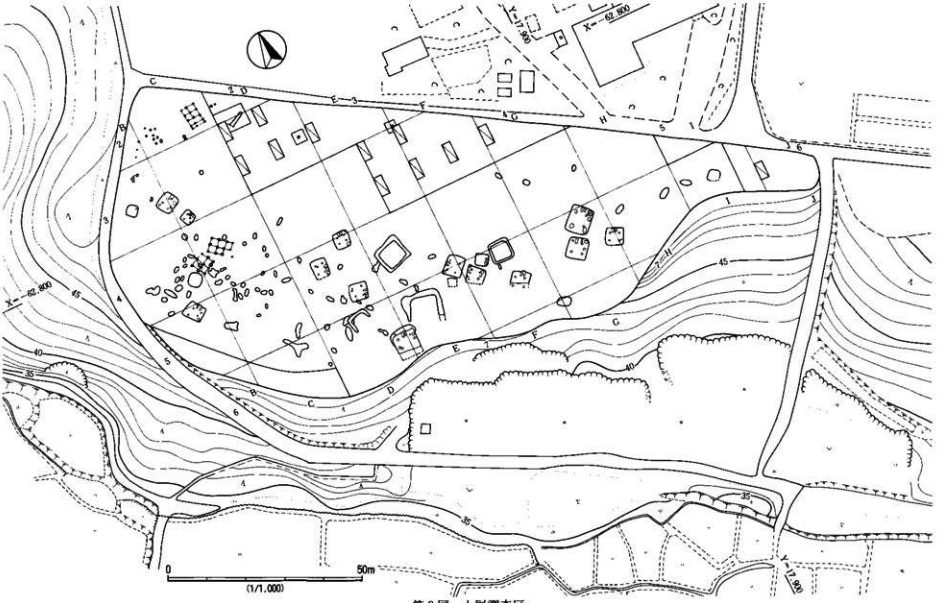
周辺の遺跡としては、旧石器時代では台山遺跡[1]、関畑遺跡[2]、山谷遺跡[3]が知られる。台山遺跡ではナイフ形石器・スクレイパー・彫器・石核等が検出され、関畑遺跡では石器集中地点が環状に近い分布を示している。また、美生遺跡[4]ではローム層上層部分での黒曜石を主とする遺物の検出例が知られている。縄文時代の遺跡では、早期の遺物の出土例は認められるが、遺構としては、陥穴・炉穴程度の検出例しかない。関畑遺跡で後期の竪穴住居跡が検出されており、大集落といえる遺跡ではやや隔たった山野貝塚[5]等をあげることができる。弥生時代の遺跡では、関畑遺跡で後期の竪穴住居跡が集落を構成し、墓域とみられる方形周溝墓群も検出されている。

古墳時代の遺跡では、美生遺跡群で前期から後期にかけての集落が調査され、台山遺跡では前期の竪穴住居跡が100軒以上と、方形周溝墓も検出され、短時間での集落の発達を見ることができる。古墳としては岩井大塚台古墳群[6]、大塚台古墳群[7]等があげられる。これらはおそらく後期に属すると見られ、古い時期の古墳は、小櫃川の対岸に造られたようである。また工房遺跡では、玉作遺跡（石製模造品製作遺跡を含む）として宮山遺跡[8]、野田遺跡[9]があげられる。奈良・平安時代の遺跡では、時期的には古墳時代にまでさかのぼる可能性もあるが、製鉄関連遺跡として清水川台遺跡[10]、中林遺跡[11]、山谷Ⅰ・Ⅱ遺跡[12]があり、出土遺物としてはスラグ、木炭、羽口等が検出され、製鉄・鍛冶工房の所在する可能性が高い。集落遺跡は、前述の清水川台遺跡で竪穴住居跡が検出され集落の一部であると考えられる。中世では鎌倉街道跡とその両側に展開する市、墳墓群が検出された山谷遺跡[13]が特筆され、そのほかにも字名で鎌倉街道と付く地名が何か所か認められ、調査によって山谷遺跡同様に中世の道路・宿・市が検出される可能性が考えられる。

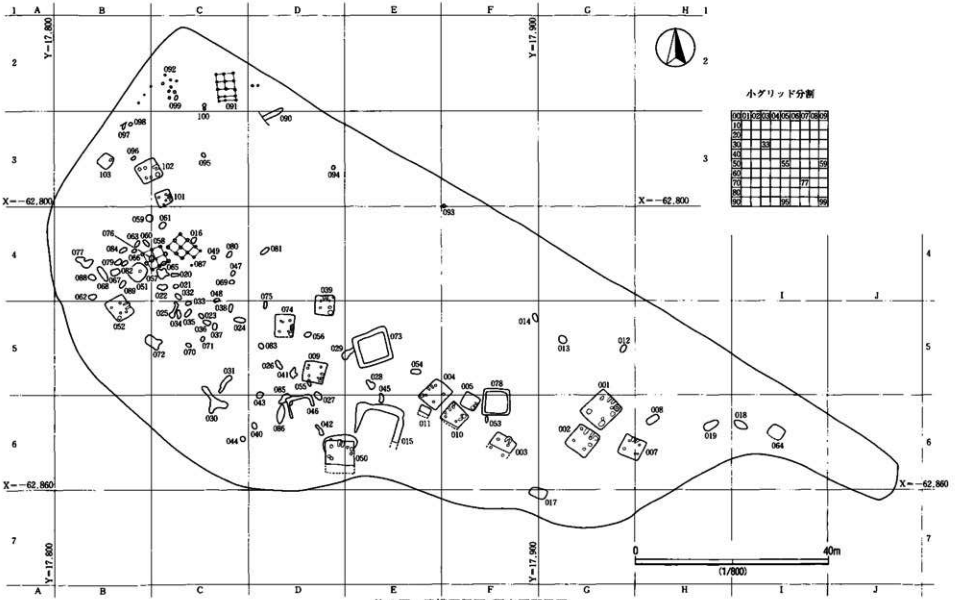
1　堂庭山Ｂ遺跡　2　美生遺跡群　3　鎌倉街道Ｂ遺跡　4　小者清水遺跡　5　台山（野田）遺跡
6　山谷遺跡　7　関畑遺跡　8　野田鎌倉街道遺跡　9　大塚台遺跡　10　岩井大塚台古墳群　11　大塚台古墳群　12　下泉遺跡　13　草山（山王辺田）遺跡　14　清水川台遺跡　15　中林遺跡　16　山谷Ⅰ・Ⅱ遺跡　17　宮台遺跡



第２図　遺跡周辺地形図(1:5,000)



第３図　上層調査区



第４図　遺構配置図・調査区配置図

注　1　（財）千葉県文化財センター　1993　『千葉県文化財センター年報№18』
2　（財）千葉県文化財センター　1992　『千葉県文化財センター年報№17』
（財）千葉県文化財センター　1993　『千葉県文化財センター年報№18』
3　（財）千葉県文化財センター　1995　『千葉県文化財センター年報№20』
4　（財）君津郡市文化財センター　1991　『君津郡市文化財センター年報№８』
5　千葉県都市公社　1973　『袖ヶ浦町山野貝塚』
（財）千葉県文化財センター・千葉県教育委員会　1993　『袖ヶ浦市山野貝塚』
6　（財）千葉県文化財センター　1987　『千葉県埋蔵文化財分布地図（３）』－市原市・君津・長生地区－
7　６に同じ
8　６に同じ
9　６に同じ
10　（財）君津郡市文化財センター　1983　『－千葉県君津郡袖ヶ浦町－清水川台遺跡発掘調査報告書』
６に同じ
11　６に同じ
12　６に同じ
13　柴田 龍司　1993　「鎌倉道と市－袖ヶ浦市山谷遺跡の成果から－」『研究連絡誌　第41号』　（財）千葉県文化財センター
３に同じ

Ⅱ　検出した遺構と遺物

1　旧石器時代

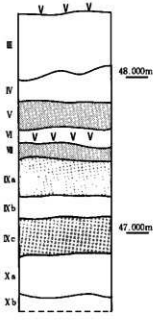
（1）概要

本遺跡では1～13地点までの石器集中地点を検出した（第6図）。調査区の東側の石器集中は単独出土のものが多く、石器群の分布の中心は西側に偏在している。

石器の包含層はⅢ層からX層に及ぶが、質量ともに充実しているのはAT上位の石器群である。本遺跡のローム層の堆積の特徴のひとつは、Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ層の細分が安定して可能であるということである。これは下総台地において従来困難であった該期の石器群の変遷をおさえる上で、非常に有利な条件であると言えよう。ここでは、発掘調査時の所見に沿った出土層位をもって石器群を報告する。

基本層序を第5図に示した。

本遺跡の立川ロームの特徴としては、ソフト化によるⅣ・Ⅴ層への浸食があまり顕著でなく、ある程度の層厚をもって細分できることがあげられる。下総台地では地域によって、ソフト化によるⅣ・Ⅴ層への浸食が、ローム層堆積の薄いこともあって石器群の出土層位の把握を、困難なものとしている。この点、本遺跡の層序によって石器群の出土層位の把握がある程度可能となった。以下に各層の説明をする。



第5図　基本層序（石器集中4）

Ⅲ層　灰黄褐色土層　ソフトローム層である。赤色・青灰色スコリアを少量含む。

Ⅳ層　赤灰褐色土層　Ⅳ層以下はハードローム層である。色調はやや明るい。赤色スコリアを多く含む。黒色・青灰色スコリアを少量含む。

Ⅴ層　暗灰黄褐色土層　第1黒色帯である。色調はやや暗い。黒色スコリアを多く含む。赤色スコリアを少量含む。

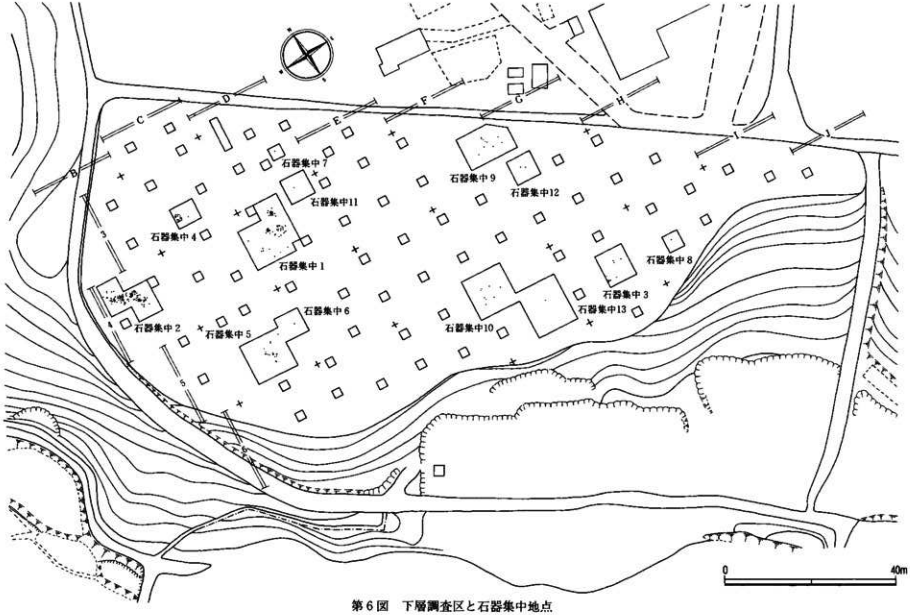
Ⅵ層　灰黄白褐色土層　AT（姶良丹沢火山灰）を包含する。微小の黒色スコリアを多く含む。

Ⅶ層　暗灰黄褐色土層　第2黒色帯上半部である。黒色・青灰色スコリアを多量に含む。Ⅵ層との境界は不明瞭である。

Ⅸ層　濃暗灰褐色土層　第2黒色帯下半部である。Kb層としてやや明るい間層が見られる石器集中4や、間層の見られない地点等、各地点によって本層の様相はかなり異なっている。

Ⅹ層　明黄褐色土層　立川ローム層最下層。色調はかなり明るい。黒色スコリアを少量含む。本層も地点によって細分できる場合もあり、様相を異にしている。

ATを含むⅥ層より上位の石器群としては、石器集中1から石器集中8の8地点がある。分布範囲は調査区の西側にやや偏在する（第6図）。これらの石器群は、小規模ながら、本遺跡においては質量ともにAT下位の石器群よりも充実した内容と言える。その中心となるのは、石器集中1～5である。石器集中



第6図　下層調査区と石器集中地点

6～8は単独出土であり、石器群の広がりは検出できなかった。

概要は以下のとおりである。なお、①は出土層位、②は分布範囲、③は出土総点数、④は出土石器の器種と出土点数、⑤は利用石材と点数比率（比率は剥片石器のみ対象とした）、⑥は備考を示す。

石器集中1　①Ⅲ層（土層断面図は不備）②12ｍ×10ｍ③77点④ナイフ形石器4、彫刻刀形石器1、石核13、微細剥離痕のある剥片3、剥片29、礫・破損礫27⑤頁岩（84.0）、安山岩（8.0）、チャート（4.0）、メノウ（4.0）、砂岩⑥礫群あり

石器集中2　①Ⅳ～Ⅵ層②8ｍ×10ｍ③137点④ナイフ形石器3、スクレイパー6、石核9、微細剥離痕のある剥片2、磨石2、剥片71、砕片11、礫・破損礫33⑤安山岩（43.3）、頁岩（28.8）、流紋岩（16.3）、チャート（4.8）、メノウ（2.9）、凝灰岩質頁岩（1.0）、砂岩（1.0）、凝灰岩（1.0）、黒曜石（1.0）

石器集中3　①Ⅲ層（土層断面図は不備）②4ｍ×6ｍ③9点④ナイフ形石器2、尖頭器1、彫刻刀形石器1、石核1、剥片3、礫1⑤チャート（50.0）、頁岩（25.0）、凝灰岩（25.0）、砂岩

石器集中4　①Ⅲ～Ⅴ層（Ⅴ層中心）②4ｍ×4ｍ③20点④ナイフ形石器3、石核3、微細剥離痕のある剥片1、剥片12、砕片1⑤凝灰岩（55.0）、チャート（25.0）、頁岩（15.0）、安山岩（5.0）

石器集中5　①Ⅳ層（土層断面図は不備）②6ｍ×6ｍ③18点④微細剥離痕のある剥片1、剥片1、礫・破損礫16⑤頁岩（50.0）、メノウ（50.0）、砂岩⑥礫群主体

石器集中6　①Ⅲ層②単独出土③1点④剥片1⑤黒曜石（100.0）

石器集中7　①Ⅲ層②単独出土③1点④石核1⑤砂岩（100.0）

石器集中8　①Ⅴ層②単独出土③2点④破損礫1⑤砂岩

ＡＴ下位の石器群には石器集中9から石器集中13の5地点がある。調査区のやや東寄りに分布している（第6図）。出土石器の総点数はどの石器集中においても10点以下であり、ＡＴ上位の石器群と比較すると規模は小さい。中でも石器集中11～13は単独出土であり、石器群の広がりは検出できなかった。

概要は以下のとおりである。

石器集中9　①Ⅶ～Ⅸａ層②8ｍ×4ｍ③10点④尖頭器1、彫刻刀形石器1（2）、スクレイパー1、敲石1、剥片4、礫1⑤黒曜石（44.4）、チャート（33.3）、頁岩（11.1）、砂岩（11.1）、凝灰岩

石器集中10　①Ⅸａ～Ⅸｃ層②4ｍ×6ｍ③8点④両面調整石器1、彫刻刀形石器1、微細剥離痕のある剥片1、剥片2、礫・破損礫3⑤頁岩（60.0）、チャート（40.0）

石器集中11　①Ⅸｃ～Ⅹａ層②2ｍ×2ｍ③2点④微細剥離痕のある剥片1、破損礫1⑤頁岩、安山岩（100.0）

石器集中12　①Ⅸｃ層②2ｍ×2ｍ③2点④ナイフ形石器1、礫1⑤黒曜石（100.0）、メノウ

石器集中13　①Ⅹ層②単独出土③1点④破損礫1⑤頁岩

（2）石器集中地点

石器集中1（第7～17図、図版4、5）

分　布（第7・9図）　平面分布は南北12ｍ、東西10ｍの範囲に広がるが、中心は北東寄りの7ｍ×4ｍの小範囲である。この小範囲は、さらに小さな3つの集中域に分離することができる。これら3つの集中域は器種、石材に大きな偏在性を見いだすことができる。集中域ａは砂岩製の礫・破損礫が1.5ｍ四方の小範囲に分布している。礫群1と呼称する。集中域ｂは頁岩製の小型石核が11点まとまって出土している。

集中域cは前二者に比較してやや広い範囲に広がり、頁岩製の剥片が主体を占める（第9図）。

垂直分布は47.89m～48.31mの範囲に広がる。発掘時の出土層位はⅢ層と記載されている。特に、礫群1は上下に分散することなく安定した様相が見られる（第8図）。

器　種（第10～17図）　1～4はナイフ形石器である。1～3は幅広の剥片を素材にし、横位に用いている。1は2側縁調整のナイフ形石器で、調整は背面側にのみ面的剥離調整が施されている。素材剥片の打面は単一打面であり、右側縁に残置している。背面の一部に自然面が観察される。刃部はやや傾斜したシャープな縁辺を呈している。2の打面相当部は右側縁側に設定され、やや荒い調整によって打面部は除去され、鋸歯状を呈している。先端部には微細な調整痕が施されている。左側縁の基部には急角度の微細な調整痕が観察される。3も1と同様に単一打面を右側縁に残置している。基部は荒い剥離が施され、左側縁は折断によって形成されている。4は右側縁側が欠損していると考えられる。左側縁には背面、腹面の両方向から急角度調整が施され1～3とは調整の仕方に相違が認められる。

5は彫刻刀形石器である。自然面をもつ剥片を分割して、分割面を打面として彫刻刀面を作り出している。

6～18は石核である。石核の大きさによって、6～16は小形、17・18は大形の石核に分類される。また、両者は石材によっても明瞭に分離される。17・18は頁岩を利用し、本地点から出土した剥片と同様の石質である。しかし頁岩、安山岩を利用した6～16はいずれも単独母岩であり、剥片、砕片に同一母岩を1点も見いだすことができない。つまり本地点において、小形の石核からは剥片剥離が行われていないことが理解される。

小形の石核は自然面を残さない6～11と自然面を残す12～16の両者が認められる。前者は、直方体状（サイコロ状）を呈するものが主体を占める（6・8・9・11）。打面の転位は頻繁に行われ、打面調整の施されるものと平坦打面のものが認められる。作業面は概して一定せず、細石刃剥離作業面と同様な樋状剥離痕をもつものもある（8）。頭部調整は一般に行われる。また、主要剥離面が残り、剥片素材と考えられるものもある（7）。

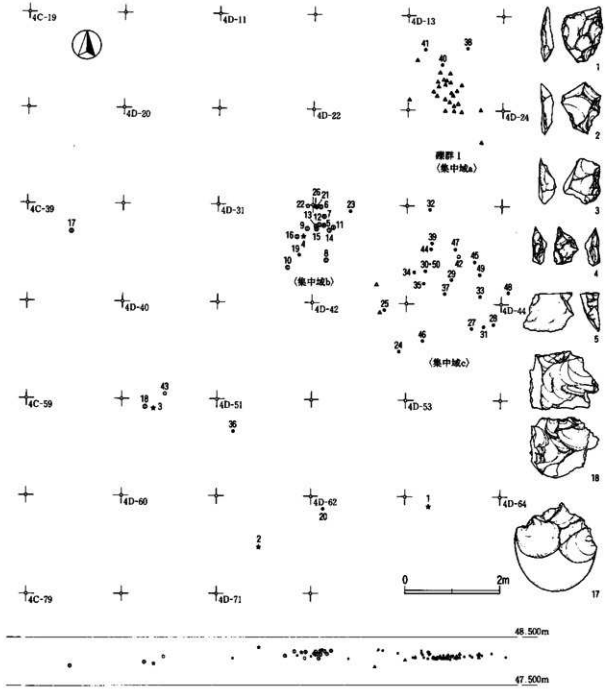
自然面を残す後者は、直径5cm前後の小礫を分割して、分割面を打面として小剥片剥離を行っている。打面は、ほとんど平坦打面である。頭部調整は、一般に施されている。打面転位は前者よりも顕著でないが、180度打面転位が頻繁に行われている。

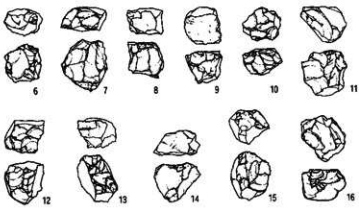
17は扁平な円礫を素材にし、両刃の礫器状に剥片剥離を行っている。18は直方体を呈した石核で、打面調整、頭部調整は顕著でない。自然面を一部に残している。打面転位を頻繁に行っている。

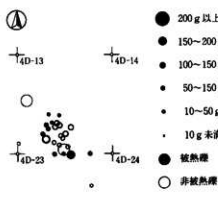
19～50は剥片である（22・42・43は微細剥離痕のある剥片）。

接　合（第15図）　接合資料1は3点の剥片（27～29）が接合したものである。平面分布は集中域cに集中している。集中域cには同一母岩系の石材が多くあるが接合資料は本資料のみである。27と29は剥離後に分割されたものである。

石　材　剥片石器は頁岩（1～3・5～8・10～18・23～25・27～40・42～50）、チャート（4、19）、安山岩（9・20・21・26）、メノウ（22・41）が利用されている。礫・破損礫は砂岩、チャート、頁岩である。剥片石器の石材で、1～3・17・18・27～40・42～50は自然面が黄土色、剥離面が緑がかった薄茶色を呈する同系統の頁岩である。母岩別分類は困難であるが、接合関係の認められた27～29は頁岩1と呼称した。この同系統のもの以外の頁岩はほとんど単独母岩である。特に小形の石核のほとんどが単独母岩で

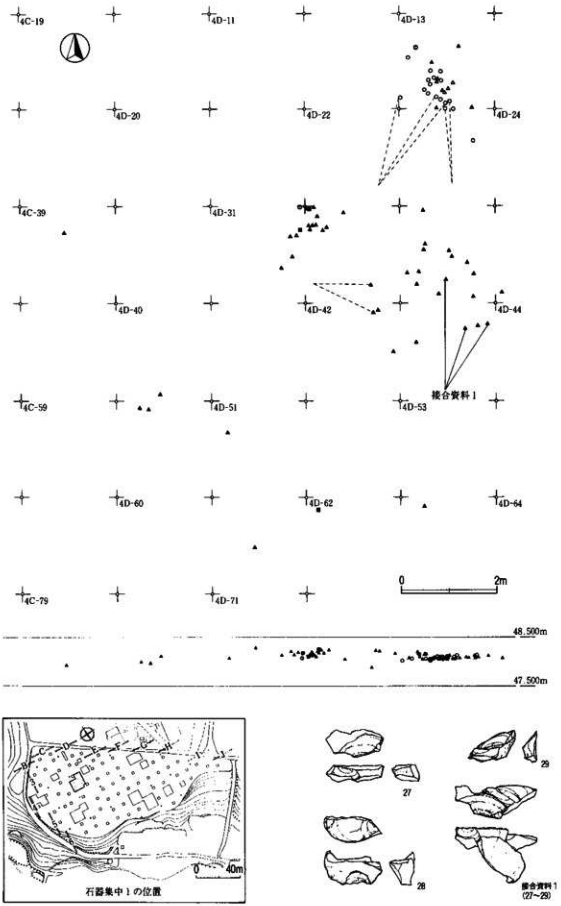




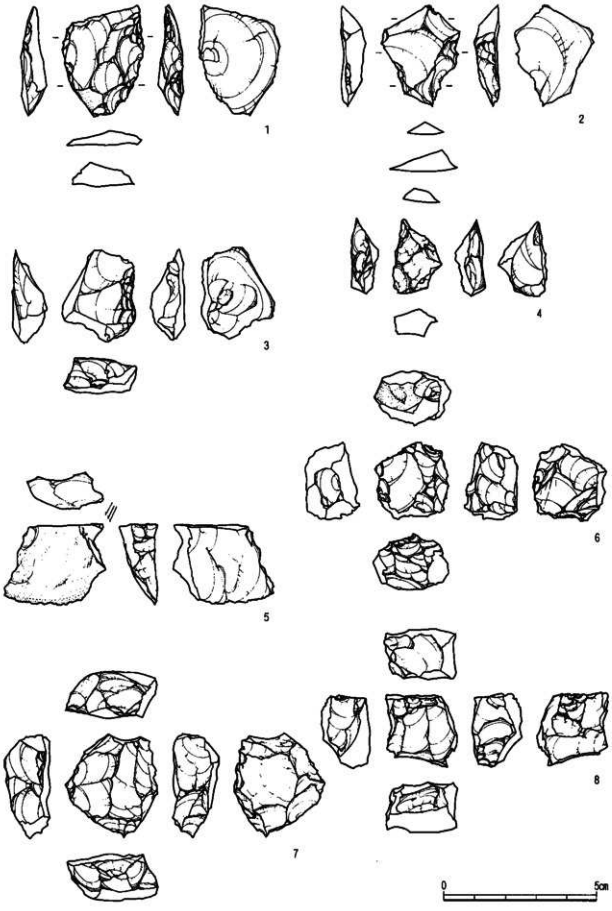


第7図　石器集中1　石器出土分布図ー器種別

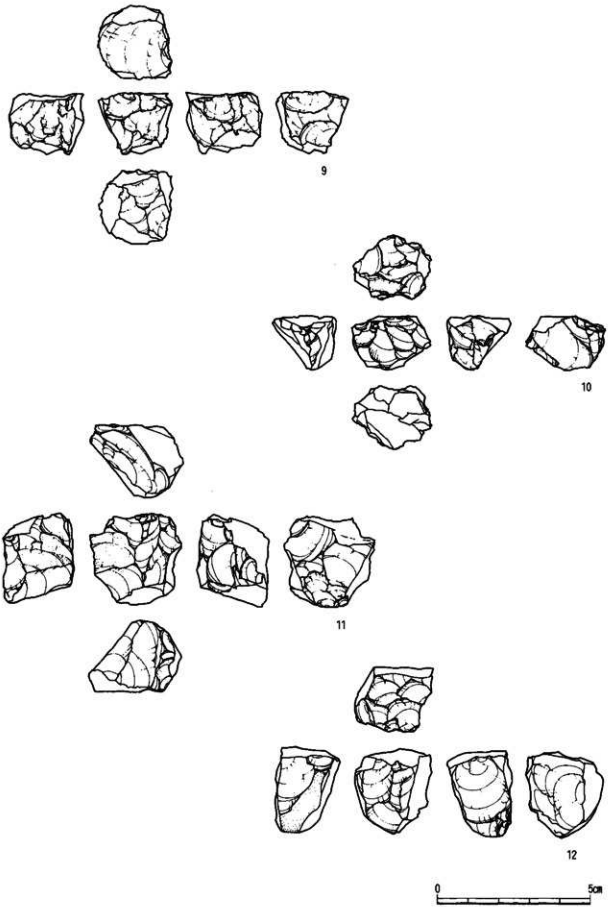
第8図　礫群1　構成礫の重量・被熱状況



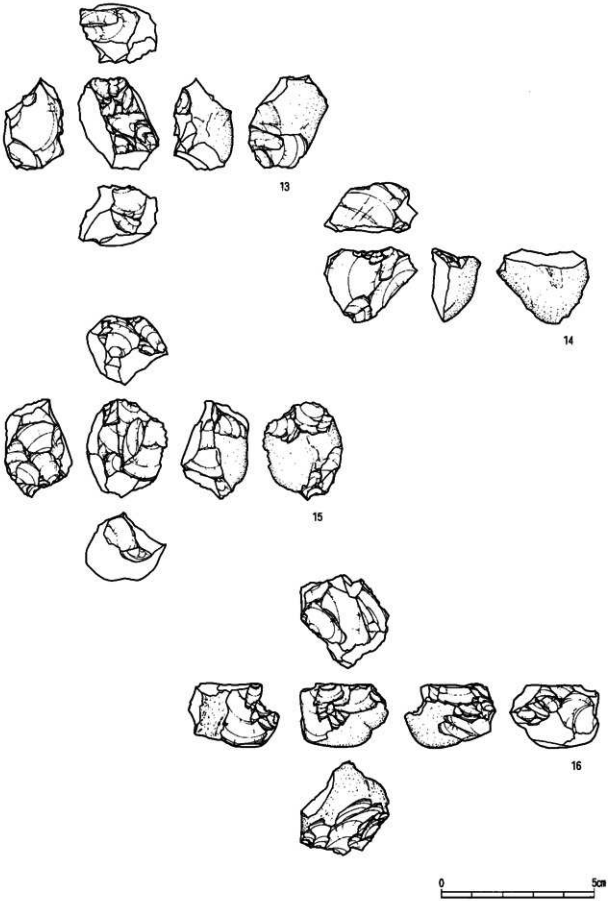
第9図　石器集中1　石器出土分布図－石材別(接合関係)



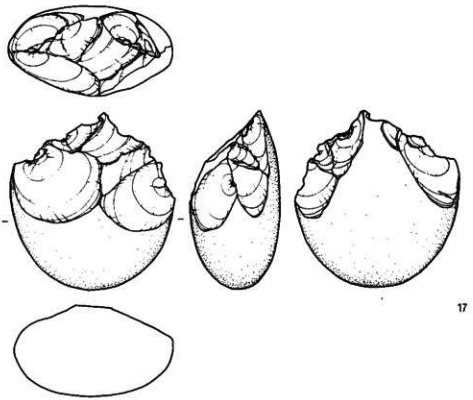
第10図　石器集中１　出土石器（１）



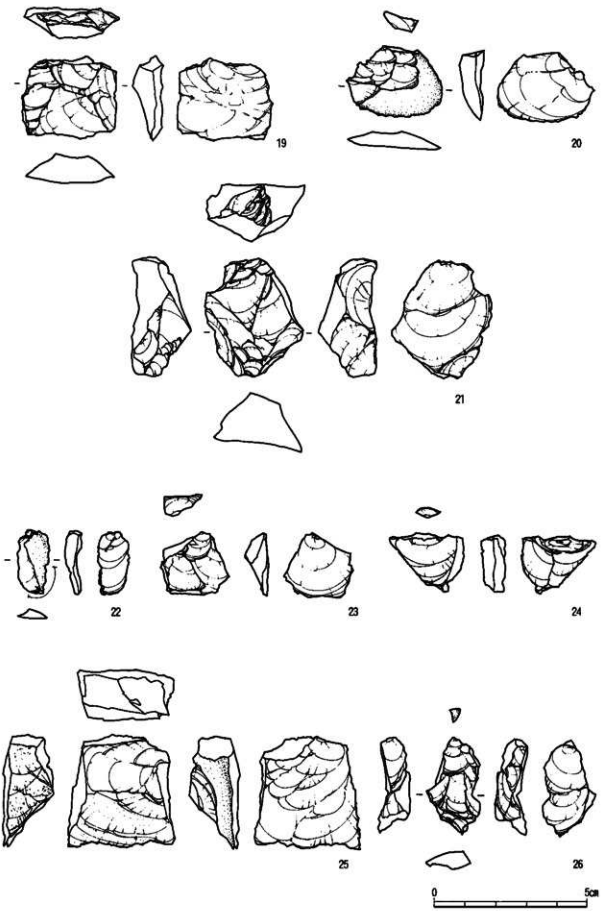
第11図　石器集中1　出土石器(2)



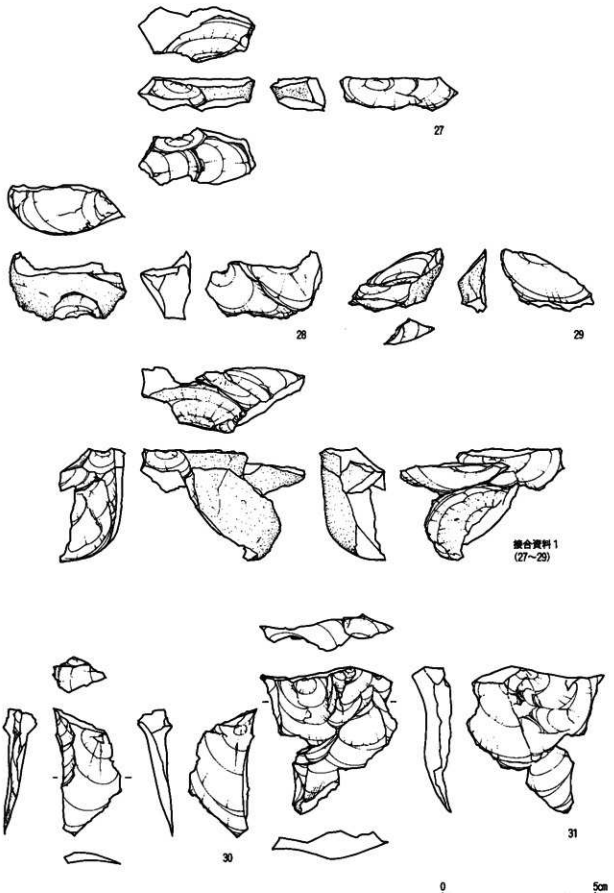
第12図　石器集中１　出土石器(３)



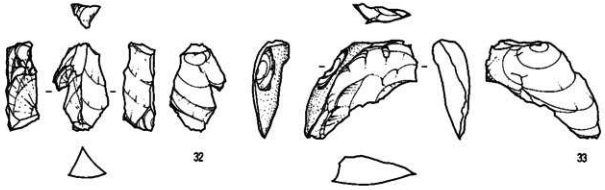
第13図　石器集中1　出土石器(4)

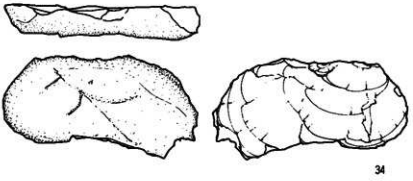


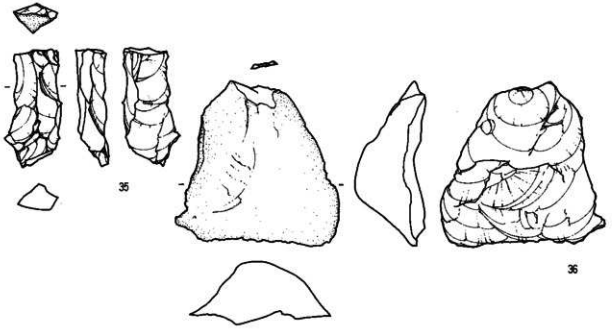
第14図　石器集中1　出土石器(5)



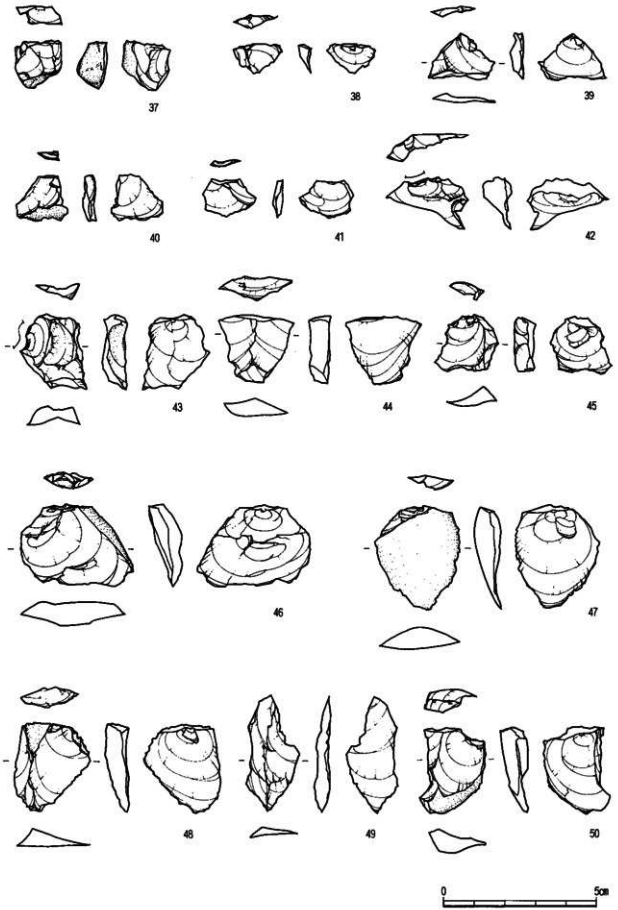
第15図　石器集中1　出土石器(6)



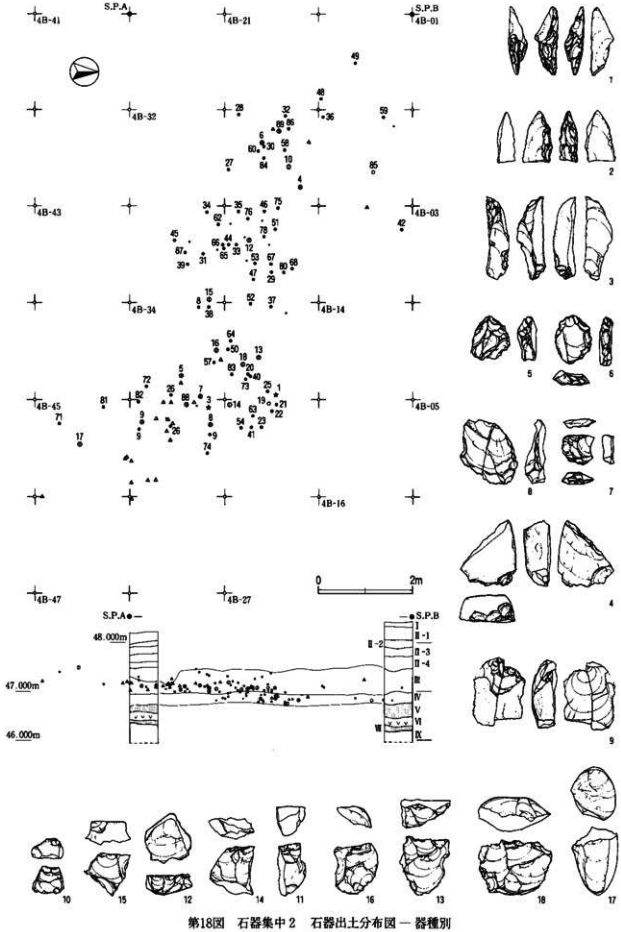




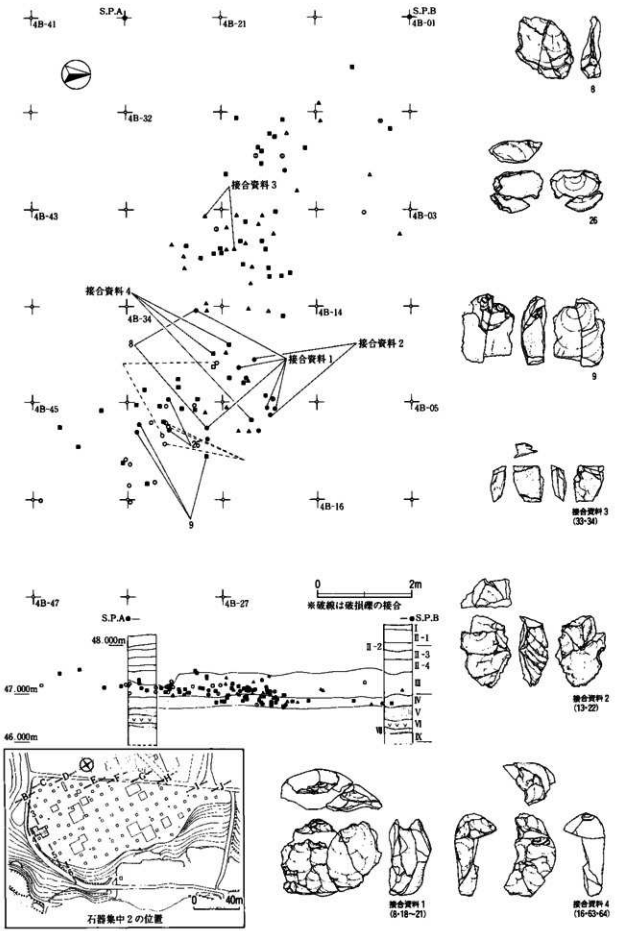
第16図　石器集中1　出土石器(7)



第17図　石器集中1　出土石器(8)



第18図　石器集中２　石器出土分布図－器種別



第19図　石器集中２　石器出土分布図－石材別(接合関係)

あることは注目される。本地点で利用される石材のうち、自然面の観察が可能なものはすべて円礫状を呈し、河原石を利用したものと考えられる。以下に母岩分類の可能な石材について説明する。

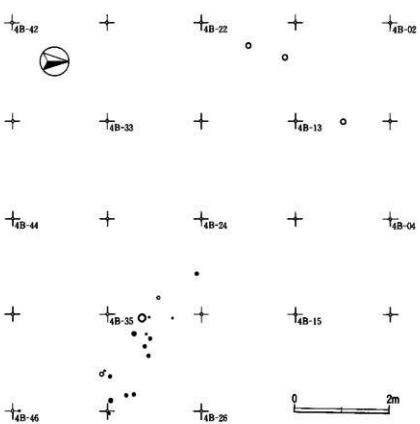
頁岩1（27～29）　接合資料によって確実に同一母岩と判断できたものである。先にも述べたが、ほかにも同一母岩と思われるものもあるが、いずれも判断が困難であったため頁岩1のみを報告する。この石材の風化剥離面は緑がかった薄茶色を呈し、節理が縦横に走っている。また黒色の斑点が散っている。節理面は緑がかった黄土色を呈し、ややざらついている。自然面も同様な色を呈し、なめらかな面となっている。

礫　群（第8図）　石器の集中域とは重複せず、独立した集中域を形成する（集中域C）。直径約1.5mの範囲に分布している。構成礫は完形礫11点、破損礫13点である。礫群内での接合は2個体6点である。大きくはチャートの完形礫と砂岩の破損礫に分離され、後者は被熱により赤化している。

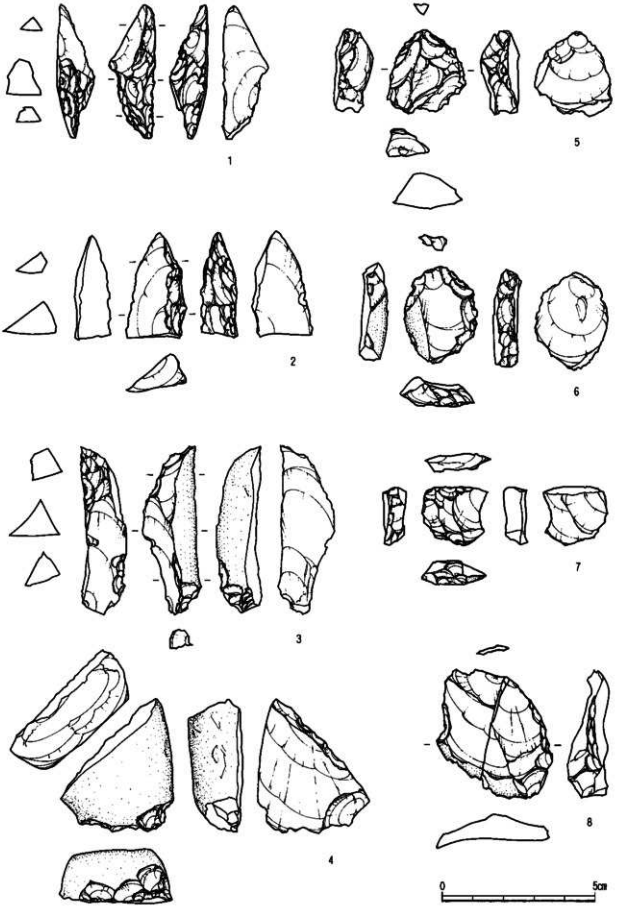
石器集中2（第18～30図、図版3～7）

分　布（第18・19図）　平面分布は南北8m、東西10mの範囲に、特に偏在することなく分布している。しかし、注記番号96～119（挿図番号2・11・24・43・55・56・61・69・70・77・79）の出土位置は調査時の記録の不備により不明である。番号の順序からこれらの分布はやや東側に寄って出土していると推測される。このことは主要な石器及び接合関係は東側に偏在していることからもうかがえる。礫・破損礫も同様である。礫群1と呼称する。

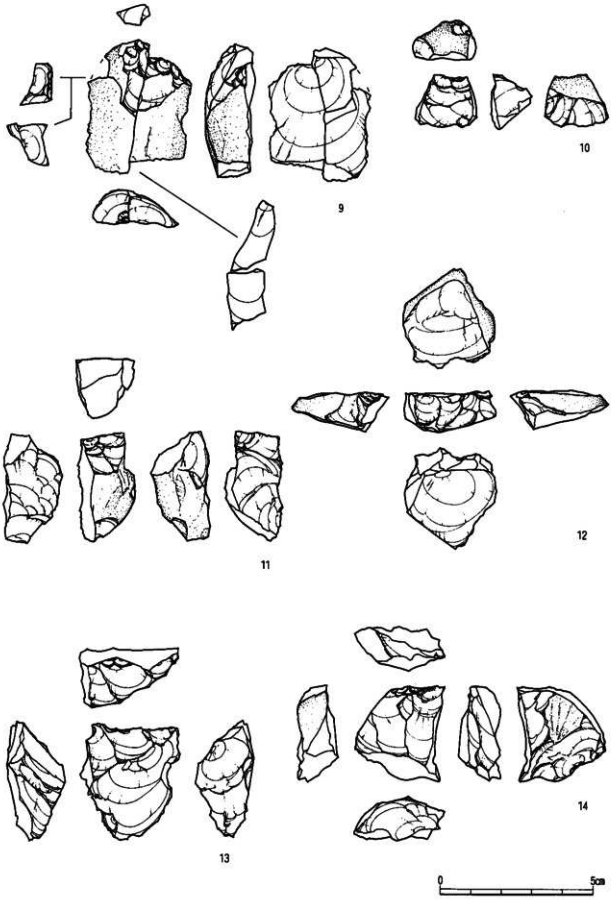
垂直分布は46.71m～47.51mの範囲に広がる。垂直分布図からはⅢ層を中心にⅣ層にかけて出土しているように見える。しかし、調査時の所見はⅣ～Ⅶ層となっていることと、発掘深度もⅦ層を抜くまで調査



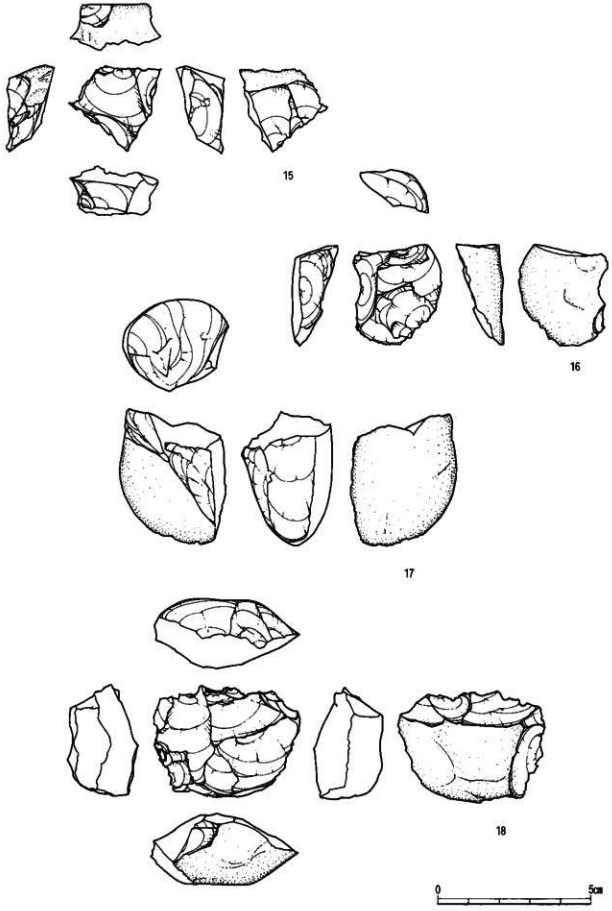
第20図　石器集中2　礫群1構成礫の重量・被熱状況



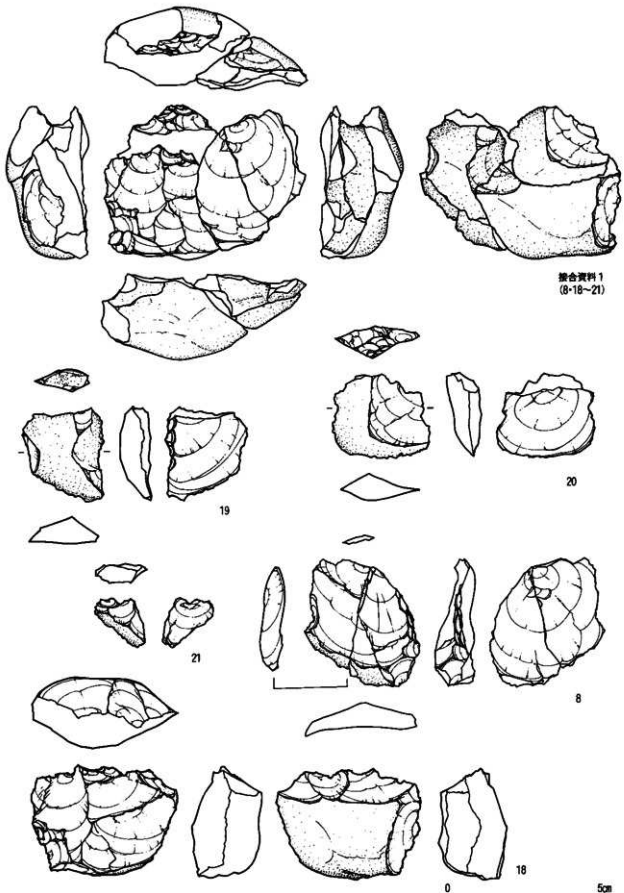
第21図　石器集中２　出土石器(１)



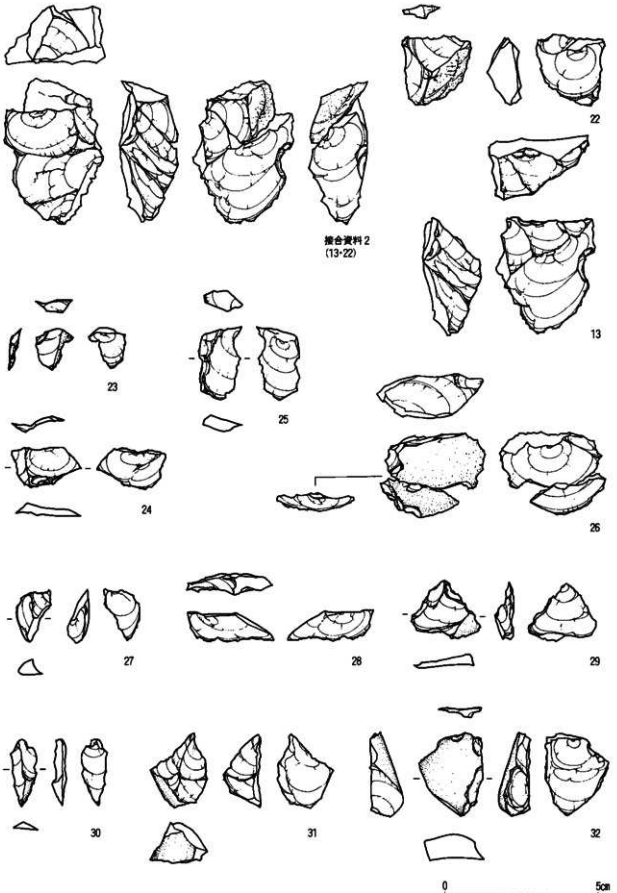
第22図　石器集中２　出土石器（２）



第23図　石器集中２　出土石器(３)

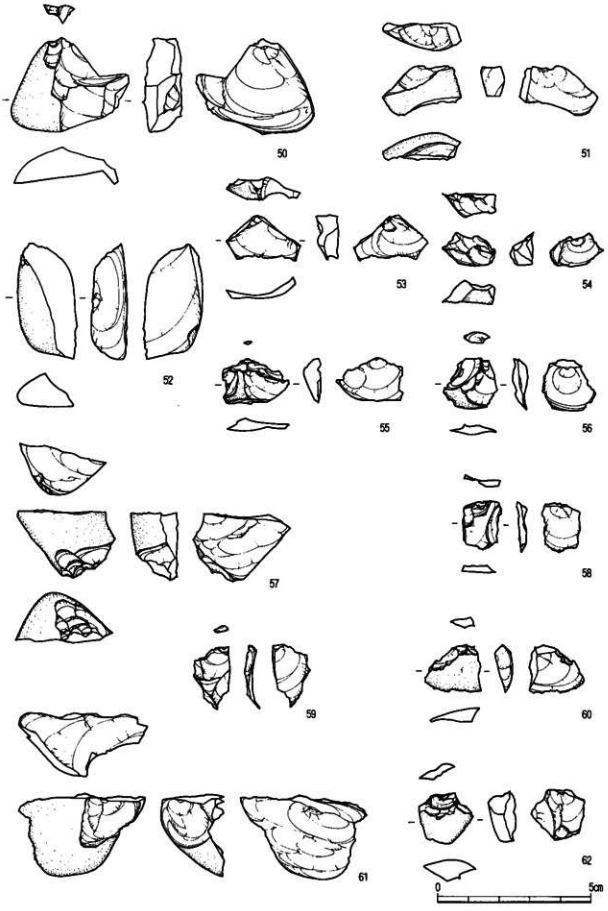


第24図　石器集中2　出土石器(4)

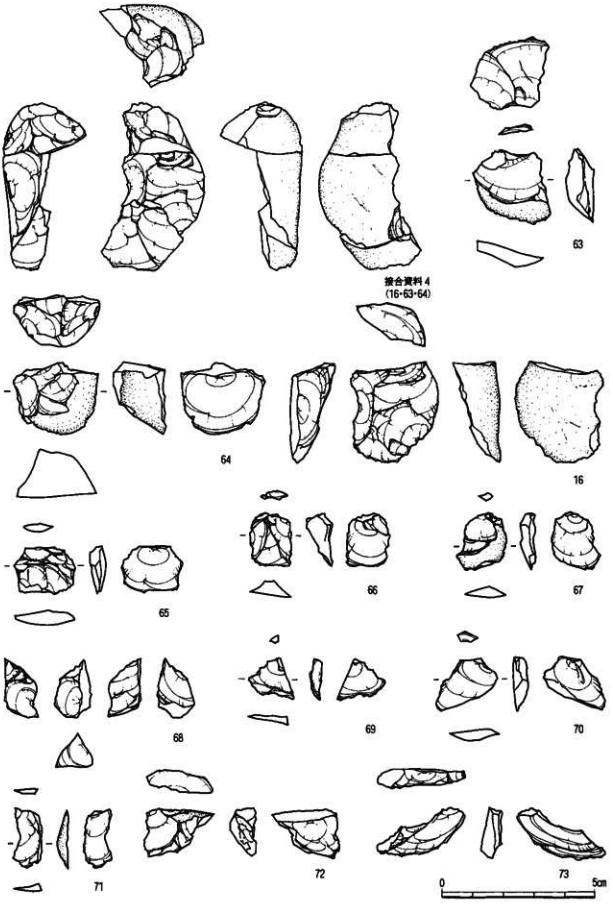


第25図　石器集中2　出土石器(5)

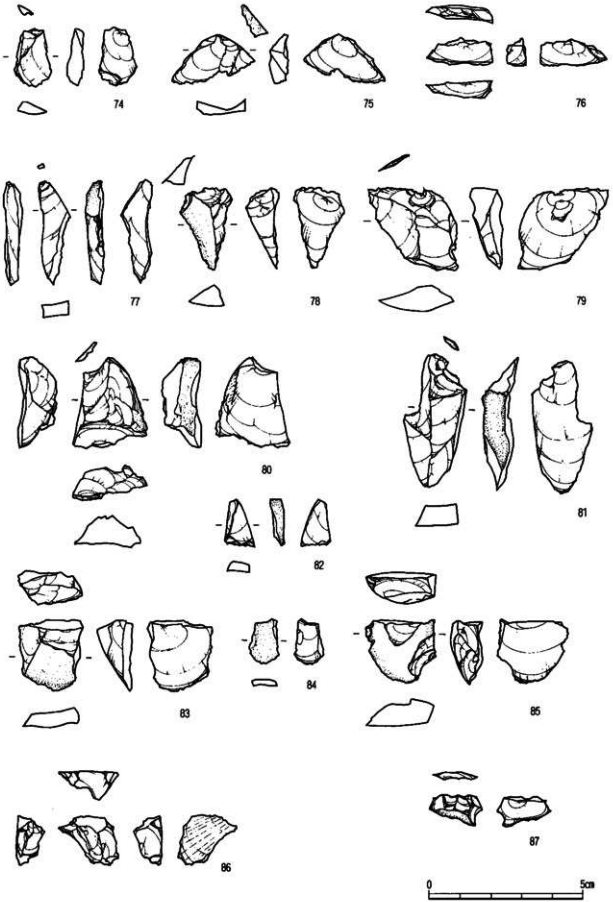
第26図　石器集中2　出土石器(6)



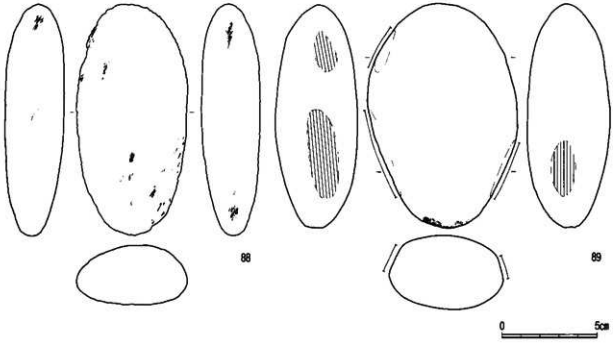
第27図　石器集中２　出土石器(７)



第28図　石器集中2　出土石器(8)



第29図　石器集中２　出土石器(９)



第30図　石器集中2　出土石器(10)

していることが土層断面図から推測されることから、本来の出土層位はⅣ～Ⅵ層を中心とするものであると考えられよう。これは、土層断面を地形の傾斜に垂直に設定しなかったために、西側に傾斜している地形の影響で、土層断面図と石器の垂直分布がずれてしまったものと解される。

器　種（第21～30図）　1～3はナイフ形石器である。1は2側縁調整のものである。主要剥離面側から急角度の調整を施している。右側縁の先端側には背面側からの調整も観察される。幅広の剥片を素材にし、素材を横位に用いている。打面は調整によって除去されている。2はナイフ形石器の先端部である。おそらく2側縁調整のものと推測される。1と同様に主要剥離面、背面の両方向から急角度の調整が施されている。幅広の剥片を素材にし、素材を横位に用いている。3は1側縁調整のナイフ形石器である。断面三角形の縦長剥片を素材にして、素材を縦位に用いている。左側縁の先端側に主要剥離面側から急角度の調整が施されている。刃角が鈍いこと、刃部相当部の右側面が自然面であることなどから、先端を意識した調整と考えて「石錐」とした方がよいかもしれない。

4～9はスクレイパーである。5～7は安山岩製の小形のスクレイパーである。9は欠損により刃部再生が施されたものと考えられる。

10～18は石核である。すべての石核が自然面を残し、打面は調整が施されない単一打面である。10～15は剥片を素材にして小剥片を剥離している。16～18は礫又は分割礫を利用したものと考えられる。打面転位は頻繁に行われているが、石核の形態が直方体（サイコロ状）を呈するものはない。

19～87は剥片である（19・85は微細剥離痕のある剥片）。

88、89は磨石である。88は89のように顕著な磨痕は見られないが、表裏、側面の一部に浅い磨痕が観察される。89は3か所に顕著な磨痕をもつ。いずれも側面に位置し、平坦面を形成している。楕円形であったであろう平面形もかなり変形している。先端部分には敲打痕らしきものが観察される。

接　合（第24～26・28図）　接合資料1はスクレイパー（8）・石核（18）・微細剥離痕のある剥片（19）、打面形成剥片（20）・剥片（21）の合計5点の接合資料である。8と19は、主要剥離面を18の石核に向

けていないことから、この石核（18）が剥片素材であり、8・19が18の石核から剥離されたものでないということが理解される。つまり、自然面をもつ分厚い剥片を剥離した後、8・19へと剥離が進み19はスクレイパーとして仕上げられた。18・8・19を剥離した石核は本地点では出土していない。また、最初に剥離された分厚い剥片は主要剥離面側からの打撃により打面形成剥片（20）が剥離され、主要剥離面を作業面として剥片剥離を進めている。その後打面転位を行い、21が剥離されている。

接合資料2は石核（13）と剥片（22）の接合である。

接合資料3は剥片2点（33・34）の接合である。33は通常石核としてもよいかもしれないが、接合面が節理面である可能性があるために今回は剥片として報告した。

接合資料4は石核（16）・打面形成剥片（64）・剥片（63）の合計3点の接合である。打面形成は接合資料1と同様に作業面側からの打撃によってなされている。

石　材　剥片石器は流紋岩（8～10・13・18～26）、頁岩（1～4・11・12・33～48・50～56）、安山岩（5～7・16・17・27～32・49・63～84）、チャート（14・15・85・86）、メノウ（58・60・62）、砂岩（61）、凝灰岩（57）、黒曜石（59）が利用されている。礫・破損礫は安山岩・砂岩の二種である。

流紋岩1（8～10・13・18～26）：風化剥離面にはキラキラ光る斑晶が多く見られ、白色を基調とし、濃青灰色が縞状に走っている。同色の斑点も多く観察される。自然面も同様であるが、斑晶は見られないなめらかな面である。特徴的な石材であり、ほかの石材とは容易に分離できる。

頁岩1（4・33・34・45）：自然面は茶褐色を呈し、黒色の斑点も見られる。風化剥離面は黒色を呈するが、縞状に節理が走っている。節理面は砂岩の風化剥離面のようにザラザラした茶褐色を呈している。

頁岩2（36・37・42）：風化剥離面は青灰色を呈し、光沢がある。自然面は白色を呈し、なめらかな面である。

頁岩3（35・38）：風化剥離面は緑がかった青灰色を呈し、節理が走っている。自然面は青灰色または青緑白色を呈するなめらかな面である。

チャート1（85・86）：風化剥離面は濃青灰色で光沢があり、なめらかな面である。自然面はチャートに一般的に見られるもので、ややざらついた円礫状を呈している。

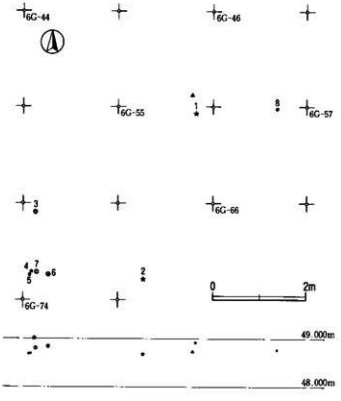
安山岩1（6・27～32・84）：ほかの安山岩に比べて黒みを帯びており、分類は容易である。本来の剥離面に近い色調である。自然面はきめが細かく、安山岩に独特なザラザラ感はあまりない。

礫　群（第20図）　調査時の不備により14点の礫・破損礫の出土位置が不明であるので、詳細は述べられない。礫群は本石器集中地点の東側と西側に形成されている。前者は後者に比べて出土点数4点と小規模である。西側のものは直径3mの範囲に18点が分布している。すべて破損礫であり、被熱により赤化している。

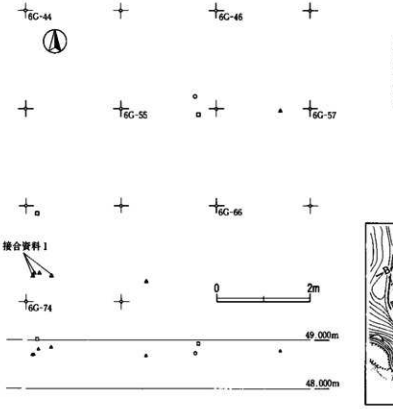
石器集中3（第31～33図、図版8・9）

分　布（第31・32図）　平面分布は南北4m、東西6mに広がり、全体的に散漫な状況を呈している。しかし、同一母岩であるチャート1だけは集中区の南西側に小さな集中域を形成している。垂直分布は48.68m～49.02mの範囲に広がる。出土層位は発掘時の所見ではⅢ層である。

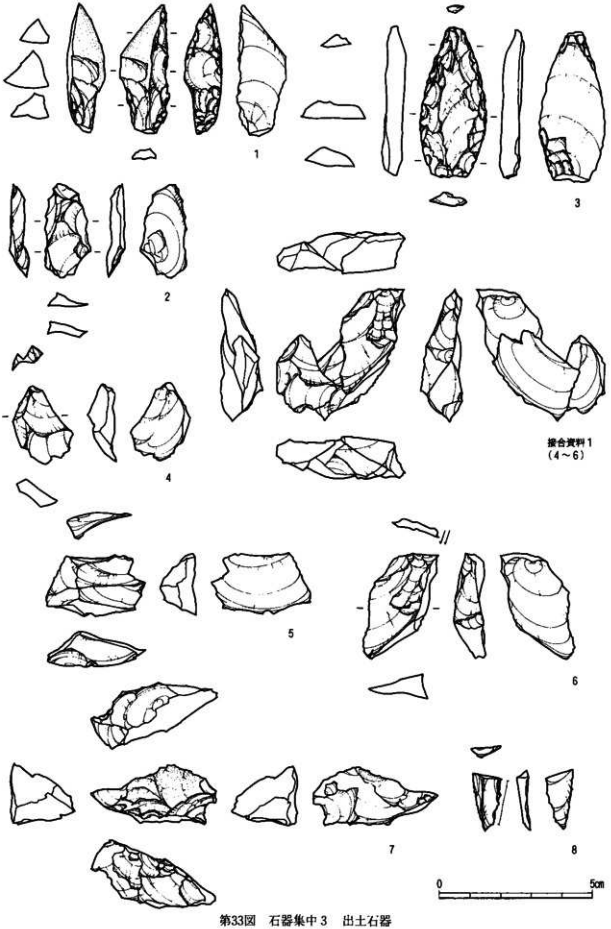
器　種（第33図）　1、2はナイフ形石器である。1は2側縁に急角度の調整を施し、断面を三角形に仕上げている。右側縁には背面側からの急角度調整も観察される。刃部には自然面が残っている。やや厚めの剥片を縦位に用いている。打点は一部除去されているが、残っている打面から平坦打面と考えられる。



第31図　石器集中３　石器出土分布図 — 器種別



第32図　石器集中３　石器出土分布図 — 石材別(接合関係)



第33図　石器集中3　出土石器

2は幅広の剥片を素材にし、素材を横位に用いている。微細な調整痕が左側縁先端部と中央部の一部に観察される。平坦打面を残置する。

3は尖頭器である。基部は欠損している。剥片素材であり、背面側の周縁に調整を施している。剥片の主要剥離面側には、先端部と基部の一部に面的調整が施されている。

6は彫刻刀形石器である。彫刻刀面は2面観察されるが、これは剥片剥離以前の剥離痕である可能性もある。

8は微細剥離痕のある剥片である。

4・5・7は剥片である。

接　合（第33図）　接合資料1は彫刻刀形石器（6）と剥片（4・5）の接合資料である。6→4→5と剥離が進められている。

石　材　剥片石器は凝灰岩（1・3）、チャート（4～7）、頁岩（2・8）が利用されている。礫は砂岩である。

チャート1（4～7）：風化剥離面が濃茶褐色を呈する特徴的なチャートである。色調は一定していない。節理面は明るい黄土色を呈し、一般にチャートに見られるものとは異なる

石器集中4（第34～38図、図版3・8・9）

分　布（第34・35図）　平面分布は南北2ｍ、東西3ｍの範囲に広がる。小さな集中地点であるため、器種・石材等の分布に顕著な偏在性は認められない。

垂直分布は47.27ｍ～47.75ｍに分布し、出土層位は発掘時の所見ではⅢ～Ⅴ層（Ⅴ層主体）と記載されているが、土層断面図と石器の垂直分布の図面上ではⅣ層が主体となっている。これも地形の傾斜によるものと思われる。

器　種（第36～38図）　1～3はナイフ形石器である。1は小形の素材剥片を縦位に用いている。背面側からの調整が右側縁に施される1側縁調整のナイフ形石器である。2は幅広の剥片を素材にし、素材を横位に用いている。右側縁は背面側からの急角度調整が施され、鋸歯状を呈している。打面は除去されている。3は縦長の剥片を縦位に用いたナイフ形石器で、右側縁の器体中央部から先端にわたって、背面側から調整が施されている。背面の一部には自然面を残している。打面は、微細な調整が見られる平坦打面である。

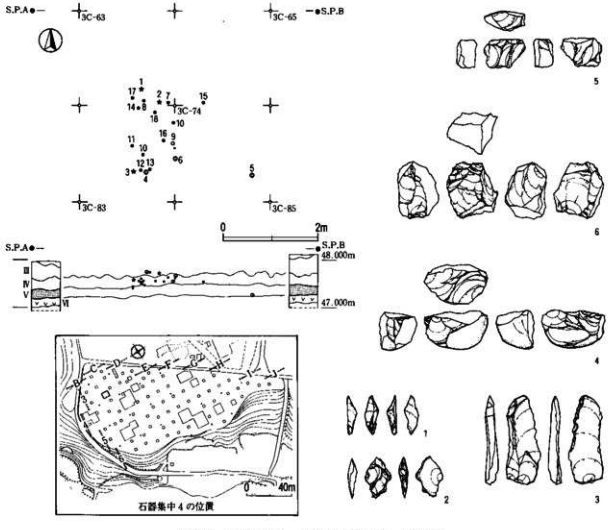
4～6は石核である。4は底面に自然面を大きく残す。打面調整は施されない。剥離方向は1方向からのみである。よって、剥離作業面は3面あるが、いずれも同一打面から剥離されている。5も打面調整は施されていない。打面転位は頻繁に行われているようで、かなり剥離が進行していると考えられる。風化が激しいために最終剥離面を決定するのは困難である。6は両設打面をもち、上設打面の方は自然面である。いずれも打面調整は施されていない。形態的にはサイコロ状を呈している。

7～18は剥片である（9は微細剥離痕のある剥片）。

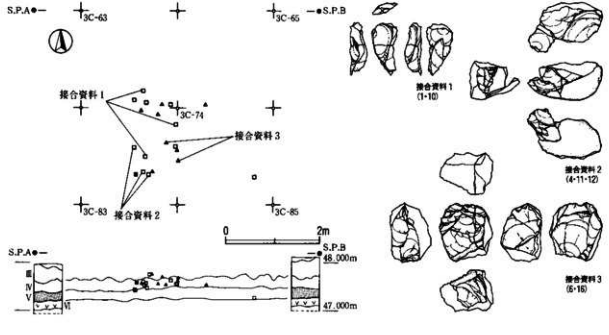
接　合（第37・38図）　接合資料1はナイフ形石器（1）と剥片（10）の接合資料である。これによって、ナイフ形石器の素材となった剥片の打面及び側面はかなり除去され、仕上げられていることがわかる。

接合資料2は石核（4）と剥片（11・12）の接合資料である。12は現打面から剥離されているが、11の打面はそれ以前のかなり早い段階のものと考えられる。

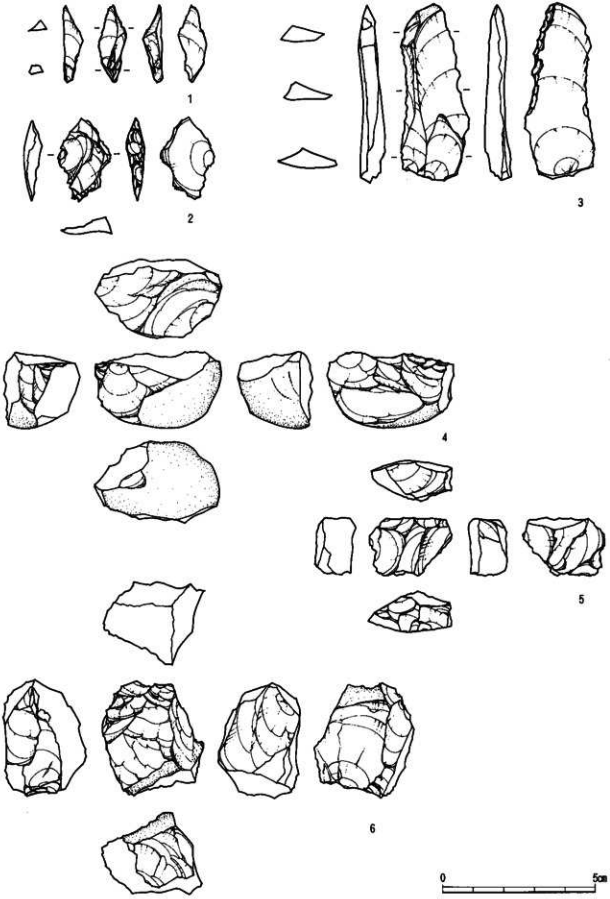
接合資料3は石核（6）と剥片（16）の接合である。上設打面に打撃を加えて剥離している。剥離面は



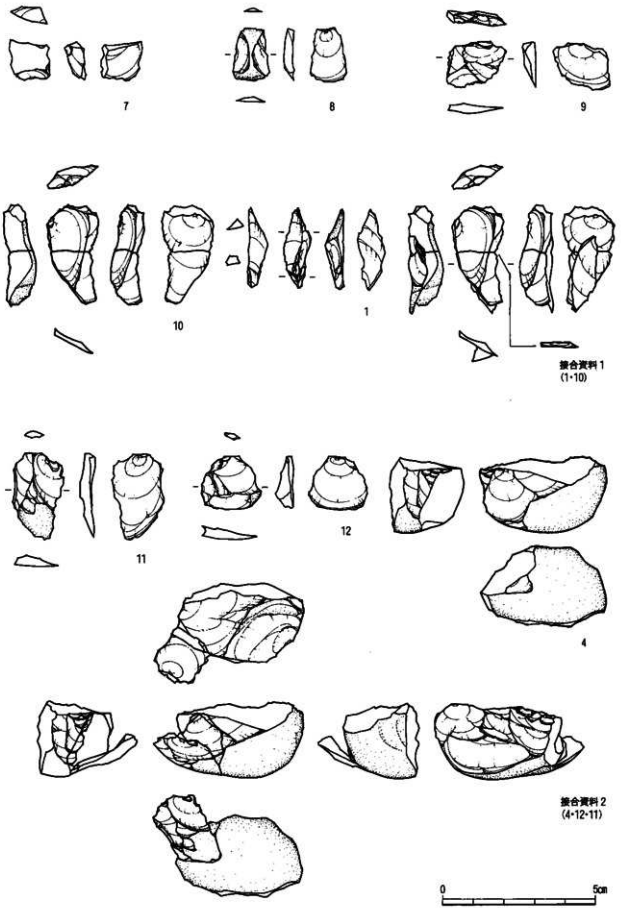
第34図　石器集中4　石器出土分布図－器種別



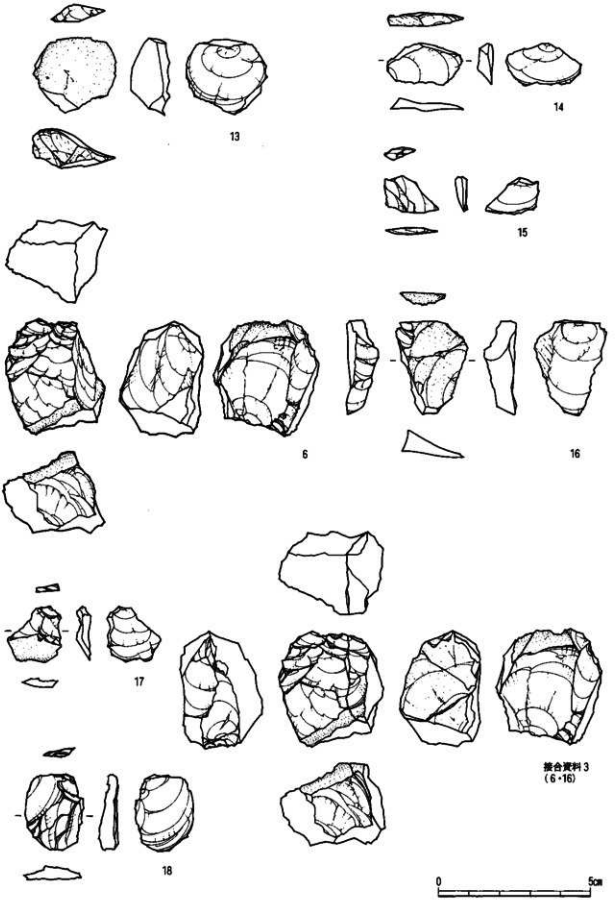
第35図　石器集中4　石器出土分布図－石材別(接合関係)



第36図　石器集中4　出土石器(1)



第37図　石器集中4　出土石器(2)



第38図　石器集中4　出土石器(3)

平坦であり、節理面状を呈している。

石　材　剥片石器の石材には凝灰岩（1・4・5・7～12・17）、チャート（6・13～16）、頁岩（2・18）を利用している。

凝灰岩1（1・4・7～12）：風化剥離面、自然面ともに白色を基調とし、淡緑色が霜降り状に散っている。特徴的な石材である。粒子は細かいが、表面はややザラザラ感がある。

チャート1（6・13～16）：節理が縦横に走り、剥片剥離に良好な石材とは言いがたい。自然面、風化剥離面ともに黒みがかった青色を呈し、節理面はやや赤みを帯びている。

頁岩1（2・18）：風化剥離面は灰茶褐色を呈し、光沢はない。黒色斑点が散っている。

石器集中5（第39～41図）

分　布（第39・40図）　礫、破損礫を主体とした集中区であるが、平面分布は南北7ｍ、東西5ｍの範囲に広がる。やや散漫ではあるが礫群として捉えた。

垂直分布は47.70ｍ～48.01ｍに広がる。Ⅳ層を主体として出土している。

器種・石材（第41図）　1は頁岩製の微細剥離痕のある剥片である。2はメノウ製の剥片である。

礫　群（第40図）　200ｇ以上の赤化した破損礫が主体を占め、6ｍ×2ｍの範囲に散漫な状況で分布している。3個体9点が接合関係にある（第39図）。

石器集中6・7・8（第42図、図版8・9）

石器集中6～8は単独出土のものであり、石器集中という名称にはそぐわないが、便宜上ここでは石器集中6・7・8として報告する。

石器集中6では、黒曜石製の剥片がⅣ層中から出土している。

石器集中7では、砂岩製の石核がⅢ層中から出土している。石核は底面と作業面の一部に自然面をもつ。打面は作業面側からの大きな剥離面で構成され、縁辺の一部には細かい調整が施されている。作業面からはやや幅広の剥片を剥離していることが分かる。

石器集中8は破損礫がⅢ層中から出土している。

石器集中9（第43～45図、図版8・9）

分　布（第43・44図）　平面分布は南北4ｍ、東西6ｍの範囲に広がり散漫な出土状態である。

垂直分布は47.68ｍ～47.90ｍに広がり、出土層位は発掘時の所見ではⅦ～Ⅸａ層である。

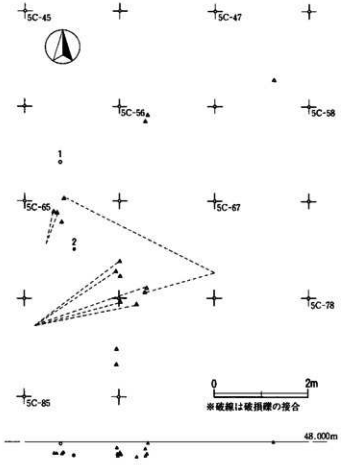
器　種（第45図）　1はスクレイパーである。稜のあるやや厚めの縦長剥片を用い、末端部に主要剥離面側から急角度調整を施して、刃部を形成している。2は彫刻刀形石器である。平坦打面からの加撃によって彫刻刀面を形成している。3は尖頭器とした。左側縁と、基部側が欠損している。側縁には、顕著な調整痕は見られない。8は敲石である。敲打痕が礫の両端に顕著に観察される。

4～7は剥片である。

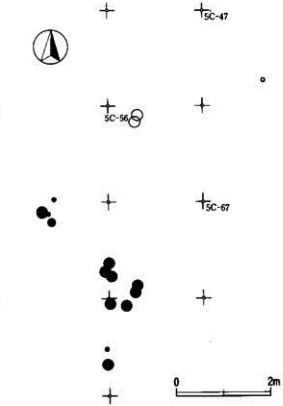
接　合（第45図）　接合資料1は剥片2点（4・5）の接合である。打面は節理面で、打面・頭部調整は施されていない。

石　材　剥片石器は黒曜石（4～7）、チャート（2・3）、頁岩（1）が利用されている。敲石（8）は砂岩、礫は凝灰岩である。

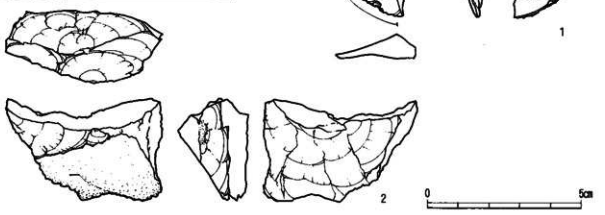
黒曜石1（4～7）：黒色がかって透明感はない。夾雑物はほとんど見られないが、風化剥離面の状況はチャートに非常に酷似している。



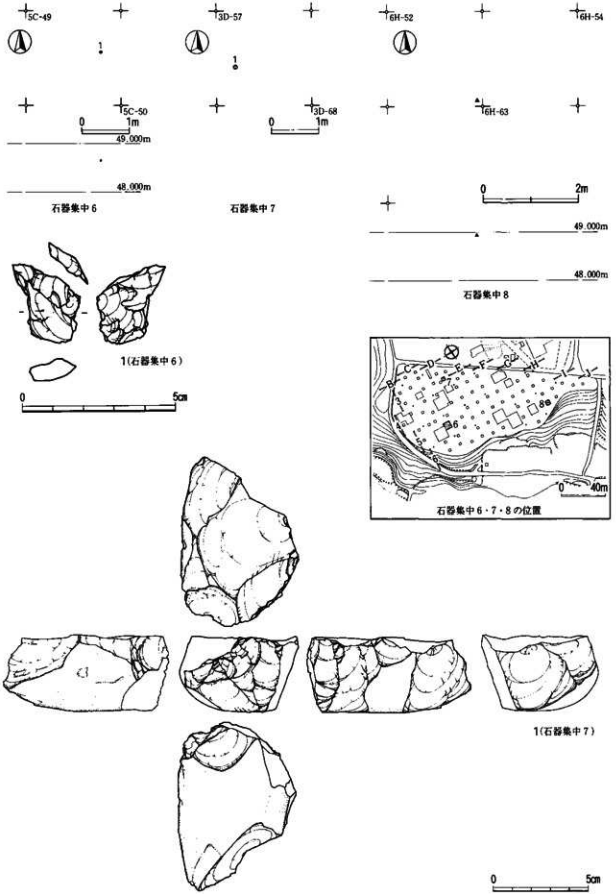
第39図　石器集中５　石器出土分布図－器種別(接合関係)



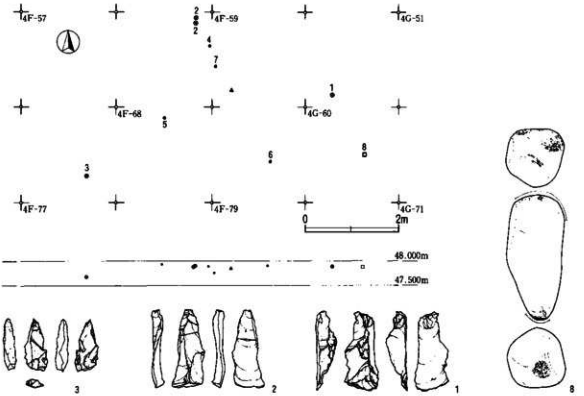
第40図　石器集中５
礫群１　構成礫の重量・被熱状況



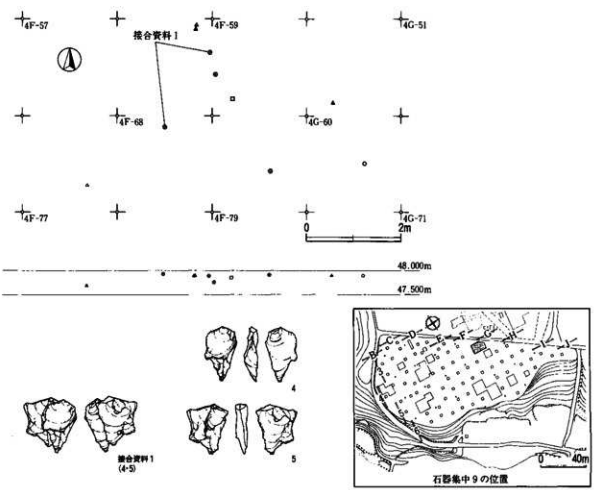
第41図　石器集中５　出土石器



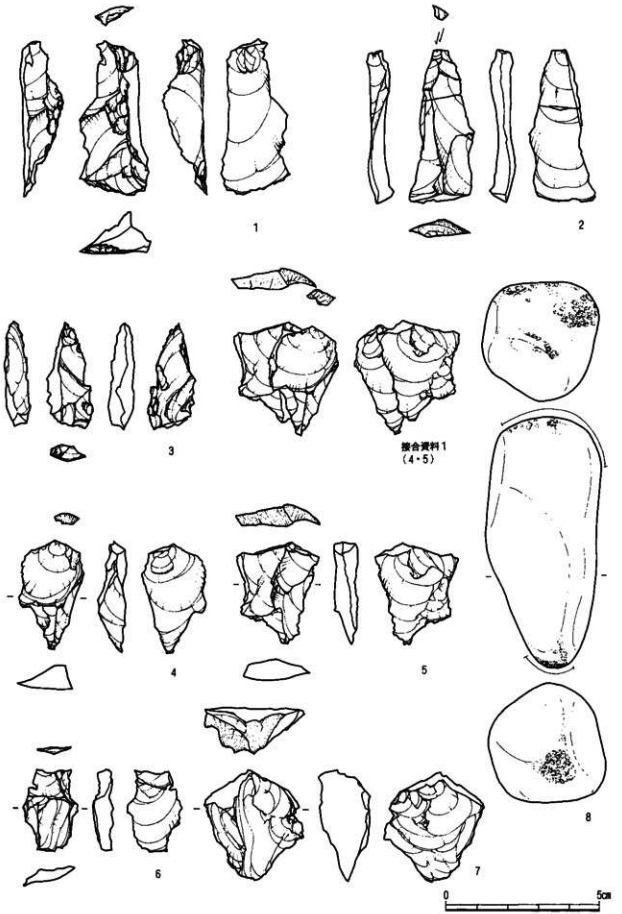
第42図　石器集中6・7・8　石器出土分布図と出土石器



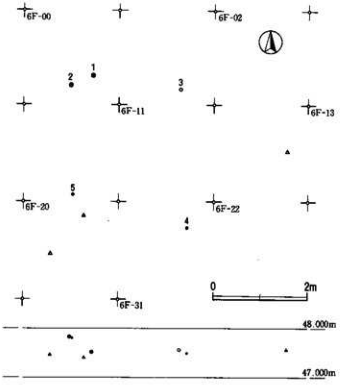
第43図　石器集中９　石器出土分布図－器種別

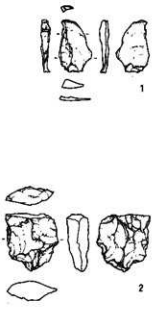


第44図　石器集中９　石器出土分布図－石材別(接合関係)

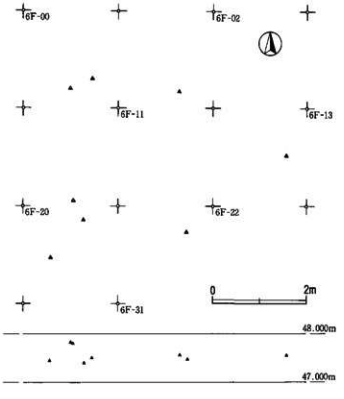


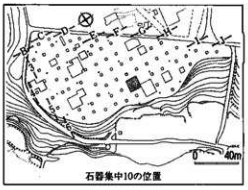
第45図　石器集中9　出土石器



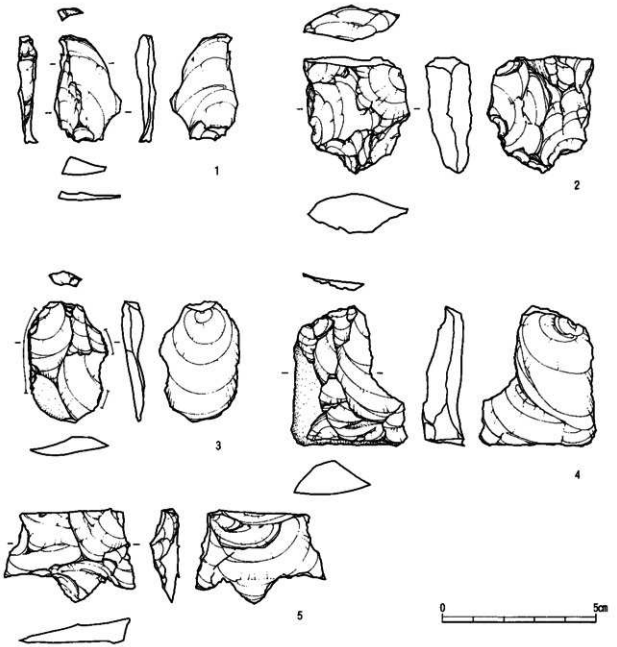


第46図　石器集中10　石器出土分布図－器種別





第47図　石器集中10　石器出土分布図－石材別



第48図　石器集中10　出土石器

石器集中10（第46～48図、図版８・９）

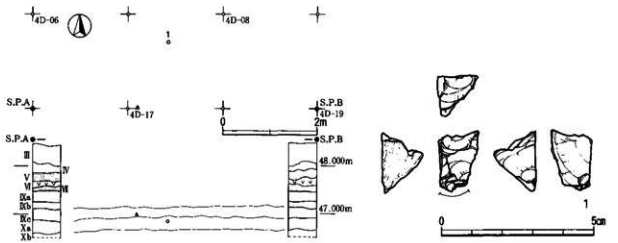
分　布（第46・47図）　平面分布は南北４ｍ、東西６ｍの範囲に広がり散漫な出土状況である。

垂直分布は47.39ｍ～47.81ｍに広がり、出土層位は発掘時の所見ではＫａ～Ｋｃ層である。

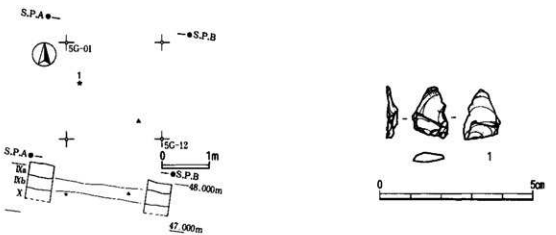
器種・石材（第48図）　１は頁岩製の彫刻刀形石器である。素材剥片の末端側から彫刻刀面を作り出し、素材剥片の打面も除去されている。２はチャート製の両面調整石器である。３は頁岩製の微細剥離痕のある剥片である。４は頁岩、５はチャート製の剥片である。破損礫は頁岩で構成される。

石器集中11・12・13（第49～51図、図版８・９）

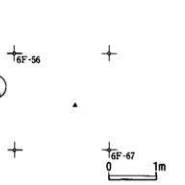
石器集中11～13は単独出土のものであり、石器集中という名称にはそぐわないが、便宜上ここでは石器集中11・12・13として報告する。



第49図　石器集中11　石器出土分布図と出土石器



第50図　石器集中12　石器出土分布図と出土石器



第51図　石器集中13　石器出土分布図

石器集中11・12・13の位置

石器集中11からは、安山岩製の微細剥離痕のある剥片１点と破損礫１点がⅨc層から出土している。

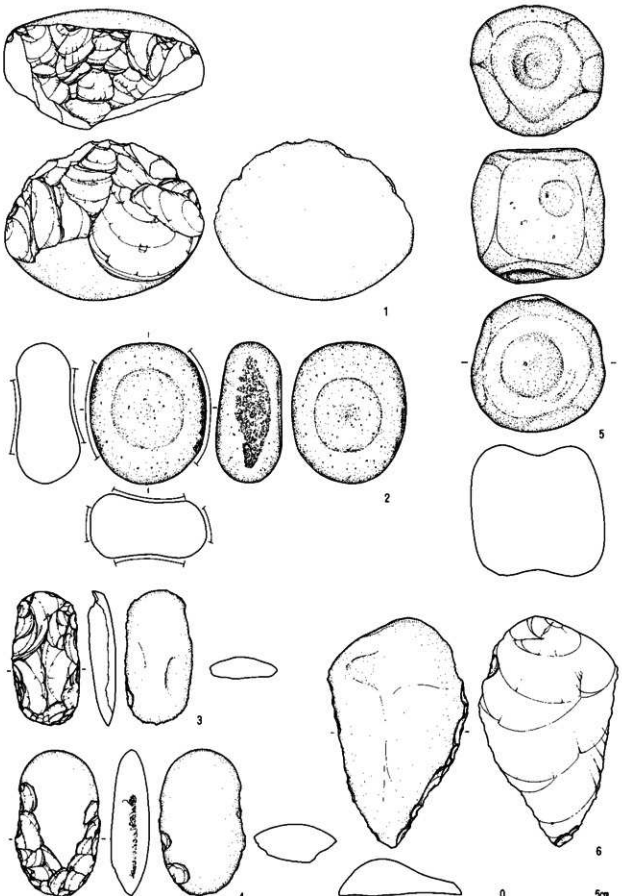
石器集中12からは、黒曜石製のナイフ形石器の先端部が１点と礫１点がⅨc層から出土している。

石器集中13からは、破損礫１点がⅨa層から出土している。

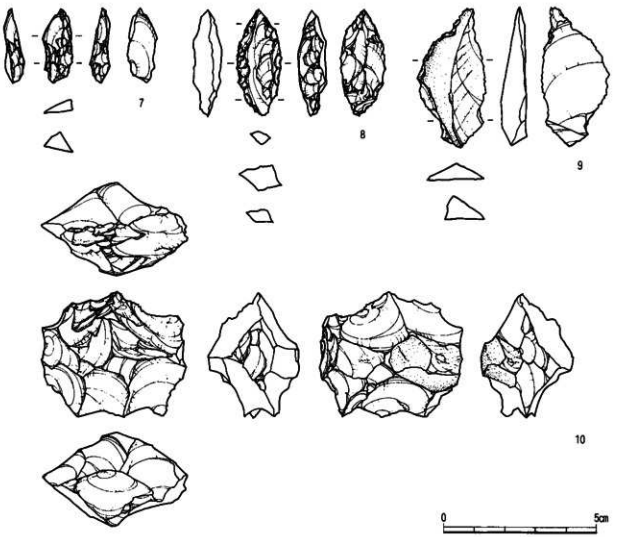
石器集中外　出土石器（第52・53図、図版10・11）

ここでは遺構とグリッド毎に一括して取り上げた石器について紹介する。

１・２は051住居跡の覆土中から出土した。１は砂岩製の石核である。円礫を素材にし、片刃礫器状に剥片剥離を行っている。２は砂岩製のいわゆるくぼみ石である。扁平な礫を素材にして、平坦面を敲打す



第52図　石器集中外　出土石器(1)



第53図　石器集中外　出土石器(2)

ることでくぼみ面を形成しているが、整形しているかのようになめらかな面を呈している。周縁には明らかな敲打痕が観察される。

3は5F-81から出土した粘板岩製の片面加工の石斧である。

4は025炉穴の覆土中から出土した砂岩製の片面加工の石斧である。側縁には敲打痕が観察され、特に右側縁に顕著である。

5は001住居跡から出土した砂岩製のくぼみ石である。上下2か所にくぼみ面があり、側面には少なくとも5、6面の磨面を形成している。

6は6F-02から出土したスクレイパーである。緻密な砂岩製の大形剥片を素材にして、主要剥離面から急角度調整を施し刃部を形成している。

7は6F-32から出土したチャート製の小形のナイフ形石器である。幅広の剥片を素材にし、素材を横位に用いている。主要剥離面側からの急角度調整を2側縁に施している。

8は4B-69から出土した黒曜石製の尖頭器である。幅広の剥片を素材にし、主に周縁に急角度の調整を施している。

9は4C-72から出土した砂岩製の微細剥離痕のある剥片である。

10は6F-43から出土した頁岩製の石核である。打面と剥片剥離作業面との角度が急角度な石核で、頻繁に打面転位を繰り返している。一部に自然面を有する。

観察表について　観察表は『佐倉市栗野Ⅰ・Ⅱ遺跡』を参考にした。

1．挿図№　実測図として掲載した遺物の通し番号。この番号は分布図の遺物番号と写真図版の番号に一致する。

2．遺物№　遺物の取り上げ番号（注記番号）。

3．器種　石器の器種を記載する。確定できないものに関しては備考で触れた。「（微細な）剥離痕のある剥片」については、従来、「加工痕のある剥片（Rフレ）」・「使用痕のある剥片（Uフレ）」などと呼称されていたものであるが、基準があいまいで判断が困難なものがあるため、今回は「（微細な）剥離痕のある剥片」として一括して呼称する。また「砕片」は、長さ・幅の両者が10.0㎜未満のものを指す。

4．打面　Cは自然面、Jは節理、Pは点状打面、Lは線状打面、1は平坦打面、2以上は複剥離打面、空欄は欠損等による打面なし・計測不可を示す。平坦打面、複剥離打面のうち、ネガティブ・バルブ(negative bulb)をもつものは（　）内にその数を示した。

5．背面構成　腹面の剥離方向を基準として、背面を構成する剥離面の種類と数を示した。素材を大きく変形させたものは書かないが、素材の背面構成が窺われるものに関しては、観察される範囲で書く。Cは自然面、Jは節理、Hは頭部側、Tは尾部側、Rは右方、Lは左方、Dは背面側、Vは腹面側（DとVは作業面調整剥片・角柱状の剥片など90°に近い剥離角をもつ剥離面の場合）、後続する数字はその剥離面の数を示す。

6．末端　Fは通常の末端(Fether end)、Hはちょうつがい状(Hinge fracture)、Oはアーチ状(Outre passe)を表す。

7．石材　石材の種類と母岩別資料の分類を示す。同一母岩として個体認識された石器については石材名称に後続してアラビア数字で示した。

8．層位　調査時の出土層位を記載した。

第1表　石器集中1　石材と器種組成

	ナイフ	彫刻刀	石核	敲磨剥剥	剥片	礫・破損礫	合計	百分率
頁岩1					3		3	3.00
					21.56		21.56	0.66
頁岩	3	1	12	2	21	2	41	53.25
	19.33	8.72	300.77	5.08	166.6	159.45	659.95	20.33
チャート	1				1	8	10	12.99
	3.32				7.9	836.95	848.17	26.13
安山岩			1		3		4	5.19
			15.38		27.43		42.81	1.32
メノウ				1	1		2	2.60
				1	0.95		1.95	0.06
砂岩						17	17	22.08
						1671.59	1671.59	51.50
点数合計	4	1	13	3	29	27	77	100.00
重量合計	22.65	8.72	316.15	6.08	224.44	2667.99	3246.03	100.00
点数%	5.19	1.30	16.88	3.90	37.66	35.06	100.00	
重量%	0.70	0.27	9.74	0.19	6.91	82.19	100.00	

上段：点数／下段：重量［g］

第2表　石器集中2　石材と器種組成

	ナイフ	スクレイパー	石核	敲磨剥	磨石	剥片	砕片	礫・破損礫	合計	百分率
流紋岩1		2	3	1		11			17	12.41
		16.92	57.18	6.56		42.14			122.90	4.63
頁岩1		1				3			4	2.92
		28.42				6.91			35.33	1.33
頁岩2						3			3	2.19
						3.72			3.72	0.14
頁岩3			1			2			3	2.19
			11.97			2.99			14.96	0.56
チャート1				1		2			3	2.19
				4.92		2.16			7.08	0.27
安山岩1		1				7	1		9	6.57
		7.19				13.43	0.25		20.90	0.79
頁岩	2		1			15	2		20	14.60
	15.35		11.36			37.46	0.15		64.32	2.42
凝灰岩質頁岩	1								1	0.73
	4.91								4.91	0.18
チャート		2							2	1.46
		22.31							22.31	0.84
安山岩		2	2		2	22	8	7	43	31.39
		11.74	66.84		753.87	66.78	1.49	600.50	1501.22	56.54
メノウ						3			3	2.19
						4.5			4.50	0.17
砂岩						1		26	27	19.71
						15.11		827.63	842.74	31.74
凝灰岩						1			1	0.73
						9.6			9.60	0.36
黒曜石						1			1	0.73
						0.56			0.56	0.02
点数合計	3	6	9	2	2	71	11	33	137	100.00
重量合計	20.26	64.27	109.66	11.48	753.87	205.46	1.89	1428.13	3655.05	100.00
点数%	2.19	4.38	6.57	1.46	1.46	51.82	8.03	24.09	100.00	
重量%	0.76	2.42	6.39	0.43	28.39	7.74	0.07	53.79	100.00	

上段：点数／下段：重量［g］

第3表　石器集中3　石材と器種組成

	ナイフ	尖頭器	彫刻刀	石核	剥片	礫	合計	百分率
チャート1			1	1	2		4	44.44
			5.48	9.91	7.8		23.19	26.83
頁岩	1			1			2	22.22
	2.34			0.45			2.69	3.11
砂岩					1	1	1	11.11
					46.23		46.23	53.49
凝灰岩	1	1					2	22.22
	6.97	7.35					14.32	16.57
点数合計	2	1	1	1	3	1	9	100.00
重量合計	9.31	7.35	5.48	9.91	8.25	46.23	86.43	100.00
点数%	22.22	11.11	11.11	11.11	33.33	11.11	100.00	
重量%	10.66	8.50	6.34	11.47	9.55	53.49	100.00	

上段：点数／下段：重量［g］

第4表　石器集中4　石材と器種組成

	ナイフ	石核	敲磨剥	剥片	砂片	合計	百分率
チャート1		1		4		5	25.00
		33.67		17.2		50.87	45.46
凝灰岩1	1	1	1	6		9	45.00
	0.92	29.17	1.29	7.97		39.35	35.16
頁岩1	1			1		2	10.00
	1.92			2.75		4.67	4.17
凝灰岩		1		1		2	10.00
		6.32		1.28		7.6	6.79
頁岩					1	1	5.00
					0.08	0.08	0.07
安山岩	1					1	5.00
	9.34					9.34	8.35
点数合計	3	3	1	12	1	20	100.00
重量合計	12.18	69.16	1.29	29.20	0.08	111.91	100.00
点数％	15.00	15.00	5.00	60.00	5.00	100.00	
重量％	10.88	61.80	1.15	26.09	0.07	100.00	

上段：点数／下段：重量［g］

第5表　石器集中5　石材と器種組成

	敲磨剥	剥片	礫・破損礫	合計	百分率
頁岩	1			1	5.56
	10.15			10.15	0.14
メノウ		1		1	5.56
		30.32		30.32	0.43
砂岩			16	16	88.89
			6989.3	6989.3	99.42
点数合計	1	1	16	18	100.00
重量合計	10.15	30.32	6989.3	7029.8	100.00
点数％	5.56	5.56	88.89	100.00	
重量％	0.14	0.43	99.42	100.00	

上段：点数／下段：重量［g］

第6表　石器集中9　石材と器種組成

	尖頭器	彫刻刀	スクレイパー	敲石	剥片	礫	合計	百分率
黒曜石1					4		4	40.00
					26.83		26.83	3.63
チャート	1	2					3	30.00
	3.72	6.44					10.16	1.37
凝灰岩						1	1	10.00
						46.57	46.57	6.30
頁岩			1				1	10.00
			9.01				9.01	1.22
砂岩				1			1	10.00
				646.4			646.4	87.47
点数合計	1	2	1	1	4	1	10	100.00
重量合計	3.72	6.44	9.01	646.4	26.83	46.57	738.97	100.00
点数％	10.00	20.00	10.00	10.00	40.00	10.00	100.00	
重量％	0.50	0.87	1.22	87.47	3.63	6.30	100.00	

上段：点数／下段：重量［g］

第7表　石器集中10　石材と器種組成

	両面調	彫刻刀	敲磨剥	剥片	礫・破損礫	合計	百分率
チャート	1			1		2	25.00
	20.68			7.75		28.43	42.01
頁岩		1	1	1	3	6	75.00
		3.28	4.96	18.02	12.99	39.25	57.99
点数合計	1	1	1	2	3	8	100.00
重量合計	20.68	3.28	4.96	25.77	12.99	67.68	100.00
点数％	12.50	12.50	12.50	25.00	37.50	100.00	
重量％	30.56	4.85	7.33	38.08	19.19	100.00	

上段：点数／下段：重量［g］

第8表　石器集中11　石材と器種組成

	敲磨剥	破損礫	合計	百分率
頁岩		1	1	50.00
		8.55	8.55	78.66
安山岩	1		1	50.00
	2.32		2.32	21.34
点数合計	1	1	2	100.00
重量合計	2.32	8.55	10.87	100.00
点数％	50.00	50.00	100.00	
重量％	21.34	78.66	100.00	

上段：点数／下段：重量［g］

第9表　石器集中12　石材と器種組成

	ナイフ	礫	合計	百分率
黒曜石	1		1	50.00
	0.50		0.50	12.32
メノウ		1	1	50.00
		3.56	3.56	87.68
点数合計	1	1	2	100.00
重量合計	0.50	3.56	4.06	100.00
点数％	50.00	50.00	100.00	
重量％	12.32	87.68	100.00	

上段：点数／下段：重量［g］

第10表　石器集中１　石器観察表(1)

挿図番号	グリッド	遺物番号	器　種	長さ[mm]	幅[mm]	厚さ[mm]	重量[g]	打面	打角[°]	背面構成	末端	石　材	接合番号	層　位	標高[m]	備　考
1	4D-53	1	ナイフ形石器	35.6	26.5	8.5	7.22	1	120			頁岩		Ⅲ	48.184	刃角35° 先端角82° 調整角90°
2	4D-61	1	ナイフ形石器	33.1	25.8	6.9	4.85					頁岩		Ⅲ	48.313	刃角53° 先端角106° 調整角70°
3	4D-50	2	ナイフ形石器	28.0	24.7	11.3	7.26	1	102	C+H2		頁岩		Ⅲ	47.955	刃角40° 調整角90°
4	4D-31	6	ナイフ形石器	24.2	15.6	7.8	3.32			H2+L1		チャート			48.200	
5	4D-32	5	彫刻刀形石器	26.9	32.7	10.7	8.72	1	98	C+H2	F	頁岩		Ⅲ	48.225	
6	4D-32	11	石核	23.7	22.7	15.9	11.18					頁岩			48.102	
7	4D-32	10	石核	32.7	30.1	14.9	15.26					頁岩			48.187	
8	4D-32	1	石核	21.9	25.8	15.5	11.88					頁岩		Ⅲ	48.230	
9	4D-31	5	石核	19.1	24.8	24.2	15.38					安山岩			48.197	
10	4D-31	1	石核	17.0	25.7	20.3	8.75					頁岩		Ⅲ	48.147	
11	4D-32	2	石核	28.0	30.8	21.8	21.74					頁岩		Ⅲ	48.230	
12	4D-32	14	石核	26.2	25.5	27.0	14.83					頁岩			48.164	
13	4D-32	13	石核	29.4	25.9	18.8	14.24					頁岩			48.176	
14	4D-32	9	石核	24.1	30.3	14.9	9.63					頁岩			48.184	
15	4D-32	4	石核	31.2	22.6	21.1	16.97					頁岩		Ⅲ	48.200	
16	4D-31	4	石核	19.3	31.6	29.7	17.99					頁岩		Ⅲ	48.227	
17	4C-39	1	石核	57.0	54.3	29.5	91.98					頁岩		Ⅲ	47.932	被熱のため赤化
18	4D-50	1	石核	41.4	44.6	37.0	66.32					頁岩		Ⅲ	48.014	
19	4D-31	2	剥片	27.0	30.9	9.8	7.90	1	88	H3+R1	F	チャート		Ⅲ	48.145	
20	4D-62	1	剥片	23.0	31.8	6.5	4.82	1	81	C+H3	F	安山岩		Ⅲ	48.258	
21	4D-32	6	剥片	36.8	31.8	18.4	18.07	1	102	H3+L2+T2	F	安山岩		Ⅲ	48.135	
22	4D-31	7	微細剥離痕のある剥片	20.2	10.8	5.0	1.00	1	103	C+H1	F	メノウ			48.085	
23	4D-32	3	剥片	19.8	20.5	6.9	2.73	1	81	H2+R1	H	頁岩		Ⅲ	48.058	
24	4D-42	1	剥片	17.9	25.6	5.7	2.44	1	100	H1+C	F	頁岩		Ⅲ	48.183	
25	4D-42	3	剥片	36.4	37.2	15.6	22.24			C+J+H2	O	頁岩		Ⅲ	48.224	
26	4D-32	12	剥片	30.6	18.0	10.2	4.54	1	114	H4+T2	F	安山岩			48.116	
27	4D-43	2	剥片	37.5	12.0	20.8	6.54	1	108	H2+L1	F	頁岩１	接合資料１	Ⅲ	48.113	
28	4D-43	3	剥片	39.0	20.5	16.9	11.64			C+H2	O	頁岩１	接合資料１	Ⅲ	48.145	
29	4D-33	9	剥片	17.3	34.3	8.5	3.38	1	106	C+H3	F	頁岩１	接合資料１		48.040	
30	4D-33	13	剥片	39.3	23.5	11.1	3.90	2	112	H2	F	頁岩			48.080	番号重複
31	4D-43	4	剥片	49.6	45.2	11.0	12.53	2	107	C+H4	F	頁岩			48.112	
32	4D-33	10	剥片	29.0	18.3	10.5	4.01	1	115	J+D3	O	頁岩			48.068	
33	4D-33	3	剥片	34.2	38.0	9.7	8.33	1	99	C+T1	F	頁岩		Ⅲ	48.127	
34	4D-33	2	剥片	63.9	30.3	10.0	23.67	C	60	C		頁岩		Ⅲ	48.092	
35	4D-33	1	剥片	37.9	28.8	8.3	6.02	J+1	113	H5	F	頁岩		Ⅲ	48.214	
36	4D-51	1	剥片	50.0	53.8	22.0	47.75	C	106	C	F	頁岩		Ⅲ	48.068	
37	4D-33	11	剥片	16.3	16.8	9.1	2.67	J	92	C+H3	O	頁岩			48.106	
38	4D-13	10	剥片	9.5	15.8	4.2	0.37	1	102	H1	F	頁岩			48.087	
39	4D-33	5	剥片	15.2	21.4	3.3	0.76	P		H2+T1	F	頁岩		Ⅲ	48.149	
40	4D-13	12	剥片	12.6	17.6	2.9	0.62			H2	H	頁岩			48.093	

第10表　石器集中１　石器観察表(2)

挿図番号	グリッド	遺物番号	器種	長さ[cm]	幅[cm]	厚さ[cm]	重量[g]	打面	打角[°]	背面構成	末端	石材	接合番号	層位	標高[m]	備考
41	4D-13	9	剥片	14.5	16.9	3.5	0.95	1	86	H1+C	O	メノウ			48.156	
42	4D-33	7	微細剥離痕のある剥片	15.6	27.8	7.6	1.36	1	111	H3	H	頁岩			48.107	
43	4D-40	1	微細剥離痕のある剥片	24.3	22.7	5.6	3.72	2	110	J+L3	F	頁岩		Ⅲ	48.125	
44	4D-33	6	剥片	21.5	24.7	7.3	3.31			H3	F	頁岩			48.146	
45	4D-33	8	剥片	17.7	20.0	5.8	2.05	1	110	H3+V1	O	頁岩			48.082	
46	4D-43	1	剥片	26.3	37.6	8.8	7.55	1	100	C+H1	F	頁岩		Ⅲ	48.128	
47	4D-33	12	剥片	32.9	27.6	8.1	6.27	1	106	C+H2	F	頁岩			48.105	
48	4D-34	1	剥片	29.0	24.5	6.9	3.40	1	99	C+H2	F	頁岩		Ⅲ	48.085	
49	4D-33	4	剥片	36.6	17.4	5.2	2.04			H4	F	頁岩		Ⅲ	48.133	
50	4D-33	13	剥片	27.6	21.4	7.2	3.94	2	120	C+H2	F	頁岩			48.080	番号重複
	4D-13	1	破損礫				60.98					砂岩			48.100	
	4D-13	2	破損礫				276.69					砂岩			48.096	
	4D-13	4	破損礫				92.32					砂岩			48.080	
	4D-13	5	破損礫				175.98					砂岩			48.055	
	4D-13	6	破損礫				95.34					砂岩			48.095	被熱のため赤化
	4D-13	7	破損礫				38.42					砂岩			48.142	被熱のため赤化
	4D-13	8	破損礫				10.35					砂岩			48.038	
	4D-13	11	破損礫				45.44					砂岩			48.080	被熱のため赤化
	4D-13	19	破損礫				26.36					砂岩			48.085	被熱のため赤化
	4D-13	22	破損礫				97.39					砂岩			48.082	被熱のため赤化
	4D-23	1	破損礫				16.12					砂岩		Ⅲ	48.139	
	4D-23	2	破損礫				155.82					砂岩		Ⅲ	48.157	被熱のため赤化
	4D-23	3	破損礫				45.30					砂岩		Ⅲ	48.115	被熱のため赤化
	4D-23	4	破損礫				95.03					チャート		Ⅲ	48.084	被熱のため赤化
	4D-32	7	破損礫				51.09					頁岩		Ⅲ	47.880	
	4D-42	2	破損礫				108.36					頁岩		Ⅲ	48.237	
	4D-13	3	礫				99.30					チャート			48.128	
	4D-13	13	礫				88.66					砂岩			48.117	
	4D-13	14	礫				213.80					砂岩			48.092	
	4D-13	15	礫				107.80					チャート			48.080	
	4D-13	16	礫				137.75					チャート			48.081	
	4D-13	17	礫				80.15					チャート			48.082	
	4D-13	18	礫				146.52					砂岩			48.081	
	4D-13	20	礫				118.57					チャート			48.080	
	4D-13	21	礫				121.68					チャート			48.076	ダダキ痕有り
	4D-13	23	礫				86.10					砂岩			48.066	被熱のため赤化
	4D-23	5	礫				76.67					チャート		Ⅲ	48.086	被熱のため赤化
	4D-32	8													48.025	遺物無し

第11表　石器集中２　石器観察表(1)

挿図番号	グリッド	遺物番号	器種	長さ[mm]	幅[mm]	厚さ[mm]	重量[g]	打面	打角[°]	背面構成	末端	石材	接合番号	層位	標高[m]	備考
1		120	ナイフ形石器	43.5	14.7	12.5	4.91					頁岩質凝灰岩			47.070	調整角71° 先端角35° 刃角56°
2		103	ナイフ形石器	33.5	19.5	11.1	5.75					頁岩			47.100	調整角90° 先端角58° 刃角51°
3		75	ナイフ形石器	53.9	17.0	13.3	9.60	1	114	H2+T1+C		頁岩			47.140	調整角80° 先端角60° 刃角66°
4		19	スクレイパー	31.6	45.0	16.7	28.42			C		頁岩1			46.810	刃角62°
5		80	スクレイパー	27.0	25.6	12.0	8.38	C	107			安山岩			47.030	刃角76°
6		10	スクレイパー	30.5	23.5	8.1	7.19	1	112	H2+C		安山岩1			46.890	刃角59°
7		78	スクレイパー	18.8	20.8	7.2	3.46					安山岩			47.120	刃角64°
8		42	剥片	35.3	24.4	6.8	5.03	1	106	H2+C	O	流紋岩1	接合資料1		47.410	
9		76	スクレイパー	37.5	24.3	12.0	8.34			H1+T1+C	O	流紋岩1	接合資料1		47.080	刃角68°
9		77	剥片	28.5	15.0	15.7	7.42			C		流紋岩1			46.980	
9		95	剥片	24.4	14.0	14.0	5.04	1	118	H1+C		流紋岩1			47.220	
9		129	スクレイパー	35.2	20.4	15.0	8.58			H1+C		流紋岩1			47.120	刃角55°
10		14	石核	16.9	21.0	13.8	4.38					流紋岩1			46.770	
11		104	石核	33.8	21.7	19.4	11.97					頁岩3			47.340	
12		27	石核	12.8	29.5	32.8	11.36					頁岩			47.050	
13		62	石核	37.6	32.4	18.4	16.51					流紋岩1	接合資料2		47.090	
14		74	石核	30.8	29.5	12.0	12.25					チャート			47.190	
15		41	石核	29.4	28.7	14.0	10.06					チャート			47.030	
16		57	石核	31.0	29.3	16.1	12.07					安山岩	接合資料4		47.050	
17		93	石核	41.8	33.0	32.2	54.77					安山岩			47.510	
18		63	石核	36.3	48.4	22.2	36.29					流紋岩1	接合資料1		47.060	
19		67	微細剥離痕のある剥片	30.3	27.1	9.5	6.56			J+H1+C+L1	F	流紋岩1	接合資料1		47.080	
20		132	剥片	27.4	33.0	11.0	7.39	4(3)	123	H1+C	F	流紋岩1	接合資料1		46.970	
21		68	剥片	15.6	17.7	5.2	0.86	1	117	C+H2	F	流紋岩1	接合資料1		46.910	
22		69	剥片	22.7	22.7	10.0	3.91	1	115	J+R1+H1	H	流紋岩1	接合資料2		47.010	
23		71	剥片	12.5	11.8	3.4	0.31			H1+C	F	流紋岩1			47.290	
24		96	剥片	13.1	22.3	4.3	1.00	1	104	H2+T1	F	流紋岩1			47.210	
25		66	剥片	22.5	13.9	6.9	1.21	1	110	H1+V3	F	流紋岩1			47.120	
26		82	剥片	11.9	27.0	6.8	1.69			C+T3	F	流紋岩1			47.170	
26		128	剥片	22.1	32.8	14.5	8.37	2(1)	123	C+H1		流紋岩1			47.130	
27		20	剥片	15.9	11.7	6.2	0.79	L		R2+D1	H	安山岩1			46.910	
28		54	剥片	10.2	27.4	6.8	1.14	1	97	H1+C	F	安山岩1			47.150	
29		36	剥片	18.2	22.5	5.8	1.45	P		H4+C		安山岩1			46.990	
30		121	剥片	21.1	8.2	4.5	0.59			H2+C	F	安山岩1			46.790	
31		44	剥片	24.3	18.5	12.4	3.56			H3+C	H	安山岩1			47.100	
32		6	剥片	26.6	21.3	9.8	5.48	1	112	C+V1+H1+R1	O	安山岩1			46.780	
33		29	剥片	24.5	20.7	8.8	4.25			J+C	F	頁岩1	接合資料3		47.060	
34		49	剥片	11.1	15.0	3.8	0.56	J	117	H1+C	F	頁岩1	接合資料3		47.090	
35		52	剥片	9.6	18.7	9.6	0.63			C+H2	H	頁岩3			47.000	
36		5	剥片	12.3	10.6	4.4	0.49	1	117	H4+T1+C	F	頁岩2			47.070	

第11表　石器集中２　石器観察表(2)

挿図番号	グリッド	遺物番号	器種	長さ[mm]	幅[mm]	厚さ[mm]	重量[g]	打面	打角[°]	背面構成	末端	石材	接合番号	層位	標高[m]	備考
37		39	剥片	23.0	16.0	9.8	2.22	1	100	C+H1+R1	F	頁岩２			47.360	
38		122	剥片	19.9	20.1	9.2	2.36			C+R1	F	頁岩３			47.320	
39		45	剥片	12.5	8.4	3.9	0.23			C+R2	F	頁岩			47.020	
40		64	剥片	15.9	11.1	2.7	0.26	P		R3	F	頁岩			47.070	
41		72	剥片	14.7	18.7	6.1	1.56	C	122	R2+L1		頁岩			47.120	
42		18	剥片	13.8	20.8	4.2	1.01	1	109	H3+R1	H	頁岩２			47.070	
43		99	剥片	12.4	19.8	4.3	0.85	1	107	C+H3	H	頁岩			46.910	
44		30	剥片	14.5	21.8	5.8	1.62	1	116	H3+T2	F	頁岩			46.970	
45		48	剥片	23.0	14.0	8.8	2.10			C+H1+V1	O	頁岩１			46.990	
46		23	剥片	16.2	26.0	3.5	1.17	2	100	C	H	頁岩			47.010	
47		37	剥片	25.8	20.2	6.4	2.22	2	124	C+L1+T1	F	頁岩			47.030	
48		4	剥片	30.7	16.9	8.9	3.13	2	116	C	F	頁岩			47.090	
49		3	剥片	25.2	22.3	7.5	2.62	1	120	H1+R1+V2	F	安山岩			46.850	
50		55	剥片	30.5	30.1	11.3	10.97	1	116	C+H4	O	頁岩			47.310	
51		22	剥片	15.2	25.4	8.9	2.78	1	77	C		頁岩			46.900	
52		40	剥片	36.6	18.9	11.4	7.84			C		頁岩			47.080	
53		35	剥片	14.9	32.3	7.2	1.63	3	95	H2+C	F	頁岩			47.240	
54		73	剥片	9.6	18.0	7.5	1.02	1	92	H4+C	O	頁岩			46.970	
55		98	剥片	13.8	21.7	5.2	1.07	P		C+H4	F	頁岩			47.030	
56		102	剥片	16.2	17.2	4.4	1.10	1	128	H1+L1+C	H	頁岩			47.430	
57		58	剥片	22.0	31.8	15.2	9.60			C+T3	O	凝灰岩			47.180	
58		13	剥片	15.6	13.0	3.1	0.74	1	112	H2+L1+R1	H	メノウ			46.710	
59		2	剥片	20.0	11.9	3.6	0.56	1	113	H3+T1	F	黒曜石			46.810	
60		11	剥片	15.2	18.2	5.4	1.49	1	122	C+H3	H	メノウ			46.770	
61		106	剥片	26.3	41.3	19.9	15.11	1	77	C+H2	H	砂岩			47.310	
62		50	剥片	17.1	18.2	8.8	2.27	1	123	C+H4	F	メノウ			47.010	
63		70	剥片	24.0	26.6	9.1	4.33			H1+C	F	安山岩			47.070	
64		56	剥片	24.0	27.9	17.3	11.60	4(1)	100	H4+C	F	安山岩			47.110	
65		123	剥片	15.1	19.7	4.5	1.69	1	102	H3+T2	F	安山岩			46.860	
66		31	剥片	15.8	14.1	7.3	1.68	1	115	H2+L1	F	安山岩			46.870	
67		34	剥片	17.6	16.5	4.5	1.01	1	110	H2+C	F	安山岩			46.770	
68		32	剥片	18.2	12.0	11.4	2.03			D2+H2	O	安山岩			46.830	
69		100	剥片	12.8	13.3	3.8	0.60	1	113	H1+T1	F	安山岩			47.160	
70		113	剥片	17.2	20.8	4.8	1.39	1	107	R1		安山岩			47.110	
71		92	剥片	19.2	9.0	3.4	0.51			H1+C	F	安山岩			47.400	
72		84	剥片	15.3	22.0	8.2	2.36	1	113	C+H1+R2	O	安山岩			47.070	
73		65	剥片	16.2	28.4	6.3	1.98			H1+C	H	安山岩			47.090	
74		94	剥片	19.3	13.0	4.4	1.04	1	110	H2+R1	F	安山岩			47.360	
75		21	剥片	16.3	27.2	5.0	1.42	P		H2+C	F	安山岩			46.870	
76		53	剥片	9.0	21.9	5.8	1.34	2	109	H1		安山岩			46.890	

第11表　石器集中２　石器観察表(3)

挿図番号	グリッド	遺物番号	器種	長さ[mm]	幅[mm]	厚さ[mm]	重量[g]	打面	打角[°]	背面構成	末端	石材	接合番号	層位	標高[m]	備考
77		97	剥片	32.9	10.1	5.7	2.29			H2+C+V3		安山岩			47.220	
78		25	剥片	26.2	17.2	10.7	2.84	1	124	H3+C	F	安山岩			46.920	
79		107	剥片	25.8	30.0	9.0	5.13	C	108	H2+R1+L1+TF		安山岩			47.170	
80		33	剥片	27.3	24.4	11.5	8.02			H3+D2+C+T1		安山岩			46.970	
81		91	剥片	42.8	20.3	9.7	6.97	1	115	H5+D1+C	F	安山岩			47.140	
82		85	剥片	14.8	9.4	4.5	0.58			H1+C	F	安山岩			47.280	
83		60	剥片	22.9	20.5	10.2	5.35	2	105	H2+C+D1	F	安山岩			47.190	
84		12	剥片	13.6	9.7	2.9	0.42			C	H	安山岩１			46.770	
85		16	微細剥離痕のある剥片	20.6	23.5	9.8	4.92			C+H1+T2	F	チャート１			46.810	
86		7	剥片	16.1	19.1	9.4	1.61	3(2)	65	H2+D1	F	チャート１			46.820	
87		46	剥片	10.0	17.4	4.1	0.55	1	125	H3+R2+C	F	チャート１			46.990	
88		8	磨石				519.10					安山岩			46.840	
89		127	磨石				234.77					安山岩			47.080	
		1	砕片				0.14					安山岩			46.810	
		24	砕片				0.09					頁岩			46.930	
		26	砕片				0.28					安山岩１			47.020	
		28	砕片				0.21					安山岩			46.850	
		38	砕片				0.08					安山岩			46.950	
		43	砕片				0.11					安山岩			46.810	
		47	砕片				0.05					安山岩			47.000	
		51	砕片				0.06					頁岩			46.980	
		61	砕片				0.41					安山岩			46.970	
		79	砕片				0.10					安山岩			47.470	
		126	砕片				0.39					安山岩			47.050	
		9	破損礫				111.28					安山岩			46.830	
		15	破損礫				122.83					安山岩			46.860	
		59	破損礫				10.42					砂岩			47.170	
		81	破損礫				20.38					安山岩			47.100	
		83	破損礫				1.51					砂岩			47.250	
		86	破損礫				23.37					砂岩			47.160	
		87	破損礫				35.99					砂岩			47.080	
		88	破損礫				15.99					砂岩			47.150	
		89	破損礫				7.25					砂岩			47.160	
		90	破損礫				65.03					砂岩			47.130	
		105	破損礫				22.30					砂岩			47.320	
		108	破損礫				20.04					砂岩			47.170	
		109	破損礫				194.11					砂岩			47.210	
		110	破損礫				16.80					砂岩			47.220	
		111	破損礫				65.87					安山岩			47.200	
		112	破損礫				28.40					砂岩			47.080	

第11表　石器集中2　石器観察表(4)

押図番号	グリッド	遺物番号	器種	長さ[mm]	幅[mm]	厚さ[mm]	重量[g]	打面	打角[°]	背面構成	末端	石材	接合番号	層位	標高[m]	備考
		114	破損礫				4.78					砂岩			47.120	
		115	破損礫				16.52					砂岩			47.220	
		116	破損礫				15.11					砂岩			47.290	
		117	破損礫				9.14					砂岩			47.210	
		118	破損礫				31.05					砂岩			47.030	
		119	破損礫				16.46					砂岩			46.910	
		124	破損礫				5.43					砂岩			47.170	
		125	破損礫				171.34					安山岩			47.100	
		126	破損礫				9.98					砂岩			47.200	
		130	破損礫				3.40					砂岩			47.010	
		131	破損礫				0.98					砂岩			47.180	
		133	破損礫				83.63					砂岩			47.180	
		134	破損礫				49.50					砂岩			47.180	
		135	破損礫				14.81					砂岩			47.090	
		137	破損礫				81.15					安山岩			47.160	
		138	破損礫				27.65					安山岩			47.030	
		17	礫				125.73					砂岩			47.220	
		101					1.61								47.740	遺物なし

第12表　石器集中3　石器観察表

押図番号	グリッド	遺物番号	器種	長さ[mm]	幅[mm]	厚さ[mm]	重量[g]	打面	打角[°]	背面構成	末端	石材	接合番号	層位	標高[m]	備考
1	6G-55	1	ナイフ形石器	42.7	16.0	11.7	6.97	1	112			褐灰岩		盛下	48.920	刃角64° 先端角39° 調整角70°
2	6G-65	1	ナイフ形石器	22.2	24.3	5.6	2.24	1	117	H2+R1+T1	F	頁岩		盛下	48.689	刃角48° 先端角86° 調整角75°
3	6G-64	1	尖頭器	48.9	21.4	5.5	7.35					褐灰岩		盛上	49.021	
4	6G-64	4	剥片	24.9	19.4	10.0	2.40	1	110	H2+L1+R1	F	チャート1		盛下	48.694	
5	6G-64	5	剥片	19.0	31.7	10.8	5.40			H3+T1+V1	F	チャート1		盛下	48.691	
6	6G-64	2	彫刻刀形石器	34.8	24.8	9.8	5.48	1	116	H4	H	チャート1		盛上	48.842	
7	6G-64	3	石核	18.3	41.2	20.3	9.91					チャート1		盛上	48.805	
8	6G-56	1	剥片	17.6	10.3	3.6	0.45			H2	F	頁岩		盛下	48.750	
	6G-45	1	礫				46.23					砂岩		盛下	48.719	

第13表　石器集中4　石器観察表(1)

押図番号	グリッド	遺物番号	器種	長さ[mm]	幅[mm]	厚さ[mm]	重量[g]	打面	打角[°]	背面構成	末端	石材	接合番号	層位	標高[m]	備考
1		6	ナイフ形石器	26.1	9.5	5.7	0.92					褐灰岩1	接合資料1	V	47.520	
2		4	ナイフ形石器	26.7	17.7	6.0	1.92					頁岩1		III	47.690	
3		19	ナイフ形石器	57.9	22.6	6.2	9.34	1	97	H5+C	H	安山岩		V	47.570	
4		17	石核	24.7	41.5	24.9	29.17					褐灰岩1	接合資料2	V	47.750	
5		1	石核	18.9	27.5	12.7	6.32					褐灰岩		V	47.270	

第13表　石器集中4　石器観察表(2)

神図番号	グリッド	遺物番号	器種	長さ[mm]	幅[mm]	厚さ[mm]	重量[g]	打面	打角[°]	背面構成	末端	石材	接合番号	層位	標高[m]	備考
6		10	石核	37.3	28.3	23.1	33.67					チャート1	接合資料3	V	47.670	
7		3	剥片	12.9	14.7	6.3	1.05					凝灰岩1		Ⅲ	47.620	
8		5	剥片	17.6	12.4	3.2	0.66	1	112	C+H2	F	凝灰岩1		V	47.475	
9		12	微細剥離痕のある剥片	15.4	20.0	4.4	1.29			H3+T1	F	凝灰岩1			47.540	
10		9	剥片	7.8	16.5	4.6	1.17			H1+L1	O	凝灰岩1	接合資料1	V	47.540	
10		15	剥片	15.2	18.7	6.9	1.78	3(1)	104	H1+L1		凝灰岩1	接合資料1		47.540	
11		14	剥片	28.0	17.1	4.0	1.61	1	107	H3+C	F	凝灰岩1	接合資料2		47.400	
12		18	剥片	17.5	19.0	5.1	1.69	1	100	H2+C+L1	F	凝灰岩1	接合資料2	V	47.600	
13		16	剥片	25.0	27.6	11.9	8.82	1	117	C+J	O	チャート1		V	47.750	
14		8	剥片	13.7	25.5	4.8	1.50	2	90	L1	F	チャート1			47.550	
15		2	剥片	12.0	18.4	3.6	0.91	1+J(1)	108	L3		チャート1		Ⅳ	47.530	
16		13	剥片	30.7	23.6	9.5	5.97	C	98	H1+J+R1	O	チャート1	接合資料3		47.540	
17		20	剥片	18.5	18.1	4.3	1.28	2	120	H2+C	F	凝灰岩		V	47.410	
18		7	剥片	24.7	19.6	6.5	2.75	1	100	H2+R3	H	頁岩1		V	47.550	
		11	砕片				0.08					頁岩			47.620	

第14表　石器集中5　石器観察表

神図番号	グリッド	遺物番号	器種	長さ[mm]	幅[mm]	厚さ[mm]	重量[g]	打面	打角[°]	背面構成	末端	石材	接合番号	層位	標高[m]	備考
1	SC-55	1	微細剥離痕のある剥片	47.8	28.2	14.0	10.15	1	116	H2+R1	H	頁岩		Ⅳ	47.974	
2	SC-65	4	剥片				30.32					メノウ		Ⅳ	47.716	
	SC-55	2	破損礫				58.50					砂岩		Ⅳ	47.790	被熱のため赤化
	SC-56	1	破損礫				616.68					砂岩		Ⅳ	47.988	
	SC-65	1	破損礫				306.37					砂岩		Ⅳ	47.773	被熱のため赤化
	SC-65	2	破損礫				86.07					砂岩		Ⅳ	47.777	被熱のため赤化
	SC-65	3	破損礫				165.15					砂岩		Ⅳ	47.757	被熱のため赤化
	SC-65	5	破損礫				369.98					砂岩		Ⅳ	47.765	被熱のため赤化
	SC-66	1	破損礫				387.64					砂岩		Ⅳ	47.765	被熱のため赤化
	SC-66	2	破損礫				227.27					砂岩		Ⅳ	47.758	被熱のため赤化
	SC-66	3	破損礫				837.54					砂岩		Ⅳ	47.759	被熱のため赤化
	SC-66	4	破損礫				718.83					砂岩		Ⅳ	47.727	被熱のため赤化
	SC-75	1	破損礫				77.97					砂岩		Ⅳ	47.719	被熱のため赤化
	SC-76	1	破損礫				505.21					砂岩		Ⅳ	47.785	被熱のため赤化
	SC-76	2	破損礫				337.67					砂岩		Ⅳ	47.702	被熱のため赤化
	SC-47	1	礫				98.68					砂岩		Ⅳ	48.015	
	SC-56	2	礫				1692.40					砂岩		Ⅳ	47.850	
	SC-75	2	礫				501.33					砂岩		Ⅳ	47.880	被熱のため赤化

第15表　石器集中6　石器観察表

挿図番号	グリッド	遺物番号	器種	長さ[mm]	幅[mm]	厚さ[mm]	重量[g]	打面	打角[°]	背面構成	末端	石材	接合番号	層位	標高[m]	備考
1	5C-49	1	剥片	25.7	21.6	7.4	3.06	L		H3+R1		黒曜石		II	48.659	

第16表　石器集中7　石器観察表

挿図番号	グリッド	遺物番号	器種	長さ[mm]	幅[mm]	厚さ[mm]	重量[g]	打面	打角[°]	背面構成	末端	石材	接合番号	層位	標高[m]	備考
1	3D-57	1	石核	39.4	69.4	89.8	353.27					砂岩		III	48.340	

第17表　石器集中8　石器観察表

挿図番号	グリッド	遺物番号	器種	長さ[mm]	幅[mm]	厚さ[mm]	重量[g]	打面	打角[°]	背面構成	末端	石材	接合番号	層位	標高[m]	備考
	6H-52	1	破損礫				125.51					砂岩			48.937	
	6H-62	1														遺物なし

第18表　石器集中9　石器観察表

挿図番号	グリッド	遺物番号	器種	長さ[mm]	幅[mm]	厚さ[mm]	重量[g]	打面	打角[°]	背面構成	末端	石材	接合番号	層位	標高[m]	備考
1	4G-50	1	スクレイパー	47.9	25.5	13.7	9.01	1	109	D12		頁岩		Ve～Ka	47.898	
2	4F-58	2	彫刻刀形石器	17.8	13.8	7.1	1.90	1	93			チャート		Ve～Ka	47.876	
2	4F-58	3	彫刻刀形石器	31.7	21.7	6.5	4.54			H1+R3	O	チャート		Ve～Ka	47.858	
3	4F-67	1	尖頭器	34.5	15.0	7.5	3.72					チャート		Ve～Ka	47.682	
4	4F-58	1	剥片	35.6	20.0	8.9	4.20	1	114	H2+V1	F	黒曜石1	接合資料1	Ve～Ke	47.888	
5	4F-68	1	剥片	32.3	27.0	7.7	6.11	J	91	H1+R1+T1	F	黒曜石1	接合資料1	Ve～Ka	47.930	
6	4F-69	1	剥片	25.9	17.8	5.7	1.68	1	107	H2+R2+L1	F	黒曜石1		Ve～Ka	47.908	
7	4F-59	2	剥片	29.0	33.0	17.0	14.84	1	81	H3	O	黒曜石1		Ve～Ka	47.749	
8	4G-60	1	敲石	127.8	57.7	61.2	646.40					砂岩		Ve～Ka	47.887	
	4F-59	1	礫				46.57					凝灰岩		Ve～Ka	47.852	

第19表　石器集中10　石器観察表

挿図番号	グリッド	遺物番号	器種	長さ[mm]	幅[mm]	厚さ[mm]	重量[g]	打面	打角[°]	背面構成	末端	石材	接合番号	層位	標高[m]	備考
1	6F-00	1	彫刻刀形石器	34.6	21.1	6.0	3.26	P		H3	H	頁岩		Ka	47.509	
2	6F-00	2	周面調整石器	37.2	33.5	14.3	20.68					チャート		Ka	47.817	
3	6F-01	1	微細剥離痕のある剥片	38.7	26.1	5.5	4.96	1	117	H4+C	H	頁岩		Kc	47.569	
4	6F-21	1	剥片	48.0	37.6	12.7	18.02	1	108	H5+T3+C	F	頁岩		Kc	47.479	
5	6F-10	1	剥片	42.3	29.4	7.0	7.75	1	105	H2+R1	F	チャート		Ka	47.803	
	6F-12	1	破損礫				6.15					頁岩		Kc	47.546	
	6F-20	1	破損礫				5.00					頁岩		Kc	47.394	
	6F-20	2	破損礫				1.84					頁岩		Kc	47.451	

第20表　石器集中11　石器観察表

挿図番号	グリッド	遺物番号	器種	長さ[mm]	幅[mm]	厚さ[mm]	重量[g]	打面	打角[°]	背面構成	末端	石材	接合番号	層位	標高[m]	備考
1		1	微細剥離痕のある剥片	13.4	21.0	13.2	2.32					安山岩			46.860	
		2	破損礫				8.55					頁岩			46.980	

第21表　石器集中12　石器観察表

挿図番号	グリッド	遺物番号	器種	長さ[mm]	幅[mm]	厚さ[mm]	重量[g]	打面	打角[°]	背面構成	末端	石材	接合番号	層位	標高[m]	備考
1	5G-01	1	ナイフ形石器	15.2	12.9	3.5	0.5			H1＋L1	F	黒曜石		Kc	47.512	
	5G-01	2	礫				3.56					メノウ		Kc	47.685	

第22表　石器集中13　石器観察表

挿図番号	グリッド	遺物番号	器種	長さ[mm]	幅[mm]	厚さ[mm]	重量[g]	打面	打角[°]	背面構成	末端	石材	接合番号	層位	標高[m]	備考
	6F-56	1	破損礫				12.99					頁岩		X	46.913	

2．縄文時代

（1）概要

ここで取り上げる縄文時代の遺構は、炉穴28基、土坑46基である。炉穴については炉床が確認されたものを原則としたが、覆土中に焼土が含まれているものも一部炉穴として取り上げた。土坑については、遺構からの出土遺物がほとんどなく、あってもごくわずかなので時期決定できるものは非常に少ない。しかし、明らかにほかの時代に属すると判断されたものもないことや、包含層遺物としては縄文時代の土器が圧倒的に多いことから、土坑についても縄文時代の遺構として取り上げることとした。

（2）遺構

016炉穴（第54図、図版12）

本遺構は、遺構の密度の高い4C－34グリッドに位置する。規模は1.36ｍ×0.85ｍの楕円形で、長軸方向が南北方向からやや東に傾いている。掘込み深さは約10cmである。覆土は南側に焼土を含んでいたが、炉床は逆に北側の底面が約50cmの円形によく焼けて硬化していた。

023炉穴（第54図、図版12）

本遺構は、炉穴・土坑の密度の高い5C－15グリッド周辺に位置している。規模は1.23ｍ×0.9ｍの楕円形で、長軸をやや西に傾けた南北方向を向いている。2段に掘り込まれ、1段目は深さ18cm、50cm×40cmに方形に掘り込まれ、その端からさらに直径50cm、深さ約10cmに円形に掘り込まれている。底面はほぼ全面的に非常によく焼け硬化し、炉床となっている。

024炉穴（第54図、図版12）（遺物は82ページ）

本遺構は5C－29グリッド周辺に位置し、2.15ｍ×0.8ｍの長楕円形で、深さは約30cmである。長軸をほぼ東西に向け、西側はやや浅く20cm、東側は50cm×20cmの範囲にわたって、約30cmの深さに掘り込まれ1段下がっている。覆土は東側で焼土を含む層が観察されたが、底面は焼けて硬化していなかった。

025炉穴（第54図、図版12）（遺物は84ページ）

本遺構は5C－12グリッド周辺に位置し、規模は2.95ｍ×1.08ｍの不整形である。長軸はおよそ北東方向を向く。掘込みは南西側は深く約50cm、北東側に向かってなだらかに上昇している。北東端から北に向かって、約50cmの小規模な張出し状の炉床が付随し、炉床部が2か所あることがうかがわれる。南西側の炉床は、底面が直径約60cmの円形に非常によく焼け硬化している。北側の炉床は25cm×45cmの範囲がよく焼けて硬化している。

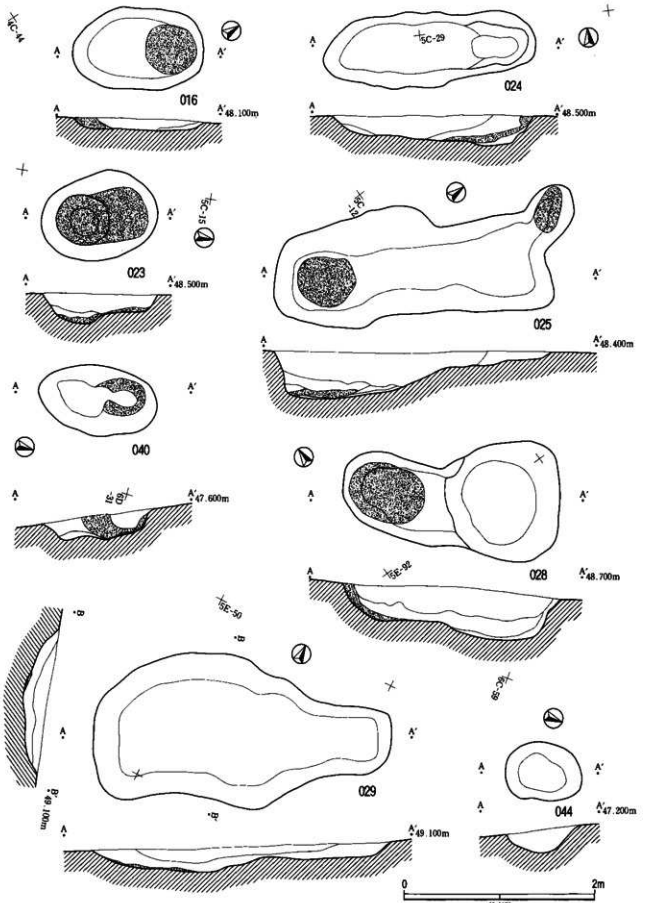
028炉穴（第54図、図版12）（遺物は84ページ）

本遺構は5E－92グリッド周辺に位置し、2.3ｍ×1.26ｍの大きさである。形態は不整形で、長軸がやや西を向く南北方向である。掘込みの深さは最大50cmで北側は浅く、南側は深い。北側は1.2ｍ×0.8ｍの範囲にやや浅く、北側は約1.2ｍの円形に深い。北側の端は80cm×60cmの範囲がよく焼けた炉床となっている。

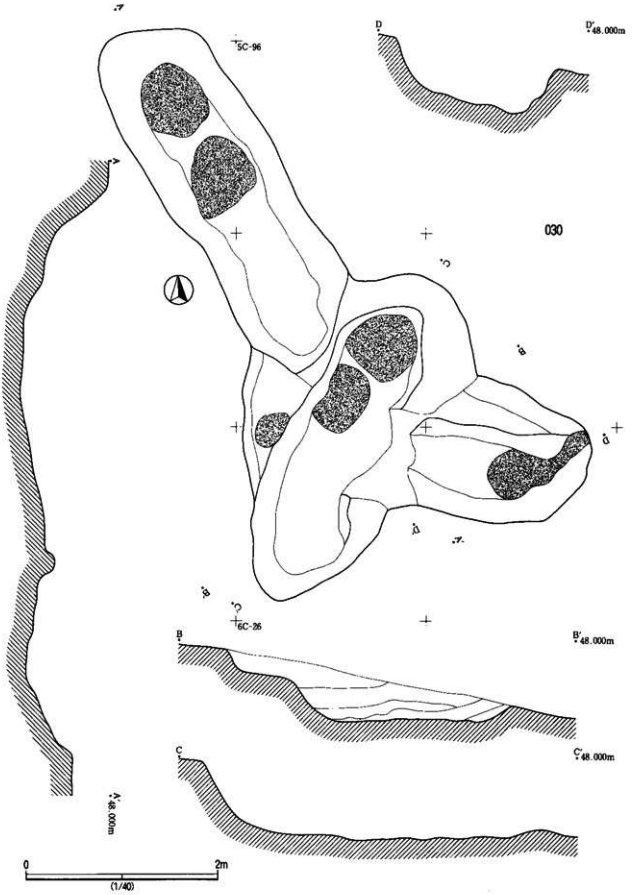
029炉穴（第54図）（遺物は84ページ）

本遺構は5E－50グリッド周辺に位置し、規模は3.16ｍ×1.5ｍの不整楕円形である。長軸東端をやや北に向けた東西方向を向き、掘込みは浅く約25cmで西側の方がやや深めである。覆土下層の底面近くには焼土が少し分布しているが、炉床はよく焼けているわけではない。

030炉穴（第55図、図版12）（遺物は84ページ）


016
48.100m
024
48.500m
023
48.500m
025
48.400m
040
47.600m
028
48.700m
029
49.100m
044
47.200m
0
2m
(1/40)

第54図　炉穴実測図（1）



第55図　炉穴実測図(2)

本遺構は6C－06周辺に位置する大規模な炉穴群である。地山が南西方向に傾斜し、掘込みの深さを減じている。よく焼けた炉床が6か所確認され、長円形の3基以上が重複した形がうかがわれる。覆土の観察を行ったが、新旧関係を一部しか明らかにすることができず、結果的には遺構全体の掘り下げを行うことしかできなかった。東西方向のものが北東南西方向のものに切り込まれて破壊されていることから、東西方向のものが古いことがうかがわれる。

炉穴は北西から南東方向の長円形が1基と、北北東から南南西方向の長円形が1基、ほぼ東西方向の長円形が1基観察され、さらに南北方向にももう1基重複している可能性がうかがわれる。北西から南東方向のものは長さ約4ｍ×1.2ｍの長円形で、深さは約1ｍと深い。北側寄りに直径60㎝ほどのよく焼けて硬化した炉床が2か所確認される。北北東から南南西方向のものは、3.7ｍ×1.4ｍほどの規模で、掘込み深さは北東側で深く約70㎝、南西側ではほとんど残っていない。底面はほぼ平坦で、北東側に約70㎝の直径によく硬化した炉床が2か所確認されている。東西方向のものは、3.7ｍ×1.5ｍの長円形で、掘込みの深さは約40㎝である。東端と西端に、よく焼けて硬化した炉床が、各1か所確認される。西端は南北方向に広がり、ほかの炉穴が南北方向に重複していた可能性も考えられる。

031炉穴（第56図、図版12）（遺物は84ページ）

本遺構は5C－97グリッド周辺に位置し、4.0ｍ×1.5ｍの不整長円形を呈する。長軸はやや東に傾く南北方向で、底面南端に約30㎝の浅い掘りくぼみが認められる。全体の掘込みは浅めで約20㎝、覆土には焼土が少し含まれるが炉床のように焼けて硬化してはいなかった。

040炉穴（第54図、図版13）

本遺構は6D－30グリッドに位置し、形態は1.25ｍ×0.75ｍの楕円形で、深さは20㎝～25㎝を測る。長軸はほぼ南北方向を向き、底面の北側半分は周囲がよく焼けて硬化し、さらに南側に立ち上がるように硬化部分が認められた。このような状態から煙道状の機能を持った構造が推定できよう。

041炉穴（第56図、図版13）

本遺構は5D－94グリッドに位置し、2.2ｍ×1.4ｍの規模で、深さ38㎝を測る。長軸をほぼ南北方向に向け、南側はやや幅広で深く、北側は狭く浅くなっている。覆土は焼土を多く含むが、底面は焼けておらず硬化していなかった。

042炉穴（第56図、図版13）

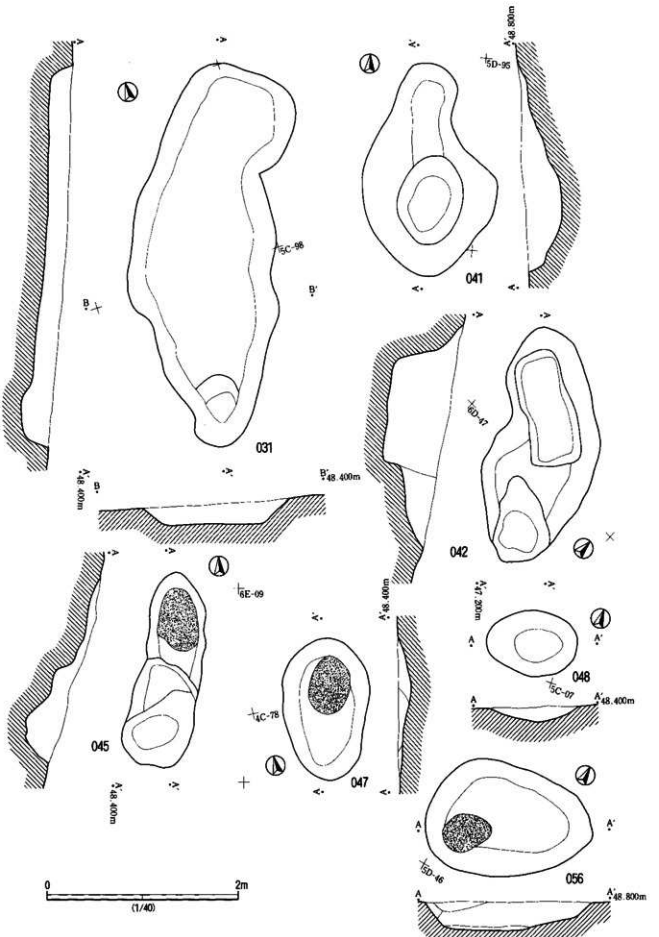
本遺構は6D－47グリッドに位置し、2.45ｍ×1.2ｍの規模の不整形である。北西側は長方形の土坑と南東側は楕円形の炉穴が重複している。長方形土坑は1.5ｍ×1.3ｍ、深さ0.65ｍを測り、楕円形の炉穴は1.5ｍ×1.1ｍ、深さ0.4ｍほどである。炉穴より土坑の方が新しいが、時期は不明である。覆土は焼土を少し含んでいた。

044炉穴（第54図、図版13）

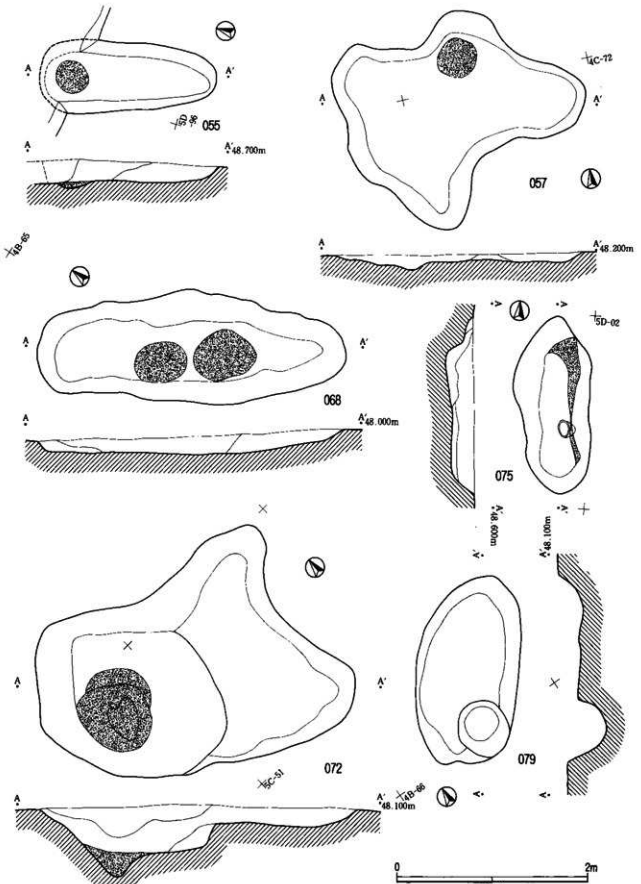
本遺構は6C－58グリッドに位置し、0.8ｍ×0.6ｍの円形で、深さは25㎝のスリ鉢状を呈する。覆土には多量の焼土を含みしまりがなかった。

045炉穴（第56図）

本遺構は6E－08グリッドに位置し、2.0ｍ×0.7ｍの長円形で、深さ最大0.4ｍである。長軸はほぼ南北方向を向き、北側は浅く南へ2段階の深さで深くなっている。最も浅い北側の底面は深さ8㎝で底面はよく焼けて硬化していた。


031
041
042
045
047
048
056
5C-96
5D-95
5D-47
6E-09
4C-78
5C-07
5D-46
48.800m
48.400m
48.200m
0
2m
(1/40)

第56図　炉穴実測図(3)


055
48.700m
057
48.200m
068
48.000m
075
48.600m
48.100m
072
079
48.100m
0
2m
(1/40)

第57図　炉穴実測図(4)

047炉穴（第56図、図版13）

本遺構は4C－78グリッドに位置し、1.45ｍ×0.9ｍの楕円形で、深さは浅く約10cmしかない。長軸がほぼ南北方向を向き、底面北側は60cm×40cmにわたって焼けて硬化していた。

048炉穴（第56図、図版13）

本遺構は4C－96グリッドに位置し、0.95ｍ×0.7ｍの楕円形で、深さは浅く15cmしか遺存していない。覆土は焼土粒を多く含んでいた。

055炉穴（第57図、図版13）（遺物は84ページ）

本遺構は5D－86グリッドに位置し、北端が破壊されている。復元すると1.85ｍ×0.8ｍの長楕円形で、深さは20cmである。長軸をほぼ南北に向け、底面はほぼ平坦で、北端寄りに直径30cmのよく焼けて硬化した部分が認められる。

056炉穴（第56図、図版13）（遺物は84ページ）

本遺構は5D－36グリッドに位置し、1.75ｍ×1.2ｍの楕円形で長軸は北東を向く。深さは約30cmで、北東側はやや浅めで南西側はやや深い。覆土は焼土を多く含まなかったが、底面の北西側には40cm×50cmほどの範囲がよく焼けて硬化していた。

057炉穴（第57図、図版14）

本遺構は4C－62グリッド周辺に位置し、2.7ｍ×2.3ｍの不整形を呈する。深さは約10cmで底面はほぼ平坦である。底面北側端に直径40cmほどのよく焼けて硬化した部分が確認された。

068炉穴（第57図、図版14）

本遺構は4B－75グリッド周辺に位置し、3.25ｍ×1.2ｍの長楕円形を呈し、長軸は北西を向く。掘込みの深さは最大20cmで、浅い皿状の底面である。底面のほぼ中央近くに40cm～60cmのよく焼けて硬化した部分が２か所検出された。

072炉穴（第57図）（遺物は85ページ）

本遺構は5C－41グリッド周辺に位置し、形態は不整形で規模は3.4ｍ×2.4ｍである。掘込みは３段階に分けられ、深さは20cm、50cm、70cmの３段に掘り込まれている。浅い掘込みは皿状で、最も深い円形をした掘込みは底面がよく焼けて硬化している。覆土は焼土を少し含んでいる。

075炉穴（第57図、図版14）（遺物は85ページ）

本遺構は5D－01グリッドに位置し、1.8ｍ×0.8ｍの楕円形を呈する。長軸はほぼ南北を向き、掘込みの深さは30cmである。底面の北から東側に沿って、よく焼けて硬化した部分が狭い帯状に巡っている。

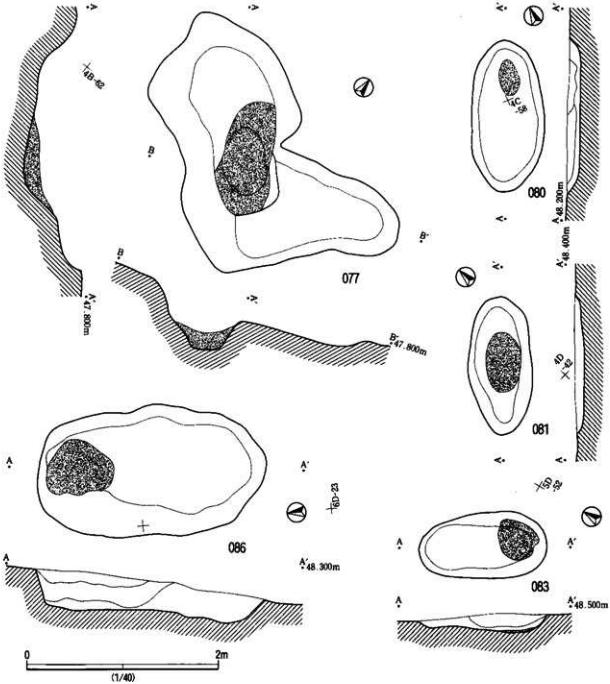
077炉穴（第58図）

本遺構は4B－51グリッドに位置し3.2ｍ×1.8ｍのＶ形を呈する。２基の楕円形の炉穴の重複と見られ、2.3ｍ×1.4ｍの北東を向いた楕円形と、2.7ｍ×1.3ｍの北西を向いた楕円形の炉穴がほぼ直角に交差しているものと見られる。北東を向いたものは掘込みが浅く約15cm、北西を向いたものは深く約70cmで後者の方が新しい。後者の南東寄りの底面には0.9ｍ×0.45ｍの範囲によく焼けた硬化部分が認められた。

079炉穴（第57図）

本遺構は4B－56グリッドに位置し、2ｍ×1.1ｍの規模で楕円形を呈し、深さは約20cmである。長軸は北東を向き、南西端に直径約50cm、深さ50cmのピットが掘り込まれている。

080炉穴（第58図）



第58図　炉穴実測図(5)

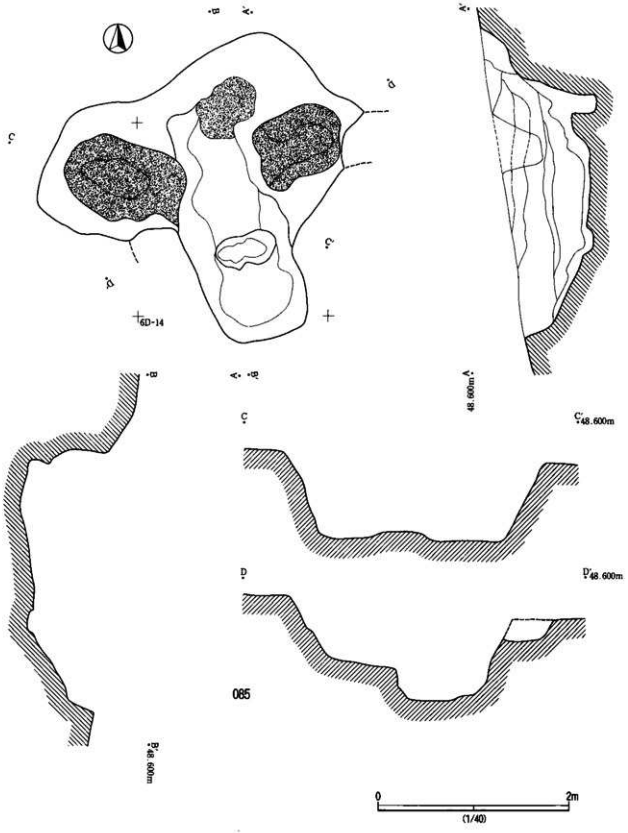
本遺構は4C－58グリッド周辺に位置し、1.6ｍ×0.75ｍの楕円形を呈する。深さは約15㎝で浅く、長軸はやや東に傾く南北方向である。底面は平坦で、北寄りの35㎝×20㎝の範囲はよく焼けて硬化していた。

081炉穴（第58図）

本遺構は4D－41グリッドに位置し、1.45ｍ×0.7ｍの楕円形を呈する。深さは約10㎝と浅く、長軸は北東を向く。底面は平坦でほぼ中央に65㎝×40㎝にわたってよく焼けて硬化した部分が認められた。

083炉穴（第58図、図版14）

本遺構は5D－51グリッド周辺に位置し、1.35ｍ×0.7ｍの楕円形を呈し、深さは約15㎝である。長軸は北西を向き、底面はほぼ平坦で、南東端には直径約40㎝の円形の焼けて硬化した部分が確認された。



第59図　炉穴実測図(6)

085炉穴（第59図、図版14）（遺物は85ページ）

本遺構は6D－04グリッド周辺に位置し、3.55ｍ×３ｍのT字形を呈する。３基の炉穴が重複したものとみられ、ほぼ東西方向に位置する3.6ｍ×1.7ｍの楕円形のものが２基分で、2.85ｍ×1.1ｍの隅丸長方形のものとがほぼT字状に交差している。覆土の観察から中央の南北方向のものが最も古く、次に北西にのびるものが続き、最も新しいのは北東へのびるものである。３基ともに掘込みは深く、最も深いものは1.1ｍを測る。共に底面はほぼ平坦であるが、中央の南北方向のものは中央やや南寄りに60㎝×35㎝、深さ約15㎝のピットが認められる。

086炉穴（第58図、図版14）

本遺構は6D－22グリッド周辺に位置し、2.4ｍ×1.4ｍの楕円形を呈する。長軸をほぼ南北に向け、掘込みの深さは約40㎝である。底面はほぼ平坦で、北側の端には直径約70㎝の円形によく焼けて硬化した部分が確認された。

008土坑（第60図、図版14）

本遺構は6H－21グリッドに位置し、2.45ｍ×1.3ｍの規模で隅丸長方形を呈し、深さ約0.3ｍを測る。長軸は北東方向を向き、覆土はローム粒を多く含みしまっている。

012土坑（第60図、図版14）

本遺構は5G－58グリッドに位置し、規模は1.8ｍ×1.35ｍの楕円形で、深さは約0.2ｍである。覆土はローム粒を多く含みあまりしまりがない。

013土坑（第60図、図版15）

本遺構は5G－42グリッドに位置し、1.7ｍ×1.1ｍの楕円形を呈する。長軸は東端がやや南に傾く東西方向で、短軸方向の南側に入り込むようにやや抉るように掘り込まれている。掘込みの深さは約0.5ｍで、現状ではごくわずかオーバーハングしており、本来は半地下式に掘り込まれていたものと思われる。

014土坑（第60図、図版15）

本遺構は5F－19グリッドに位置し、２ｍ×0.8ｍの長円形で、長軸は北西を向き、掘込みは浅く約0.1ｍしかない。

018土坑（第60図、図版15）

本遺構は6H－20グリッドに位置し、1.9ｍ×１ｍの長円形で、長軸は西端がやや北を向いた東西方向で、深さは0.3ｍである。

019土坑（第60図、図版15）

本遺構は6H－37グリッドに位置し、2.3ｍ×1.3ｍの楕円形を呈し、長軸東端がやや北に傾く東西方向を向く。地山の傾斜で北から南に傾斜し、深さは最大で0.4ｍである。

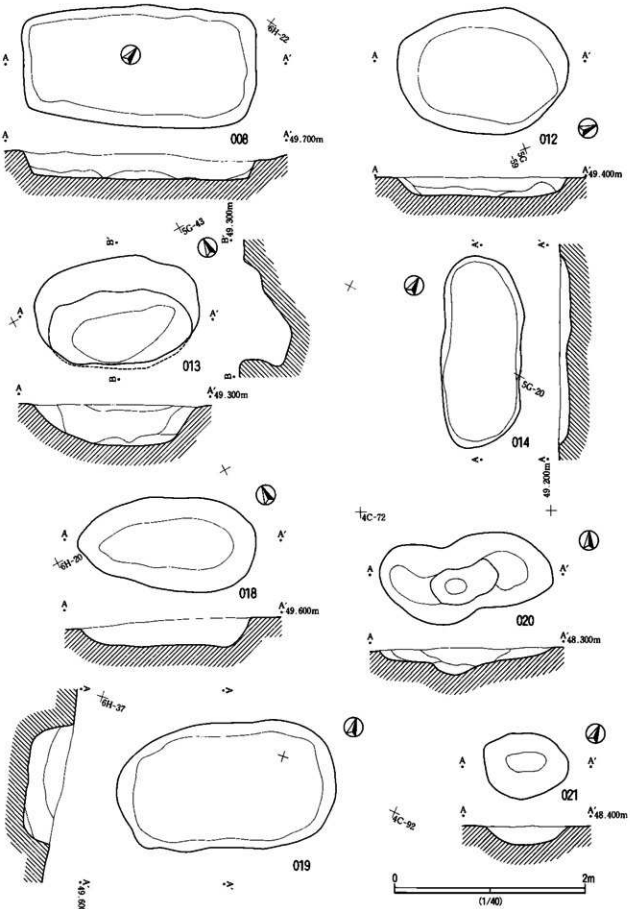
020土坑（第60図、図版15）

本遺構は4C－72グリッドに位置し、1.8ｍ×0.8ｍの不整形を呈する。長軸はほぼ東西方向を向き、底面の中央には70㎝×35㎝、深さ10㎝の浅いピットがある。

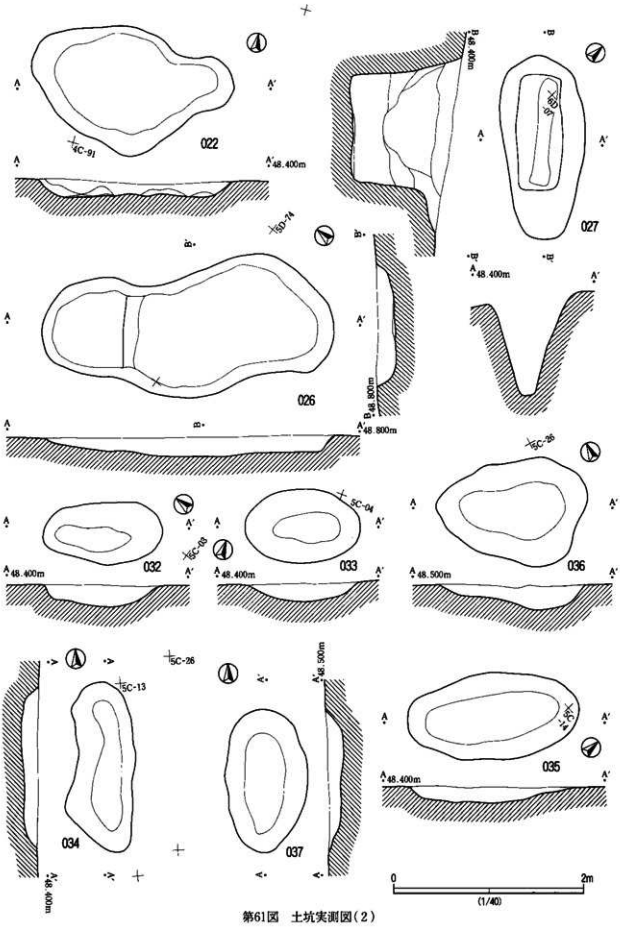
021土坑（第60図、図版15）

本遺構は4C－82グリッドに位置し、0.9ｍ×0.7ｍの楕円形を呈し、深さは0.2ｍの皿状に掘り込まれた土坑である。

022土坑（第61図、図版15）


008
49.700m
012
49.400m
013
49.300m
014
49.200m
018
49.600m
020
48.300m
019
021
48.400m
SH-22
SC-43
SC-20
SH-20
SC-72
SH-37
SC-92
0
2m
(1/40)

第60図　土坑実測図(1)


022
027
026
032
033
036
034
037
035
4C-91
5D-74
5C-04
5C-26
5C-13
48.400m
48.800m
48.500m
0
2m
(1/40)

第61図　土坑実測図(2)

本遺構は4C－81グリッドに位置し、2.1ｍ×1.3ｍの不整形を呈する。深さは約0.2ｍで、底面はほぼ平坦であった。覆土はローム粒をやや多く含み、ややしまっていた。

026土坑（第61図、図版15）

本遺構は5D－73グリッドに位置し、3.1ｍ×1.3ｍの不整形を呈する。深さは0.2ｍと浅く、底面は北側で一段やや浅くなるがそれ以外はほぼ平坦である。

027土坑（第61図、図版16）

本遺構は6D－07グリッドに位置し、1.9ｍ×0.9ｍの長円形を呈する陥穴とみられる。長軸は北西を向き、長軸方向の掘込みは垂直に近く、短軸方向は鋭いＶ字形に掘り込まれている。地山の傾斜により深さは一様ではないが、最大で1.2ｍを測り、底面は1.1ｍ×0.2ｍと狭小になっている。

032土坑（第61図、図版16）

本遺構は4C－92グリッドに位置し、1.25ｍ×0.65ｍの長円形を呈する。長軸は北西を向き、掘込みの深さは0.2ｍを測る。底面は皿状に掘り込まれている。

033土坑（第61図、図版16）

本遺構は5C－03グリッドに位置し、1.25ｍ×0.75ｍの長円形を呈し、長軸は東端がやや北に傾く東西方向で、底面は皿状に掘り込まれている。深さは0.2ｍである。

034土坑（第61図）

本遺構は5C－12グリッドに位置し、1.75ｍ×0.7ｍの不整長円形を呈する。長軸はほぼ南北方向に向き、深さは0.2ｍである。底面はほぼ平坦である。

035土坑（第61図、図版16）

本遺構は5C－13グリッドに位置し、1.8ｍ×0.9ｍの長円形で、長軸は北東を向く。深さは0.15ｍと浅く、皿状に掘り込まれている。

036土坑（第61図、図版16）

本遺構は5C－25グリッドに位置し、1.6ｍ×1.1ｍの不整形を呈し、掘込みは0.2ｍである。

037土坑（第61図、図版16）

本遺構は5C－26グリッドに位置し、1.5ｍ×0.9ｍの長円形で深さは0.15ｍと浅い。底面はスリ鉢状に掘り込まれている。

038土坑（第62図、図版16）

本遺構は5C－08グリッドに位置し、1.7ｍ×0.8ｍの長円形で、深さは0.15ｍである。

043土坑（第62図、図版16）

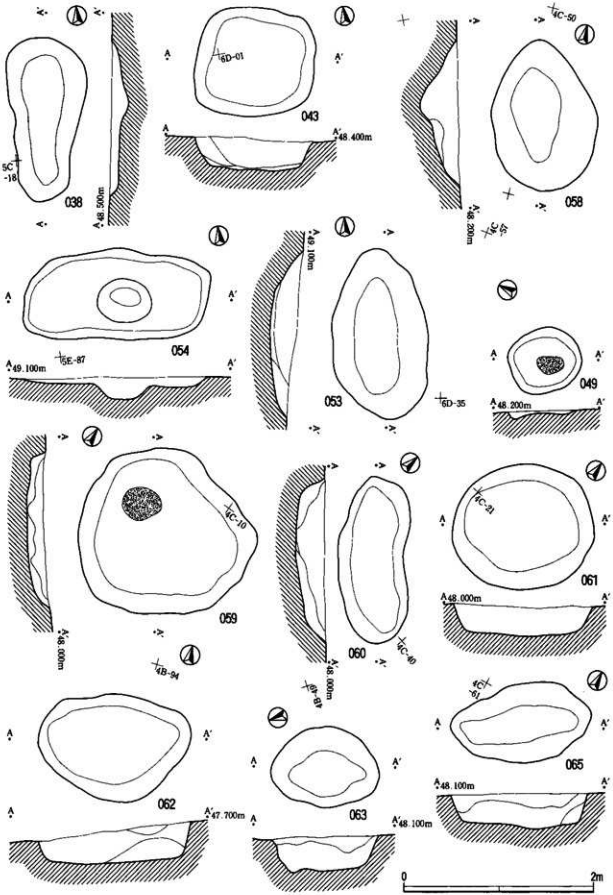
本遺構は6D－01グリッドに位置し、1.25ｍ×1.15ｍの隅丸方形を呈し、長軸は西端がやや北を向く東西方向である。深さは0.3ｍで、底面は平坦である。

049土坑（第62図）

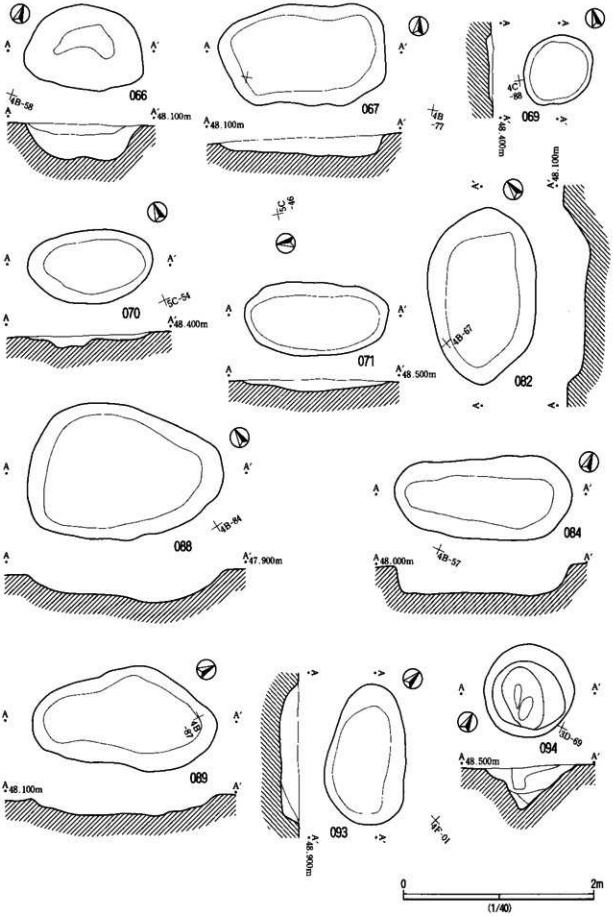
本遺構は4C－56グリッドに位置し、0.75ｍ×0.65ｍの隅丸方形である。深さは0.1ｍと非常に浅く、底面中心に0.3ｍ×0.2ｍの焼土が一部認められた。ここでは炉穴ではなく土坑とした。

053土坑（第62図）

本遺構は6D－24グリッドに位置し、1.8ｍ×１ｍの長円形を呈する。長軸はほぼ南北方向を向き、皿状に掘り込まれ深さは0.3ｍを測る。


038
5C-18
48.500m
043
6D-01
48.400m
058
4C-50
48.200m
4C-57
054
5E-87
49.100m
053
49.100m
6D-35
049
48.200m
059
4C-10
48.000m
4B-94
060
4C-40
48.000m
4B-87
061
4C-21
48.000m
062
47.700m
063
48.100m
065
4C-61
48.100m
0
2m
(1/40)

第62図　土坑実測図(3)


066
48.100m
067
48.100m
069
48.100m
070
48.400m
071
48.500m
082
48.100m
088
47.900m
084
48.000m
089
48.100m
093
48.900m
094
48.500m
0
2m
(1/40)

第63図　土坑実測図(4)

054土坑（第62図）

本遺構は5E－77グリッドに位置し、1.9ｍ×0.95ｍの隅丸方形を呈する。掘込みは非常に浅く0.1ｍ、底面は平坦であるが中央に0.6ｍ×0.45ｍ、深さ0.2ｍのピットがある。

058土坑（第62図）

本遺構は4C－50グリッドに位置し、1.6ｍ×1.1ｍの卵形を呈する。スリ鉢状に掘り込まれ、深さは0.4ｍを測る。

059土坑（第62図）

本遺構は4B－19グリッドに位置し、1.8ｍの歪んだ円形を呈する。深さは0.2ｍで、底面はほぼ平坦で底面の一部に焼土が認められる。

060土坑（第62図）

本遺構は4B－39グリッドに位置し、1.7ｍ×0.7ｍの長円形を呈し、長軸は北西を向く。深さは0.3ｍで、底面はほぼ平坦である。

061土坑（第62図）

本遺構は4C－11グリッドに位置し、1.5ｍ×1.3ｍの楕円形を呈する。掘込みは0.3ｍの深さで、底面は平坦である。

062土坑（第62図）

本遺構は4B－93グリッドに位置し、1.6ｍ×1.1ｍの楕円形を呈する。深さは0.35ｍを測り、底面はほぼ平坦である。

063土坑（第62図）

本遺構は4B－38グリッドに位置し、1.2ｍ×0.9ｍの楕円形を呈し、深さは0.35ｍを測る。

065土坑（第62図）

本遺構は4C－61グリッドに位置し、1.5ｍ×0.8ｍの楕円形を呈し、深さは0.35ｍを測る。底面は平坦である。

066土坑（第63図）

本遺構は4B－47グリッドに位置し、1.3ｍ×0.9ｍの楕円形を呈し、掘込みの深さは0.35ｍを測る。底面はやや凹凸があり、覆土はしまりがなかった。

067土坑（第63図）

本遺構は4B－66グリッドに位置し、1.7ｍ×1.1ｍの隅丸長方形を呈し、深さは0.2ｍである。長軸は東端をやや北に向ける東西方向で、覆土はローム粒を多く含んでいる。

069土坑（第63図）

本遺構は4C－88グリッドに位置し、0.7ｍ×0.8ｍのほぼ円形で、深さは非常に浅く約5㎝しかない。

070土坑（第63図）

本遺構は5C－43グリッドに位置し、1.3ｍ×0.8ｍの楕円形を呈し、長軸をほぼ東西に向ける。掘込みは浅く約5㎝である。

071土坑（第63図）

本遺構は5C－35グリッドに位置し、1.55ｍ×0.75ｍの楕円形で、掘込みは浅く皿状である。深さは0.1ｍを測る。

082土坑（第63図）

本遺構は4B－57グリッドに位置し、1.8ｍ×1.15ｍの楕円形を呈する。掘込みはなだらかで、深さは0.3ｍを測り、底面はやや波打っている。

084土坑（第63図）

本遺構は4B－47グリッドに位置し、1.9ｍ×0.85ｍの長円形を呈する。長軸は西端がやや南に傾く東西方向で、掘込み深さは0.3ｍ、底面はほぼ平坦である。

088土坑（第63図）

本遺構は4B－73グリッドに位置し、2.1ｍ×1.4ｍの楕円形を呈する。主軸は東端を南に傾ける東西方向を向き、掘込みは皿状で、深さは0.3ｍを測る。

089土坑（第63図）

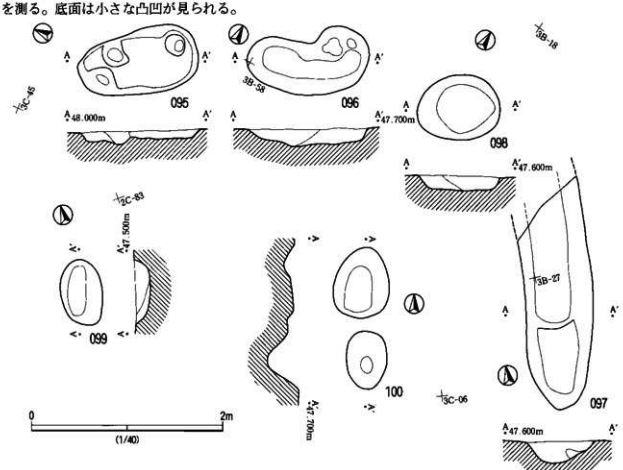
本遺構は4B－86グリッドに位置し、1.95ｍ×1.05ｍの楕円形で、長軸は北東方向である。掘込みは浅く皿状で、深さは0.15ｍを測る。

093土坑（第63図）

本遺構は4F－00グリッドに位置し、1.4ｍ×0.85ｍの楕円形を呈する。長軸は北西方向を向き、掘込み深さは0.2ｍを測る。

094土坑（第63図）

本遺構は3D－58グリッドに位置し、直径0.95ｍの円形を呈する。逆円錐状に掘り込まれ、深さは0.4ｍを測る。底面は小さな凸凹が見られる。



第64図　土坑実測図（5）

095土坑（第64図）

本遺構は3C－45グリッドに位置し、1.3ｍ×0.7ｍの楕円形を呈する。長軸はやや西に傾く南北方向を向き、掘込みは浅く0.1ｍである。底面はほぼ平坦で周辺に直径0.2ｍ、深さ0.1ｍのピットが3か所認められる。

096土坑（第64図）

本遺構は3B－48グリッドに位置し、1.3ｍ×0.7ｍの歪んだ楕円形を呈する。底面はほぼ平坦で、掘込み深さは0.15ｍである。

097土坑（第64図）

本遺構は3B－27グリッドに位置し、北端を破壊されており全容は調査できなかった。調査できた分でみると、長さ2.4ｍ、幅0.7ｍの溝状の土坑で、溝の可能性もある。掘込みは皿状で、深さは0.2ｍを測る。底面は南から北に向かって途中で約5㎝下がる段差がある。

098土坑（第64図）

本遺構は3B－17グリッドに位置し、0.85ｍ×0.7ｍの楕円形を呈する。掘込みの深さは0.15ｍで、底面は平坦である。

099土坑（第64図）

本遺構は2C－82グリッドに位置し、0.7ｍ×0.45ｍの楕円形を呈する。掘込みは0.15ｍの深さで、底面は平坦である。

100土坑（第64図）

本遺構は2C－95グリッドに位置し、調査時に2基のピットとして調査したものである。ほぼ南北方向に2基のピットが位置し、北側は0.75ｍ×0.6ｍ、南側は0.6ｍ×0.4ｍの楕円形で、深さは北側は0.1ｍ、南側は0.35ｍである。

（3）遺物（第65図～第69図、図版17～21）

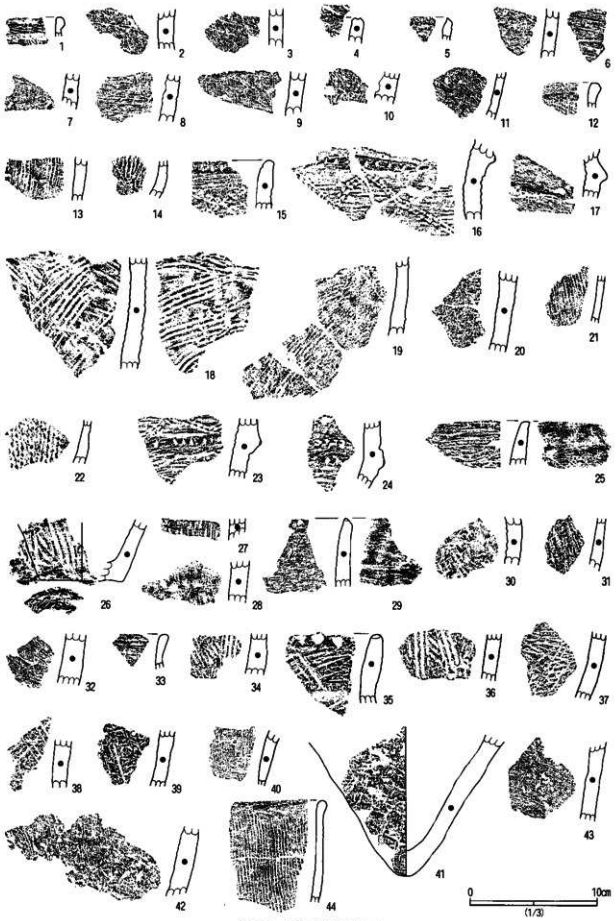
本遺跡から出土した縄文土器は、早期前半の井草式から早期後半の茅山下層式にかけてのものに限られる。撚糸文土器は主に包含層から出土し、条痕文土器は炉穴から出土しているものと、包含層から出土しているものがある。炉穴は合計28基検出されているが、このうち11基から土器が出土している。撚糸文土器が出土している炉穴も5基あるが、炉穴の設営時期の決定の根拠となる最新の土器はすべて条痕文土器であり、早期前半に設営された炉穴は確認できなかった。

胎土中に繊維を含む土器については断面中の黒点（ドット）で表示した。また、遺物番号は遺跡出土の縄文土器のすべてを一括して通し番号とした。内面の拓本については、条痕や擦痕の調整が認められるもののうち、調整が良好に残っているもののみを取り上げた。内面に条痕や擦痕の調整が、風化や剥落により提示できないものについては、その都度本文中に記載することとした。

ア、炉穴出土縄文土器（第65・66図、図版17・18）

024炉穴（第65図1～3、図版17）

1は肥厚する口縁端部の外面に撚糸文を横位に施し、胴部には縦位の撚糸文が施されている。2は表面のみに擦痕の調整が認められる。3は表面のみに擦痕の調整が認められ、胎土中の繊維の混入は少なく、焼成は堅緻である。3点とも覆土中からの出土であり、024炉穴の設営時期を明確にする根拠にはならないものの、最新の土器は子母口式土器（2・3）であることから、本炉穴の設営時期は子母口式期としてお



第65図　縄文時代遺物(1)

きたい。

025炉穴（第65図４～８、図版17）

４は口唇部に斜方向の刻みを施す。５は口唇の内面側が鋭利に作出される。６の表面は擦痕の調整であり、内面は浅い条痕の調整である。７・８の表面は擦痕の調整である。５点とも覆土中からの出土であり、025号炉穴の設営時期を明確にする根拠にはならないものの、土器はすべて子母口式土器であることから、炉穴の設営時期は子母口式期としておきたい。

028炉穴（第65図９、図版17）

９の表面には軽易なナデ調整と、わずかな擦痕の調整が認められ、内面は擦痕の調整が認められる。９は覆土中からの出土であり、028炉穴の設営時期を明確にする根拠にはならないものの、子母口式土器であることから、設営時期は子母口式期としておきたい。

029炉穴（第65図10・11、図版17）

10の表面は条痕の調整である。11は薄手の土器で、内外面ともに擦痕の調整である。10・11は共に覆土中からの出土であり、029炉穴の設営時期を明確にする根拠にはならないものの、最新の土器は茅山下層式土器(10)であることから、設営時期は茅山下層式期としておきたい。

030炉穴（第65図12～20、図版17）

12は肥厚、外半する口唇部の表面側に縄文が横位に施され、胴部には撚糸文が縦位に施される。13・14は撚糸文が縦位に施され、14は底部に近い部位の破片である。15・16は同一個体であり、二本一対の押引き沈線により格子状の意匠を描き、隆帯上と口縁端部に刺突が施される。内面は条痕の調整である。17の表面は軽易なナデ調整のみであり、内面には条痕の調整が認められる。18は内外面ともに深い条痕の調整が認められる。19は底部に近い部位の破片であり、内外面ともに軽易な条痕と擦痕の調整が認められる。20の表面は軽易なナデ調整である。９点とも覆土中からの出土であり、030炉穴の設営時期を明確にする根拠にはならないものの、最新の土器は茅山下層式土器(16～19)であることから、設営時期は茅山下層式期としておきたい。

031炉穴（第65図21～30、図版17）

21は堅緻な焼成で、浅い撚糸文が縦位に施される。22は脆弱な焼成で、節の大きい撚糸文が施される。23は030炉穴出土の15・16と同一個体である。24は隆帯上に浅い刻みが施され、隆帯の脇には半裁竹管の端部を用いた押引き文が施される。25の表面は浅い条痕の調整であり、内面は軽易な擦痕の調整であるが、破片下端には半裁竹管による斜方向の調整が認められる。26は表面に深い条痕の調整で、底面には極めて浅い条痕の調整が認められる。27の表面の調整は浅い条痕である。28の表面は擦痕の調整である。29は内外面ともに指頭によるナデ調整であり、口唇部の内面側は鋭利に作出される。30は内面に条痕が認められる。10点とも覆土中からの出土であり、031炉穴の設営時期を明確にする根拠にはならないものの、最新の土器は茅山下層式土器(23、24、26)であることから、設営時期は茅山下層式期としておきたい。

055炉穴（第65図31・32、図版17）

31の表面は極めて浅い条痕の調整の後にナデ調整が加えられる。32の表面は擦痕の調整である。２点とも覆土中からの出土であり、明確な時期も不明である。両者の胎土・焼成から判断して、子母口式期から茅山下層式期としておきたい。

056炉穴（第65図33・34、図版17）

33はやや肥厚・外半する口縁部は無文で、無文部以下に節の細かい撚糸文が縦位に施される。34の表面は条痕の調整である。2点とも覆土中からの出土であり、056炉穴の設営時期を明確にする根拠にはならない。最新の土器は条痕文土器の34であるものの、明確な時期は不明である。胎土、焼成から判断して茅山式期としておきたい。

072炉穴（第65図35～39、図版17）

35は口唇部に半裁竹管による刺突が施される。この刺突は上部から押捺されたものではなく、左斜め上から口唇部をえぐるように深く施されている。36は内外面ともに条痕の調整が認められる。37～39は同一個体で、内外面ともに浅い条痕の調整が認められる。5点とも覆土中からの出土であり、072炉穴の設営時期を明確にする根拠にはならない。5点とも条痕文土器であるものの明確な時期は不明であるが、胎土・焼成から判断して茅山式期としておきたい。

075炉穴（第65図40～43、図版17）

40の表面は擦痕の調整である。41は底部破片で1/2ほど遺存している。表面に軽易な擦痕の調整が認められる。42の表面は擦痕の調整である。43は底部に近い部位の破片で、41と同一個体である可能性が高い。4点とも覆土中からの出土であり、075炉穴の設営時期を明確にする根拠にはならないが、すべて子母口式土器であることから、子母口式期としておきたい。

085炉穴（第65図44、第66図45～68、図版17・18）

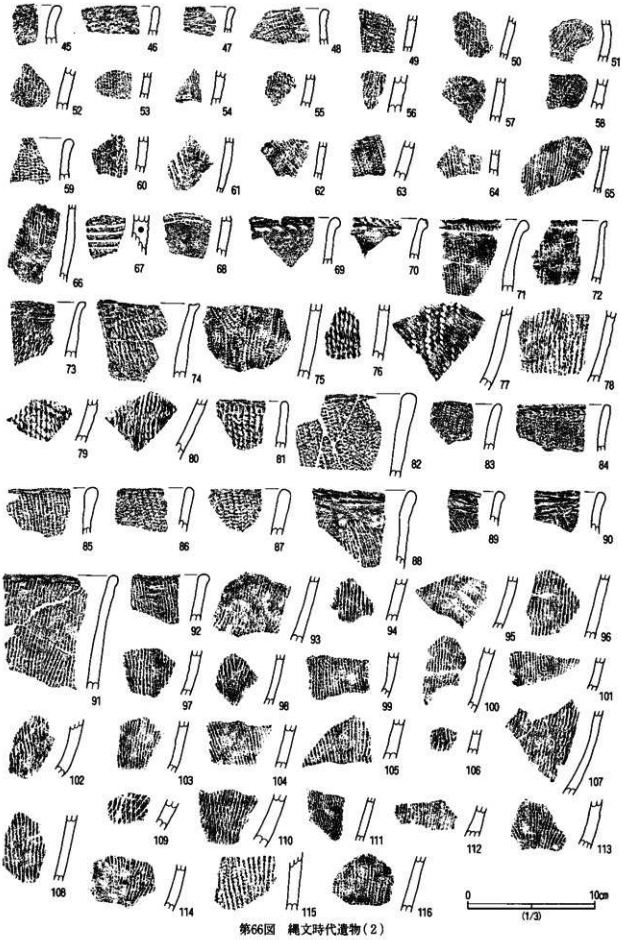
44から66は撚糸文土器であり、量的には出土土器の主体を占めるものであるが、炉穴の設営時期の決定根拠となる最新の土器はあくまでも67の条痕文土器である。このほかにも図示不可能ではあるが条痕文土器の少破片も5点出土している。おそらく085炉穴周辺に撚糸文土器の包含層が形成されており、流入したものと思われる。

44はわずかに肥厚、外半する口縁部は無文となり、胴部には縦位の撚糸文が施される。45は外反する口縁で、粗い撚糸文が口縁端部まで施される。46はまっすぐに立ち上がる口縁で、口縁部の無文帯の下に斜方向の撚糸文が施される。47は外反する無文の口縁部破片で、棒状工具による調整が認められる。48は外反する口縁部に縦位の撚糸文が施される。49～58・60～66は、節の細かい撚糸文が縦位に施される胴部破片である。59は外反する口縁部と口唇部に縄文が施される。67の表面には条痕の調整が認められる。62は径の小さい半裁竹管による横位の施文が認められる。詳細な時期は不明である。以上25点は全て覆土中の出土であり、085炉穴の設営時期を明確にする根拠にはならないが、前述のとおり、最新の土器は条痕文土器(67)であり、胎土・焼成から判断して茅山式期としておきたい。

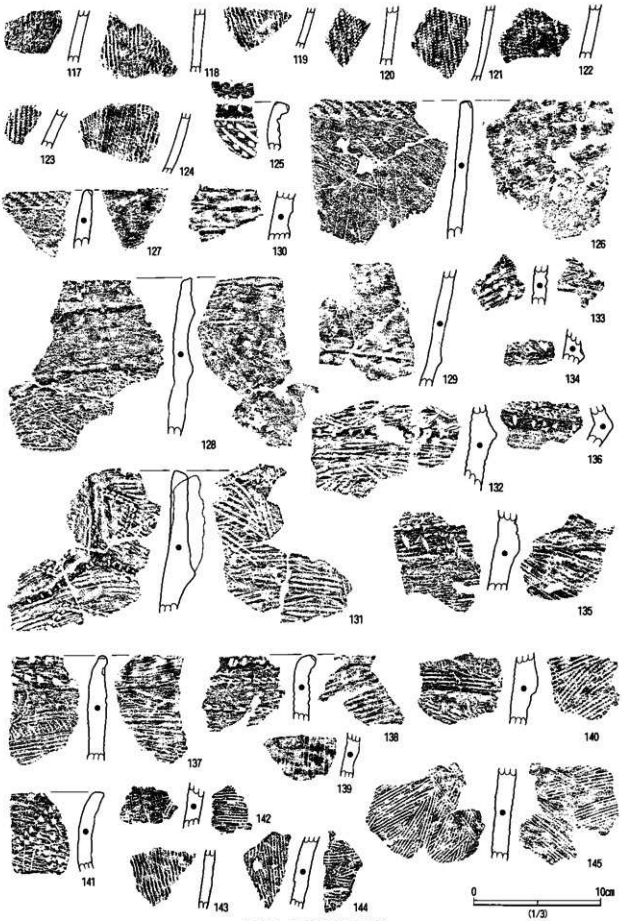
イ、遺構外出土縄文土器（第66図69～第69図208、図版18～21）

遺構外から出土した縄文土器は、調査範囲全体から散漫に出土しており、特定の時期の土器が集中して出土するような傾向は認められなかった。

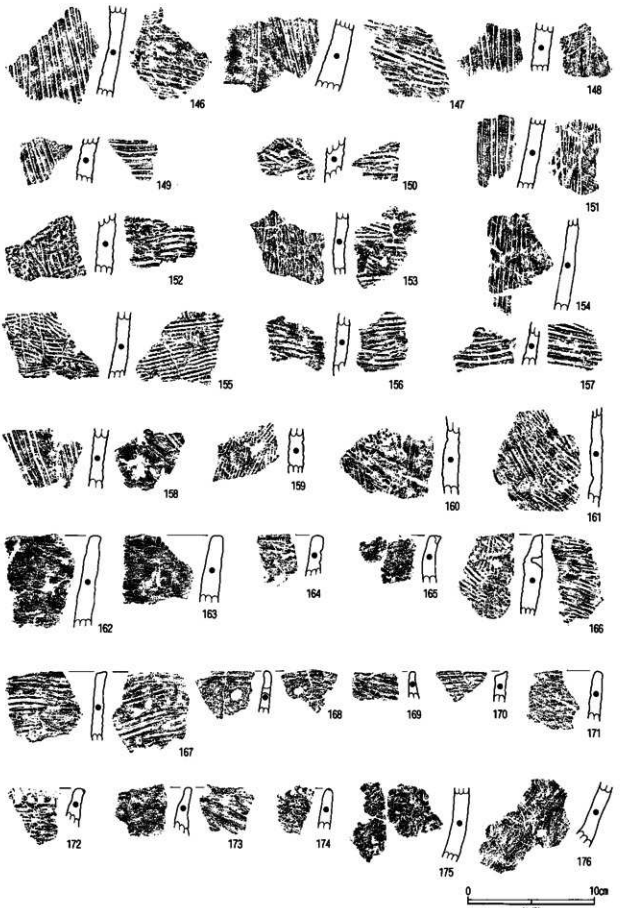
69は井草式土器である。70は井草Ⅱ式土器で口唇部に小さな刻みが施される。小形土器であろう。71は井草Ⅱ式土器である。72～74は大丸式土器で撚糸文が施される。75～80は井草式土器又は夏島式土器である。79は031炉穴出土の22と同一個体である。81～92は夏島式土器である。81は撚糸文が施される。82～87は縄文が施される。88～90は口唇部に横位のナデ調整が認められ、撚糸文が施される。91・92は夏島式土器で口唇部まで撚糸文が施される。93～114は撚糸文が施される、胴部から底部付近の破片である。115～124は縄文が施される、胴部から底部付近の破片である。126・127は同一個体で、口縁端部から口唇部



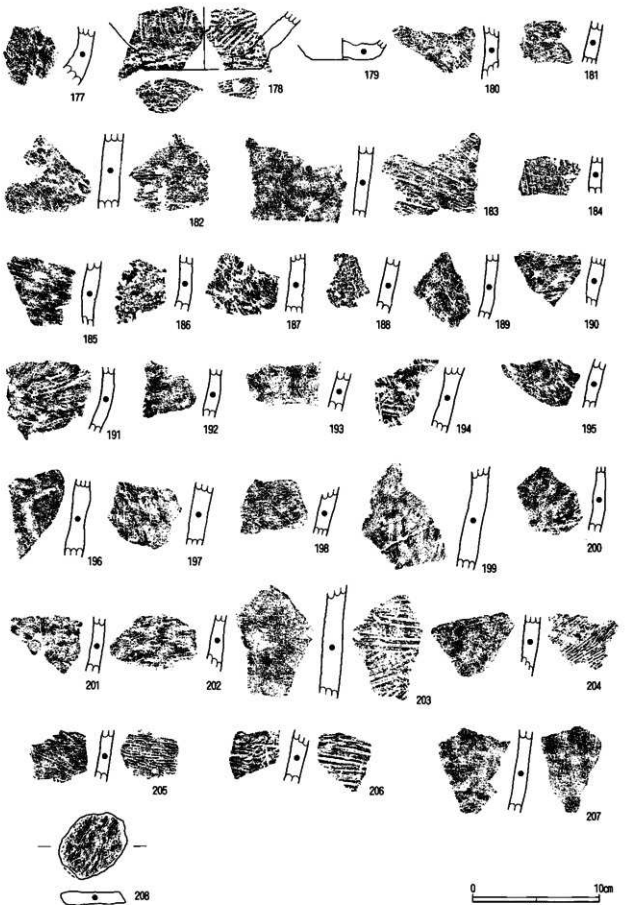
第66図　縄文時代遺物（2）



第67図　縄文時代遺物（3）



第68図　縄文時代遺物(4)



第69図　縄文時代遺物(5)

に絡条体圧痕が施される。128～142は茅山下層式土器である。131と132は同一個体で、030炉穴出土の16と同一個体である。

143～208は細かな時期が不明である。143～145は細かい条痕の調整が認められるものである。146～161は条痕の調整が認められる胴部破片である。162～165は無文の口縁部の破片である。166～174は条痕の調整が認められる口縁部の破片である。170は口唇部の内側が鋭利に作出されている。174の口唇部には刻みが施される。175～178は浅い条痕の調整が認められる、胴部から底部の破片である。180～207は表面に条痕の調整が認められない胴部破片である。208は土器片の側縁を加工し楕円形に仕上げた、土器片製円盤である。長軸上の一部(拓影図左下)が欠損している。表面は軽易なナデ調整が認められ、内面には細かな条痕の調整が認められる。詳細な時期は不明である。

3．古墳時代

（1）概要

今回の調査で古墳時代の遺構としては後期の住居跡18軒が検出された。そのほかには竪穴状遺構1基が検出された。

（2）遺構・遺物

001住居跡（第70・71図、図版22・29）

本遺構は、6G－06グリッド周辺に位置し、調査区中ではやや大型の住居である。周辺には002住居跡、003住居跡が近接し、002住居跡とは約1ｍの至近距離のため同時存在はあり得ないと思われる。遺構の規模は、6ｍ×5.8ｍの隅丸のほぼ正方形で、主軸を北東に約45°傾けている。遺構の掘込みは浅く、ソフトローム層の遺構検出面からの深さは10cm～15cmほどであった。そのため遺構全体の遺存状況はよくなかった。床面上に焼土、炭化材が検出され、焼失住居であることが分かる。床面は貼床がなされ、柱穴間は固く踏み固められていた。柱穴は対角線上に4か所検出されているが、各々その規模等に差があり建て直し、抜取り等が考えられる。壁溝はなく、カマドの右側壁際に貯蔵穴状の方形土坑が3基掘り込まれている。いずれも外形は方形で1ｍ前後の大きさを持ち、P_3は外形の掘込みは浅く、その中にさらに円形の掘込みが見られる。深さは、外形は5cmほどで、内形は深く約60cmである。P_4は深さ5cmと浅く、P_7は深さ約40cmを測る。P_4とP_7の中間に間仕切状の溝が認められ、規模は長さ80cm、幅20cm、深さ10cmを測る。またP_5、P_6の間からP_8を囲むように高さ約5cm～10cm、幅15cmほどの土手状の高まりが造られている。P_8を意識した土手状遺構で、遺物の特別な出土状況は認められなかったが、何らかの構造物であったことがうかがわれる。

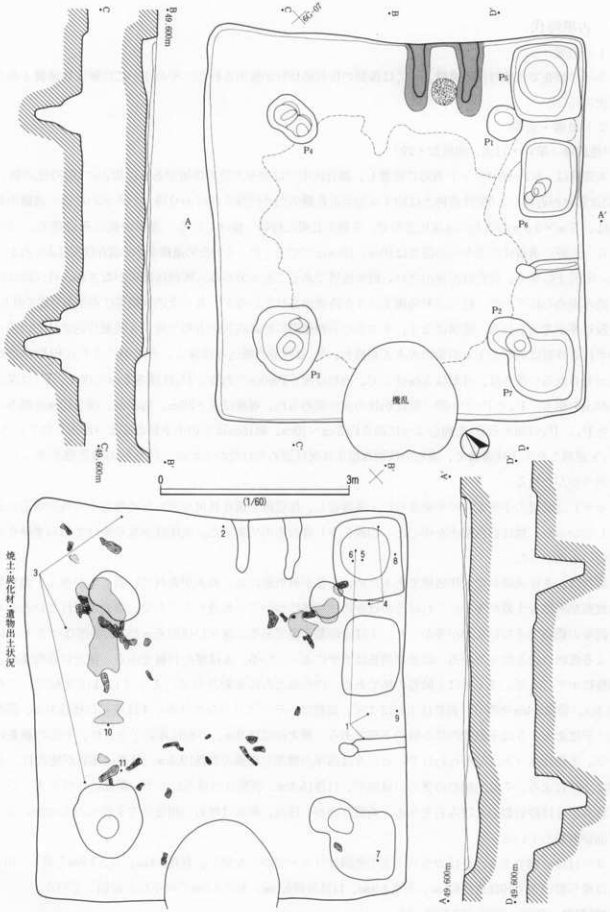
カマドは北壁の中央よりやや東寄りに1基所在し、住居跡の遺存状況が悪いため煙道から外の構造は遺存しなかった。袖は白色粘土を中心とし山砂を少し含むものであった。火床はあまり焼けておらず硬化の度合いも低かった。

遺物は、本住居跡が焼失住居跡であるため、土器が再焼成に会い器表が荒れているものが多く、調整等の観察が困難な土器が多い。これはそのほかの住居跡についても共通したことで、器表が荒れているために調整の観察できないものが多かった。1は土師器の甕である。復元口径22.6cmで、口唇部はつまみ上げによる波状口縁となっている。器表の調整はナデによっている。2は甕の口縁である。復元口径22.2cm、調整はナデによる。3・4は土師器の坏である。内外面ともに赤彩されている。3はほぼ完形で、口径13.3cm、器高5.4cmを測り、調整は上部はナデ、底部はヘラケズリがなされる。4は復元口径15.0cm、調整はナデによる。5は土師器の坏か碗の下部である。最大径は16.0cm、外面は赤彩がなされ、上部の調整はナデ、下部はヘラケズリが行われている。6は高坏の脚部で底部の直径10.4cm。外面は赤彩が施され、調整はナデによる。7は土師器の甕の口縁部で、口径15.4cm。調整は口縁部はナデ、胴部はヘラケズリがなされる。8は砂岩製のくぼみ石である。両側2面がくぼみ、側面は擦石の用途にでも使ったものか、5・6面が磨耗している。

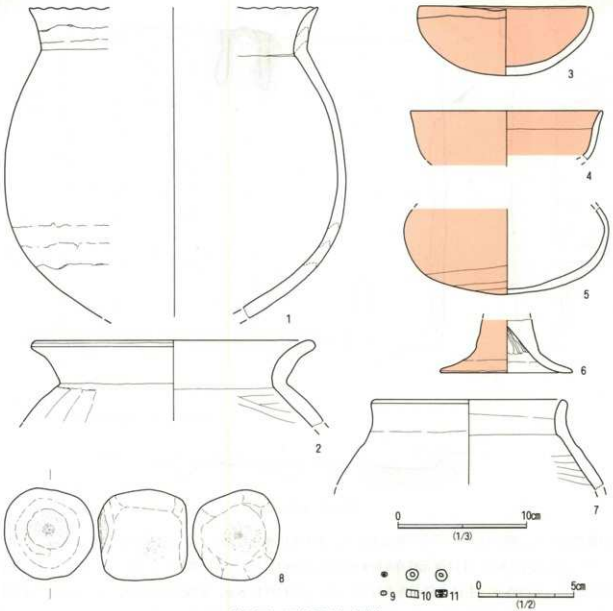
9～11は玉類である。9はガラス小玉で色調はライトブルーを呈し、直径2.4mm、長さ1.9mmを測る。10・11は滑石製臼玉で10は直径6.1mm、長さ3.9mm、11は直径6.1mm、長さ3.2mmで両小口が破損している。

002住居跡（第72・73図、図版22・29）

本住居跡は、6G－44グリッド周辺に位置し北側に001住居跡が近接する。規模は5.2ｍ×4.9ｍの隅丸方



第70図　001住居跡

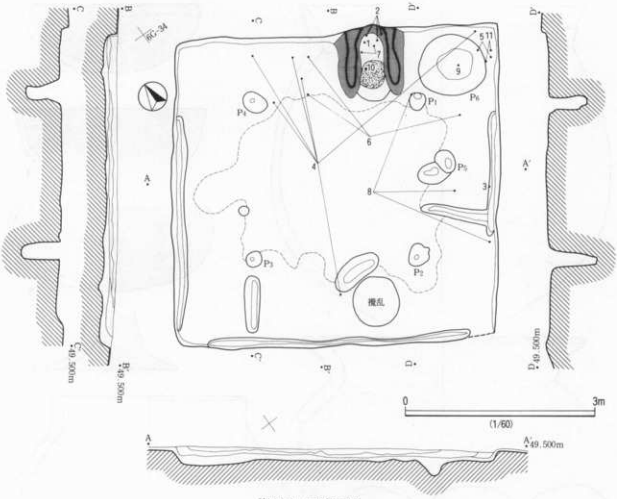


第71図　001住居跡出土遺物

形で、主軸を北東に約55°傾ける。001住居跡同様に掘込みは浅く、深さ約15cm～30cmである。床面上には完形の状態ではなかったが、炭化材片、焼土が検出され焼失住居であったとみられる。床面は貼床がなされ、中央部分は踏み固めによって硬化している。柱穴は対角線上のやや内側に5本検出され、直径約50cm、深さ約50cmを測る。壁溝はカマドの位置する辺以外の一部に検出され、深さ約5cmである。北東隅に貯蔵穴が認められ、円形で直径約1m、深さ約60cmを測る。P_3から壁に向かう部分と、P_3、P_2の間に間仕切溝が検出され、規模は長さ1m前後、幅約20cm、深さ約5cmである。

カマドは北東辺の中央やや東寄りに1基検出されたが、遺存状況が悪いため煙道は残っていなかった。袖は白色粘土質山砂で造られ、火床は焼けて硬化している。全体的には遺存は悪いながらもしっかりした造りのカマドだったようである。

遺物は、遺存状況が悪く器表の観察ができないものが多かった。1～10は土師器、11は須恵器である。1は甕で、口径は12.4cmを測り、口縁外面は横ハケメ、内面はナデ、胴部外面はヘラケズリの調整がなされる。2は短頸壺で口径13.8cm、器高10.1cmを測る。外面全面と口縁部内面は赤彩が施されている。調整

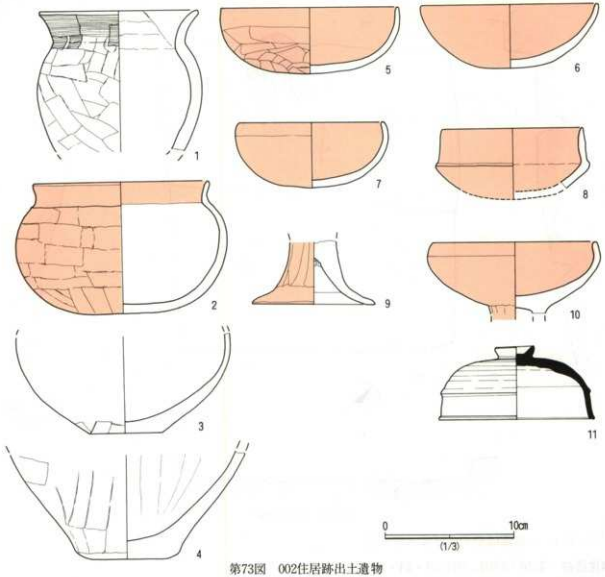


第72図　002住居跡

は口縁部はナデ、胴部はヘラケズリがなされる。3・4は甕の底部で、3は被熱によりぼろぼろの状態であった。3は底径5.8cm、4は復元底径8.0cmを測り、外面はヘラケズリ調整がなされる。5～8は土師器の坏で、すべて内外面ともに赤彩が施されている。5は口径13.8cm、器高5.2cmを測り、内面と口縁部はナデ、外面はヘラケズリがなされる。6は復元口径14.0cm、復元器高5.0cmを測る。7は被熱によりぼろぼろの状態で、復元口径11.4cm、復元器高5.0cmを測る。8は口唇部がほぼ垂直に立ち上がり、復元口径11.0cm、復元器高5.5cmを測る。ナデによる調整がなされ、体部外面はヘラケズリがなされる。9は高坏の脚部で外面には赤彩が施される。ヘラケズリの調整がなされる。10は高坏の坏部で、口径12.8cm、内外面ともに赤彩が施されている。内面はナデが施される。11は須恵器の坏蓋で口径12.0cm、器高5.6cmを測り、つまみの径は3.0cm、高さは0.9cmを測る。外面はヘラケズリ後、横ナデが施される。ややロクロ目もうかがわれる。色調は暗灰色で、焼成時の焼き膨れが数か所認められる。TK－47形式であろう。

003住居跡（第74・75図、図版23・30）

本遺構は、6F－56グリッド周辺に位置し、台地の平坦部が終わり斜面の始まる部分に位置している。遺構の北側半分は遺存していたが、南半分は谷へ向かう傾斜のために遺存せず、床面も北側半分しか検出できなかった。遺存していた状況から規模等を求めると、主軸を東へ約35°傾けた隅丸方形の形態になるものとみられ、長軸4.8ｍ、短軸4.5ｍ程度の規模で復元した。山側での掘込みの深さは約50cmあるが、南側では標高が1.2ｍも下がっているので、床面も遺存していない。柱穴になるとみられるピットが4基検

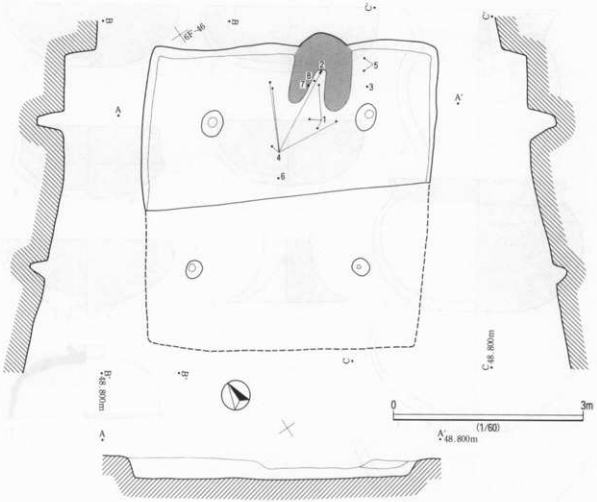


第73図　002住居跡出土遺物

出され、遺構のほぼ対角線上に位置するものとして形態の復元を行った。柱穴は直径約30cm～50cm、深さは約40cmである。床面は北側半分しか遺存していないが、貼床で構築されてはいたが硬化は特に認められなかった。掘込みはしっかりしていたが、壁溝はなかった。

カマドは、北辺の中央やや東寄りに位置し、袖は白色粘土系山砂で構築されている。袖は大型でしっかりしている。

遺物は、住居跡の遺存状況の割には量が多かった。1～4は土師器の甕である。1は口径17.6cmを測り、口縁部はナデで調整される。2は口径17.2cmで調整はナデである。3は口径12.8cm、口縁部はナデ、胴部はヘラによるナデが施される。4は底径5.8cmを測り、外面は縦のヘラナデ、内面は横のヘラナデで調整される。5、6は土師器の坏でともに内外面は赤彩されている。5は口径15.5cm、復元器高7.3cmを測り、口縁部は横ナデ、外面はヘラケズリ、内面は横ナデが施される。外面にはススの付着が何か所か認められ、口縁部内面にもススが付着している。6は口径13.6cm、器高5.4cmを測り、器表はぼろぼろに風化しているため調整痕は観察できない。7は土師器の甕の底部である。底径6.8cmを測る。8はカマド内出土の土製支脚である。断面形は八角形を呈し、作成時にヘラ等で8面体に整形したのであろう。現存長16.3cm、径約5cmで、上部約7cmはカマドでの使用によるものか、被熱によってぼろぼろに風化している。下部は



第74図　003住居跡

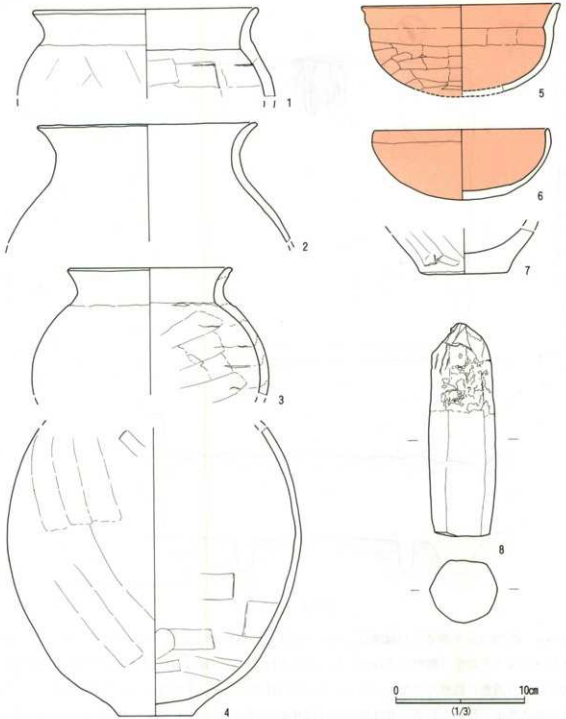
遺存がよい。下端部はややすぼまっている。

004住居跡（第76・77図、図版23・24・30・31）

本遺構は、5F－99グリッド周辺に位置し、周囲には005住居跡、010住居跡が近接する。位置関係からは010住居跡とは同時存在は無理と考えられる。規模は4.8ｍ×5.3ｍの隅丸長方形を呈し、主軸を約45°西に傾ける。台地の緩傾斜が始まっているために遺構の壁の高さは一様ではなく、北側では60㎝、南側では20㎝ほどしかない。床面は、貼床がなされているが踏み固めはあまりされていなかった。柱穴はほぼ対角線上に４本検出され、直径約25㎝、深さ50㎝を測る。壁溝は南寄りの部分に検出され、深さ約５㎝である。北西の隅の部分に貯蔵穴が検出され、直径約１ｍ、深さ50㎝を測る。

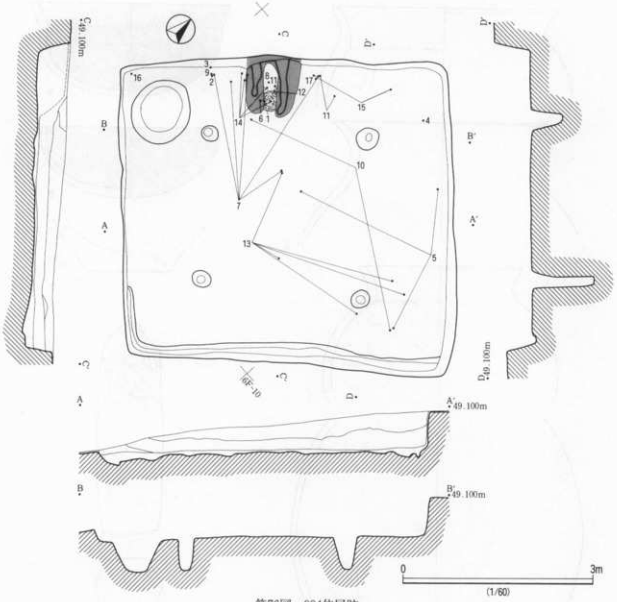
カマドは、主軸中央に位置し、袖は白色粘土質の山砂で構築されしっかりしていた。壁の高さが約60㎝も遺存しているのに煙道が確認されず、煙道がさらに高い位置まで立ち上がった後に外側へ延びるタイプのカマドだったものと思われる。火床はよく焼けて硬化していた。カマド内には遺物が多く遺存していた。

遺物は、本遺跡の中では出土量が多い。１～４は土師器の甕である。１は口径16.4㎝を測り、胴部が大きく外に開く形態を示す。器表が荒れていて外面の調整はほとんどうかがうことができないが、口縁部はナデによって調整され、胴部はヘラケズリによるようである。外面には赤彩が施される。２は復元口径14.0㎝の甕で、被熱により器表はぼろぼろである。被熱によるものか焼成時によるものか、形態はかなり歪んでいる。口縁部はナデによって調整され、胴部外面はヘラケズリがなされている。３は口径12.6㎝を



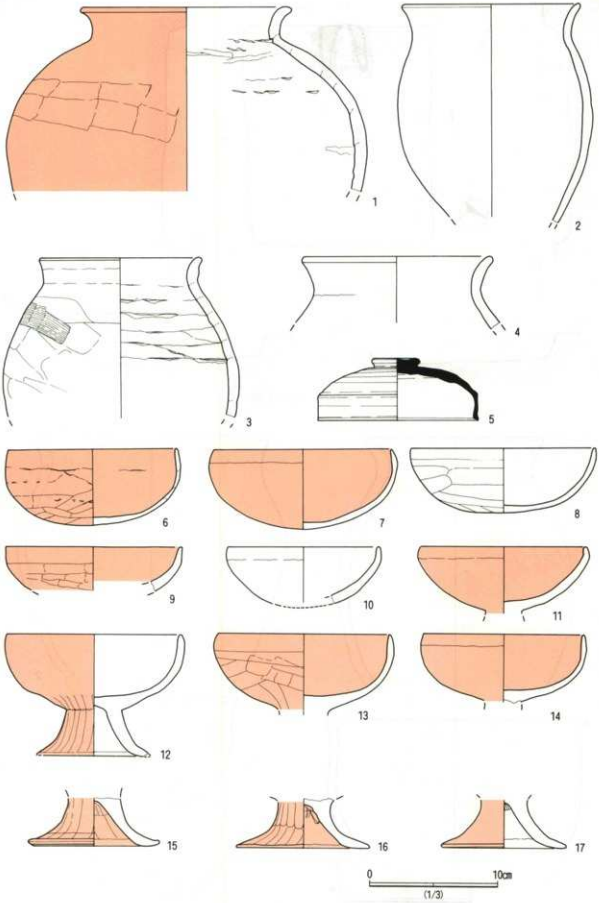
第75図　003住居跡出土遺物

測る甕で、被熱によるものか器表は劣化してぼろぼろになっている。口縁部はナデによって調整され、外面胴部の上部には一部ハケメが見られ、それ以外はヘラケズリがなされている。全体的にやや粗い仕上げの土器である。4は甕の口縁で、復元口径15.0cmを測り、口縁部はナデが行われている。5は須恵器の坏蓋で口径12.5cm、器高4.8cm、つまみ径3.7cmを測る。色調は灰白色で、ややロクロ目の残る器表に外面上部はヘラケズリが認められる。002住居跡出土の須恵器の坏蓋（11）と同じくTK－47形式とみられる。6～10は土師器の坏で、そのうち6・7・9は内外面ともに赤彩が施されている。6は口径13.2cm、器高5.8cmを測る。内面と口縁部外面はナデが施され、下部はヘラケズリが施される。赤彩されている。7は

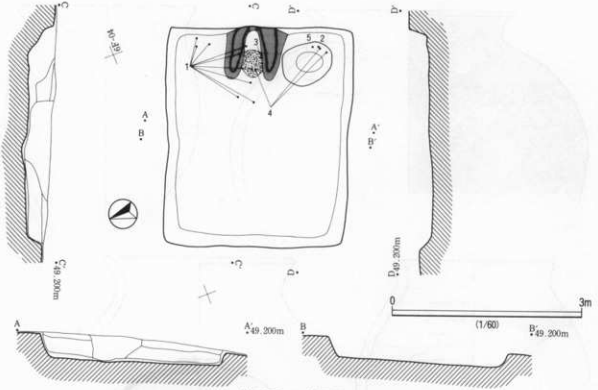


第76図　004住居跡

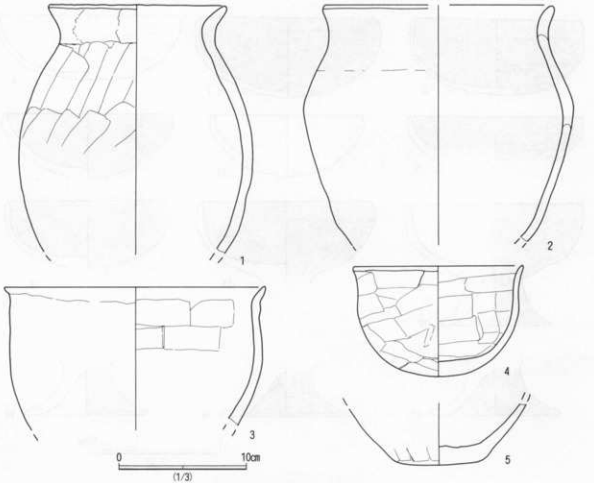
口径14.0㎝、器高6.1㎝を測る。口縁部近くはナデによって整形されるが、それ以外の部分は被熱によって器表がぼろぼろで調整は観察できなかった。赤彩されている。8は口径14.4㎝、器高4.9㎝を測り、内面は劣化により調整が観察できなかったが、外面は口縁部がナデ、下部はヘラケズリが施されている。外面には一部に黒斑が認められる。9は復元口径13.8㎝で、内面と口縁上部はナデ、下部はヘラケズリが施されている。赤彩されている。10は復元口径12.0㎝で、器表が荒れているため調整は観察できなかった。11～17は土師器の高坏である。11は坏部で、器表が荒れていて調整は観察できなかった。復元口径13.0㎝で、内外面ともに赤彩されている。12は口径13.6㎝、復元器高9.3㎝を測り、坏部の器表は荒れている。脚部はヘラケズリによって調整されている。外面は赤彩されている。13は坏部で口径13.6㎝を測り、内面と口縁部はナデにより、外面はヘラケズリによって調整されている。内外面ともに赤彩されている。14も坏部で口径12.8㎝を測り、器表が荒れている。内外面ともに赤彩されている。15～17は脚部で、15・16は内外面ともに赤彩が施され、17は外面と内面の下部に赤彩が施される。15は底径10.2㎝でヘラケズリによって調整され、16は底径10.4㎝でヘラケズリ調整、17は復元底径9.8㎝でナデによって調整されている。



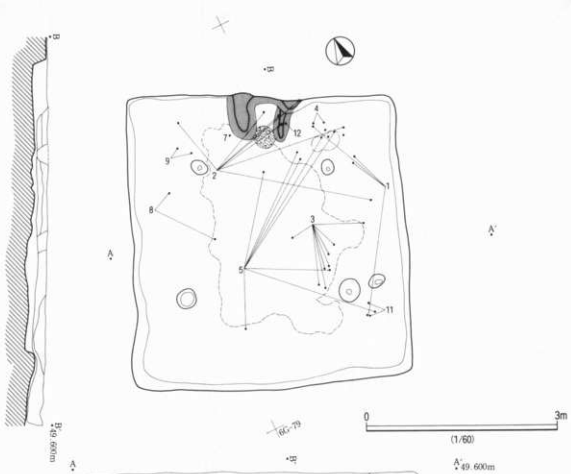
第77図　004住居跡出土遺物



第78図　005住居跡



第79図　005住居跡出土遺物



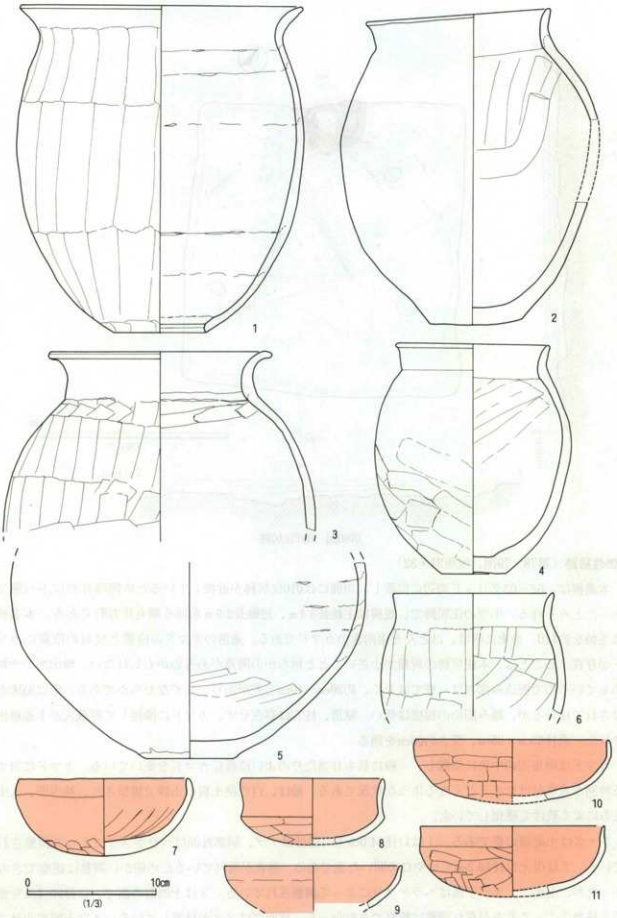
第80図　007住居跡

005住居跡（第78・79図、図版24・32）

本遺構は、6F−03グリッド周辺に位置し、周囲には010住居跡が近接しているため同時存在は不可能であったとみられる。小型の住居跡で、規模は主軸長3.4ｍ、短軸長2.9ｍを測る隅丸長方形である。本遺構は主軸を約110°南東に向け、ほとんど南向きのカマドである。通常のカマドの位置と反対の位置にカマドが存在することは、本住居跡の規模が小さいことと何らかの関連があるのかもしれない。地山がやや傾斜しているので掘込み深さは一様ではなく、約20cm～40cmと差があり、ややなだらかである。床は貼床がなされてはいるが、踏み固めの程度は低い。壁溝、柱穴は存在せず、カマドに隣接して貯蔵穴が１基検出された。直径65cm×85cm、深さ約60cmを測る。

カマドは南東辺の中央に位置し、一般に最も日当たりのよい位置にカマドを築いている。カマドに対する特別な意味付けを考えたくなるような状況である。袖は、白色粘土質の山砂で構築され、袖内面、火床ともによく焼けて硬化していた。

１・２は土師器の甕である。１は口径14.0cmで口縁部はナデ、胴部外面はヘラケズリによって調整されている。２は復元口径18.2cmでやや口の開いた甕である。器表が荒れているため細かい調整は観察できなかったが、上部はナデ、下部はヘラケズリによって調整されている。３は土師器の甕で、口径20.4cmを測る。被熱によって器表が荒れ調整は観察できなかった。外面にはススが付着している。４は土師器の鉢である。復元口径13.4cm、復元器高8.5cmである。内外面ともにヘラナデによって調整されている。５は土



第81図　007住居跡出土遺物

師器の甕の底部である。復元底径6.6cmである。

007住居跡（第80・81図、図版25・32・33）

本遺構は、6G－59グリッド周辺に位置し、調査区の中では最も東に位置する住居跡である。周囲には001住居跡、002住居跡が存在している。規模は主軸長4.6ｍ、短軸長4.2ｍのほぼ隅丸方形を呈し、主軸を約25°東に傾ける。掘込みの遺存は非常に浅く10cmほどで、一部土層の断面観察によって規模を決定した部分もある。床面は貼床によって構築され、中央部分は踏み固めによって硬化している。柱穴はほぼ対角線上に４本検出され、直径約30cm、深さは約10cm～20cmと浅めである。壁溝はなく、貯蔵穴も検出されなかった。

カマドは主軸上のほぼ中央に位置し、袖の遺存状態はやや悪く、灰白色粘質の山砂で構築されているがやや軟弱な造りであった。火床はやや焼けて硬化していた。煙道は確認されず、より高い位置から外側へ延びていたものとみられる。

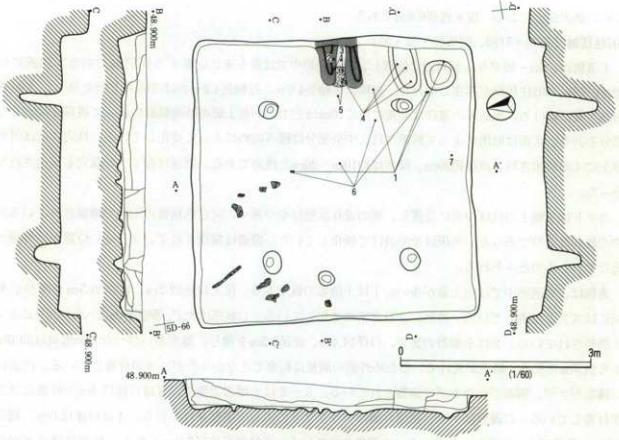
遺物は、本遺跡中では出土量が多い。１は土師器の甕である。復元口径22.2cm、器高25.5cmを測り、外面にはススが付着している。被熱により非常に劣化している。口縁部はナデ、胴部外面はヘラケズリによって調整されている。２は土師器の甕で、口径14.4cm、底径7.2cmを測り、器形がいびつなため器高は23.6cmから24.7cmを測る。器表が荒れているため外面の調整は観察できなかったがススが付着している。内面は口縁部がナデ、胴部がヘラナデで調整されている。３～６は土師器の甕で、３は口径17.4cmで外面にススが付着している。口縁部はナデ、胴部外面はヘラケズリによって調整されている。４は口径12.0cm、底径5.0cm、器高17.6cmを測る。ナデによって調整されている。５は復元底径7.6cmとなる。外面にはススが付着している。６は復元口径12.6cmで口縁部はナデ、胴部はヘラナデによって調整されている。７～11は土師器の坏で、すべての坏が内外面ともに赤彩されている。７は口径13.2cm、器高5.9cmを測り、口縁部の内外面と外面にはススが付着している。内面と口縁部はナデによって、外面はヘラケズリによって調整されている。８は復元口径11.2cm、復元器高5.1cmである。内面と口縁部はナデ、外面はヘラケズリによって調整される。口縁部がほぼ垂直に立ち上がる。９は復元口径14.0cmで、10は復元口径15.2cm、復元器高5.0cmである。11は復元口径14.4cm、復元器高5.4cmで、内面と口縁部はナデ、外面はヘラケズリが施される。

009住居跡（第82・83図、図版25・33）

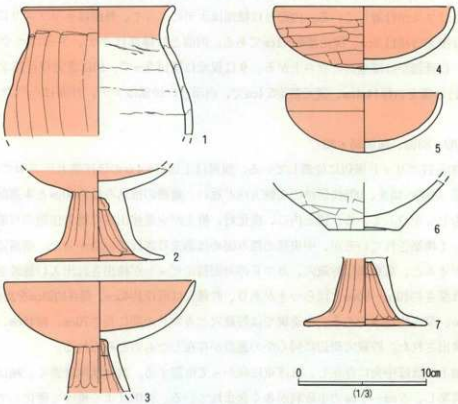
本遺構は、5D－77グリッド周辺に位置している。規模は１辺約4.4ｍのほぼ隅丸正方形であるが、主軸の方向が約100°南東へ傾き、005住居跡の主軸方向と近い。遺構の掘込みは約50cmと本遺跡内では比較的深く、掘込みもしっかりしている。覆土内に、炭化材、焼土が少量検出され焼失住居の可能性が高い。床面は貼床によって構築されているが、中央部の踏み固めはあまりされていなかった。壁溝は存在せず、対角線上に柱穴が４本と、南東隅に貯蔵穴、カマドの対面側にピットが検出され出入口施設を設けたものであろう。柱穴は深さ約40cm～80cmとばらつきがあり、貯蔵穴は直径約45cm、深さ約25cmを測る。出入口ピットは直径約25cm、深さ約15cmである。本遺構では貯蔵穴とカマドの間に長さ70cm、幅45cm、高さ約５cmの土手状遺構が検出された。貯蔵穴周辺に何らかの施設が存在したものとみられる。

カマドは主軸上のほぼ中央に存在し、ほぼ東に向かって位置する。遺存状態は悪く、袖は褐色の粘質山砂を主として構築し、５mm～１cmの小砂利が多く含まれている。火床はよく焼けて硬化している。

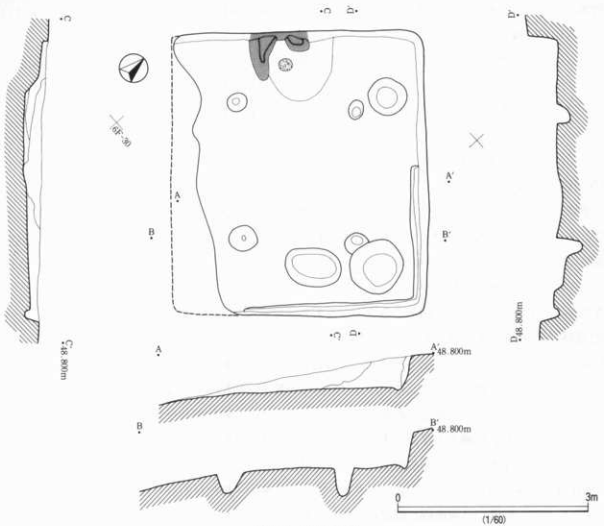
遺物はカマド近くに多く、赤彩したものが多かった。１は土師器の甕である。復元口径12.0cm、口縁部



第82図　009住居跡



第83図　009住居跡出土遺物



第84図　010住居跡

内面から外面全面にかけて赤彩されている。口縁部はナデ、胴部はヘラケズリが施される。2は高坏で、内外面に赤彩が施されている。底径10.0cmを測り、脚部はヘラケズリ、底部はナデが施される。3も高坏で、口径15.0cm、内外面ともに赤彩が施されている。口縁部はナデ、それ以外はヘラケズリによって調整されている。4・5は土師器の坏で、4は内外面ともに赤彩され、口径14.0cm、器高4.8cmを測る。内面と口縁部はナデ、外面はヘラケズリが施される。5も内外面に赤彩が施され復元口径12.2cm、復元器高4.6cmである。内面と口縁部はナデ、外面はヘラケズリが施される。6は土師器の甕の底部で、底径5.6cmを測る。外面はヘラケズリがなされる。7は土師器の高坏の脚部である。底径9.6cmを測り、内外面ともに赤彩されている。脚部はヘラケズリ、底部はナデによって調整されている。

010住居跡（第84図、図版25）

本遺構は、6F－21グリッド周辺に位置し、近くには004住居跡・005住居跡が所在する。地山が谷に向かって傾斜しており、遺構の一部は検出されなかった。そのため一部を復元して規模を求めると、主軸長4.5ｍ、短軸長3.9ｍの隅丸長方形になるものと思われる。主軸は西に約50°傾き、掘込みの深さは台地上側で約50cmを測る。床面は貼床によって構築されているが、踏み固めはあまりされていなくて軟弱である。壁溝は東の隅に存在し、幅約15cm、深さ約5cmを測る。柱穴はほぼ対角線上に4本存在し、直径約30cm、深さ約20cmから40cmを測る。はかに貯蔵穴状の土坑が3基存在し、カマドに近いものから直径約60cm、深

さ約20cmのものと、直径80cm、深さ約45cmのもの、さらに直径60cm×90cm、深さ約10cmのものがあり、2番目のものが貯蔵穴とみられる。

カマドは非常に遺存が悪く、右側の袖が大きく破壊されていた。攪乱によるものではなく、意図的に破壊したような状態であった。袖は白色粘質の山砂を用いて構築したようであるが、右袖は破壊され、また火床部はほとんど焼けて硬化していなかったことから、この状態ではほとんど使用されていなかったようである。

図示できるような遺物は出土しなかった。

011住居跡（第85図）

本遺構は、6E－18グリッドに位置し非常に遺存の悪い住居跡である。地山の傾斜のためにごくわずかの壁と床しか検出できなかった。検出した範囲は長さ2.5ｍ×1.5ｍの長方形の範囲で、隅丸方形の小形の住居跡の痕跡とみられる。掘込みはなだらかで、深さ約25cmを測る。床面には柱穴・壁溝等の掘込みはなく、炉・カマド等も検出されなかった。

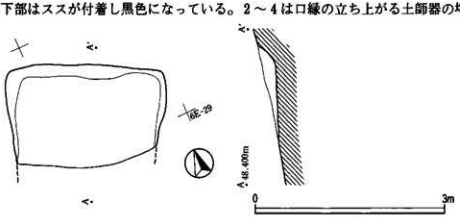
遺物も、出土がほとんどなく図示できるようなものはなかった。

039住居跡（第86・87図、図版26・33）

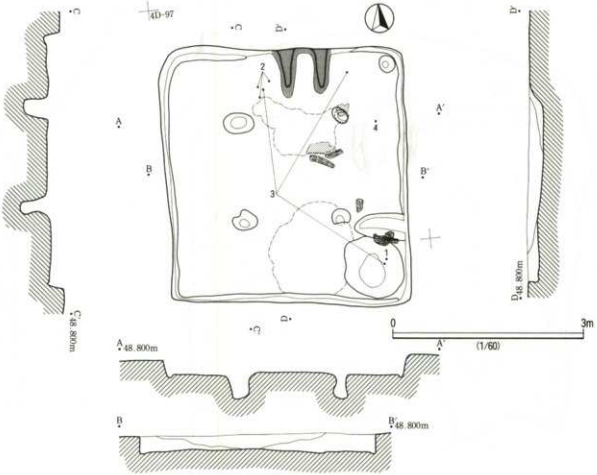
本遺構は、5D－07グリッド周辺に所在し、やや近接して南西に074住居跡が所在する。規模は4ｍ×3.8ｍの隅丸長方形で、主軸をほぼ真北に向ける。掘込みの深さは約20cm～30cmで、床面は貼床によって構築されている。カマド前面の一部と、貯蔵穴周辺に踏み固めによる硬化部分が見られた。壁溝は、カマド近辺以外はほぼ全周し、貯蔵穴の部分で床面の内側に間仕切溝状に約80cm入り込んで貯蔵穴を取り巻くように巡る。柱穴は、4本存在し、やや床面の中央に接近し、さらに全体にカマド側によった配置となっている。直径は約30cm～約40cm、深さ約40cmである。床面には焼土・炭化材が見られ、本遺構は焼失住居であると考えられる。貯蔵穴は東南隅に位置し、直径約1ｍ、深さ約40cmを測る。貯蔵穴の北側は、壁溝が壁面から内側へ幅広になって約80cm入り込んでいる。溝幅は約40cmで深さは約5cmと浅く、間仕切溝の機能としては幅広すぎる。貯蔵穴を取り囲んで上部に何らかの工作物が構築されていた可能性が考えられる。

カマドは主軸上ほぼ中央に位置し、袖は白色粘土質の山砂で構築されていた。煙道は確認できず、火床の硬化の割合も低かった。

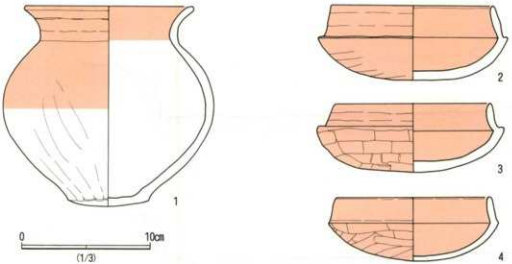
1は土師器の甕である。口径13.2cm、器高15.4cmを測る。底部が平坦でなく中央がやや突出しているため安定しない。口縁部には接合痕が残り、外面はヘラケズリがなされる。口縁の内面から外面胴部中央まで赤彩が施されている。胴下部はススが付着し黒色になっている。2～4は口縁の立ち上がる土師器の坏



第85図　011住居跡

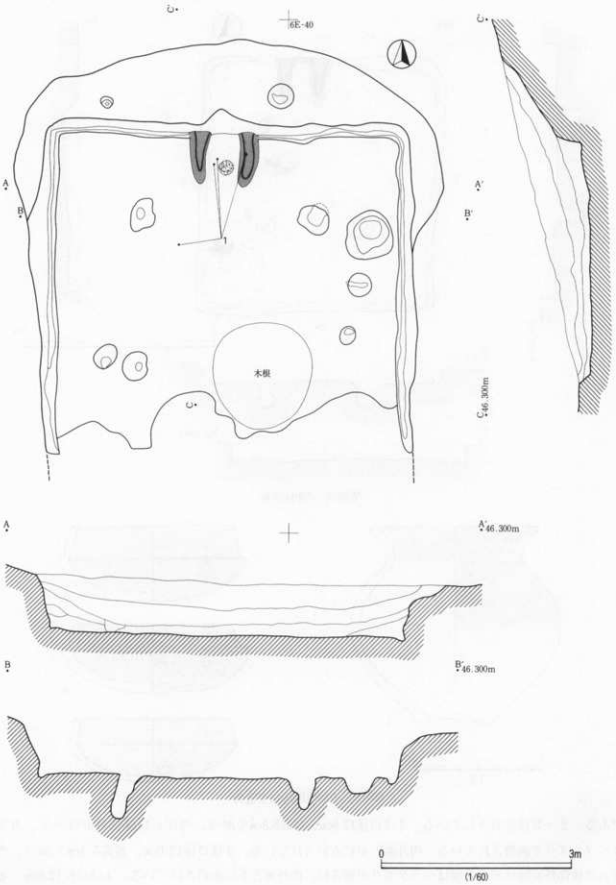


第86図　039住居跡

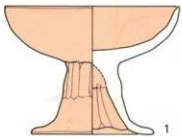


第87図　039住居跡出土遺物

である。2・3は赤彩されている。2は口径12.6cm、器高5.8cmを測り、内面と口縁部外面はナデ、外面はヘラケズリで調整されている。内外面ともに赤彩されている。3は口径12.0cm、器高5.3cmを測り、内面と口縁部外面はナデ、外面はヘラケズリが施され、内外面ともに赤彩されている。4は口径12.0cm、器高4.9cmを測り、内面と口縁部はナデ、外面はヘラケズリが施される。内外面ともに赤彩されている。3・4は外面にススの付着が認められた。



第88図　050住居跡



第89図　050住居跡出土遺物

050住居跡（第88・89図、図版26・34）

本遺構は、6D－59グリッド周辺に所在し、地山の傾斜の最も急な部分に位置している。そのため住居跡の上部（カマドのある側で台地の平坦部に近い方）から見ると遺構の床面までの高さは約1.4ｍあるが、住居跡の下部（斜面の下側で谷に近い方）から見ると床面は遺存せず削平されている。さらに立木の根もあり、住居跡の遺存状況はよくなかった。調査区内で最も南側に位置する住居跡である。規模等全容は、南側の壁が検出されなかったため確定的なことは言えないが、推定復元して取り扱うことにする。形態は復元主軸長約６ｍ、短軸長5.8ｍ程の隅丸方形となるものとみられ、主軸はほぼ北を向く。本遺跡の中では大形に属する住居跡である。掘込みの深さは斜面上部側で約1.4ｍ、斜面下部では15cmほどの深さとなっている。斜面の上部側は隅丸方形のさらに外側に、外構の掘方と見られる傾斜した掘込みがあり、東西両辺の北隅から南に約１ｍ下がった部分から隅丸方形の外側に膨らみ、長楕円形の線を描きながら擂鉢状に掘り込まれている。垂直に掘り込まれた壁が、住居跡埋没時に崩落して崩れた結果とみることもできるが、擂鉢状部分に小ピットが２基見られることから、斜面上部からの土留め等を目的とした何らかの構築物に類する掘込みであったと考えたい。

床面は貼床されるが踏み固めはあまりされていなかった。壁溝は床を検出した範囲では全周し、南辺にも巡っていたものと考えられる。柱穴は３本が規則正しい位置に検出され、直径約50cm、深さ約50cm～60cmである。残りの１本は立木の攪乱によって遺存しなかったのかも知れない。東辺には貯蔵穴状のピットが１基、小ピットが２基検出され、貯蔵穴状ピットは直径約80cm、深さ約60cmを測る。小ピットは直径20cmと30cm、深さ約30cmで補助柱穴のようなものであったのかも知れない。

カマドは北辺の中央に位置し、袖は白色粘性の山砂で構築されている。火床は一部がよく焼けて硬化している。カマド外側から壁が少し膨らんでいる部分が見られ、調査時で1.5ｍに近い高い壁の煙道の立上がり部分とみられる。

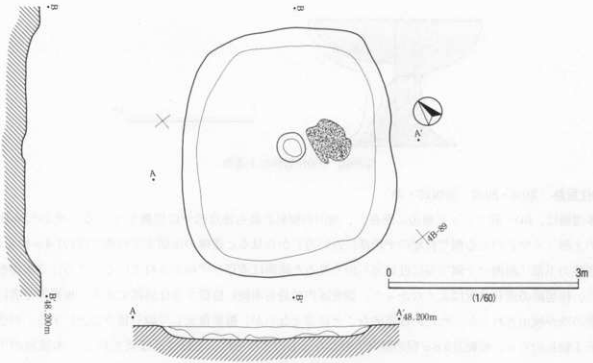
遺物は、図示できるものは１点しかなかった。１は土師器の高坏である。復元口径11.6cm、復元器高10.0cmとなる。器表が荒れており調整の観察は困難である。内外面ともに赤彩されている。

051住居跡（第90図、図版27）

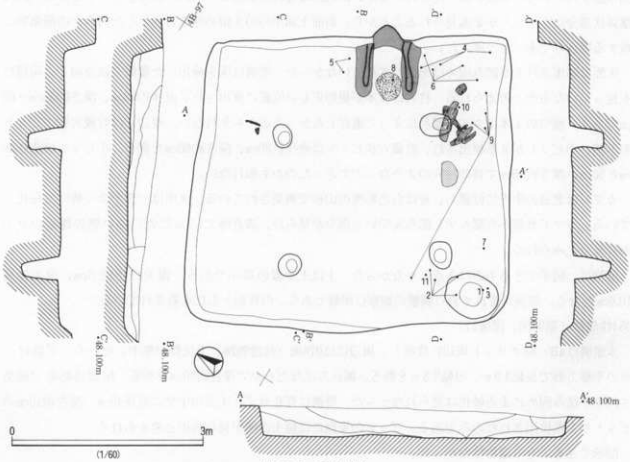
本遺構は4B－68グリッド周辺に位置し、周辺には076掘立柱建物跡、土坑群が集中している。形態は小形の不整方形で長軸3.9ｍ、短軸3.3ｍを測る。掘込みはなだらかで深さ約20cmを測る。床面は貼床で構築されるが踏み固めによる硬化は見られなかった。壁溝は存在せず、床面の中央に直径45cm、深さ約10cmのピットが１基検出されたのみである。ピットの東側には焼土の塊が見られ炉と考えられる。

図示できるような遺物はなかった。

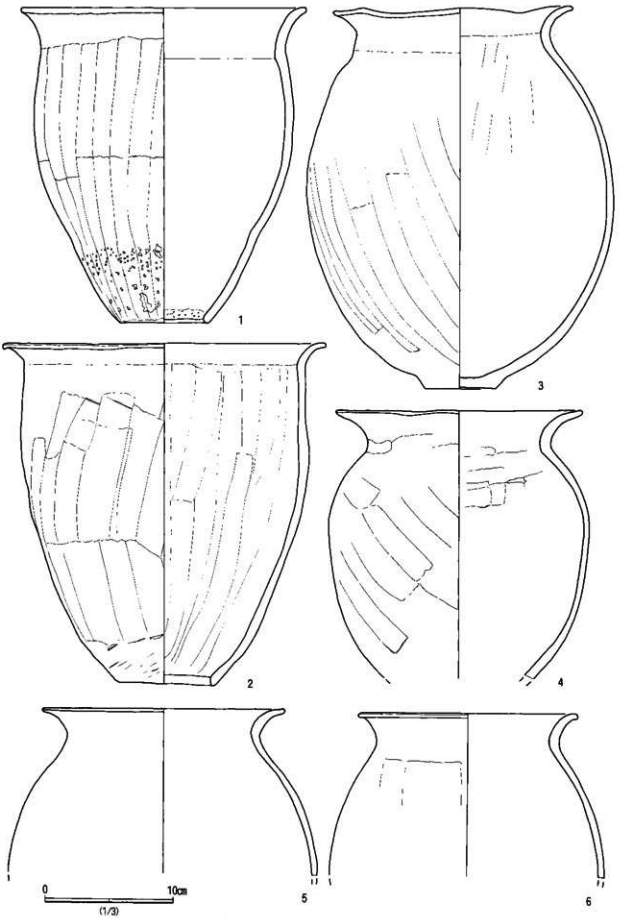
052住居跡（第91～93図、図版27・33・34）



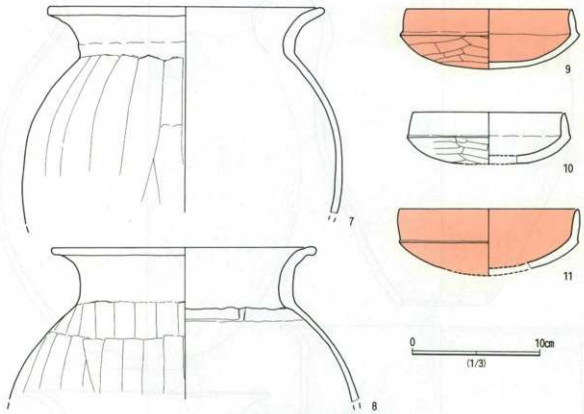
第90図　051住居跡



第91図　052住居跡



第92図　052住居跡出土遺物(1)

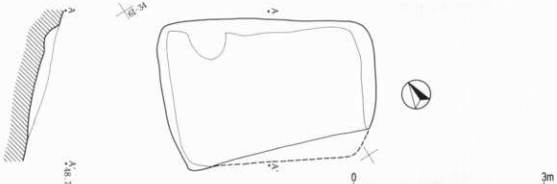


第93図　052住居跡出土遺物（2）

本遺構は、5B－06グリッド周辺に位置し、地山がやや谷へ向かって傾斜し始める部分に位置している。掘込みの深い部分は約50cmの深さがあるが、南端の部分ではかろうじて壁が遺存している状況であった。規模は4.6ｍ×５ｍの隅丸長方形で、カマドの位置する主軸より、交差する方向の方が長い、いわゆる横長の住居跡である。床面は貼床され、壁溝は存在しない。柱穴が４本と貯蔵穴が１基検出されている。柱穴はやや南寄りに位置し、直径20cm～40cm、深さ50cm～60cmを測る。貯蔵穴は、南の隅に位置し、直径70cm×90cm、深さ約40cmの規模である。

カマドは主軸よりやや東に位置し、袖は白色粘性の山砂で構築されている。遺存状態はよい方で、袖、火床部ともによく焼けて硬化している。煙道につながる部分の立上がりまで遺存し、本遺跡の中では良好なカマドである。

遺物は、本遺跡の中では最も多く甕２点、甕６点、坏３点を図示できた。１・２は土師器の甕である。１は口径22.4cm、器高24.5cmを測る。口縁部はナデ、胴部はヘラケズリが施されている。外面下側５cmほどは使用の際の被熱によるものであろうか器表が剥落しざらざらになっている。２は口径25.3cm、器高26.3cmを測り、調整方法は１と同様な方法で施される。３～８は土師器の甕である。３は口径18.8cm、器高29.5cm、底径5.4cmを測り、口縁部はナデ、外面胴部はヘラケズリが施される。胎土は小礫を多く含んでいる。内面の下側約1/3に黒色の炭化物が付着しており、カマドで使用した際の炭化物とみられる。４は復元口径19.4cm、口縁部はナデ、胴部外面はヘラケズリ、内面はナデが施される。口縁が大きく外側に開いている。５は復元口径19.0cmで、ナデによって調整されている。６は復元口径17.2cmで、口唇部がやや下側に折り返される。７は口径21.7cm、胴部径25.0cmを測る。口縁部はナデ、胴部はヘラケズリがなされ、内外面共にススが付着している。胴下側が破損した後に被熱している。８は口径20.8cmを測り、口縁

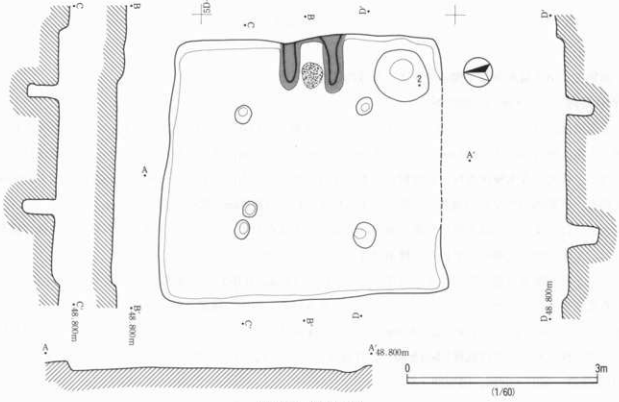


第94図　064住居跡

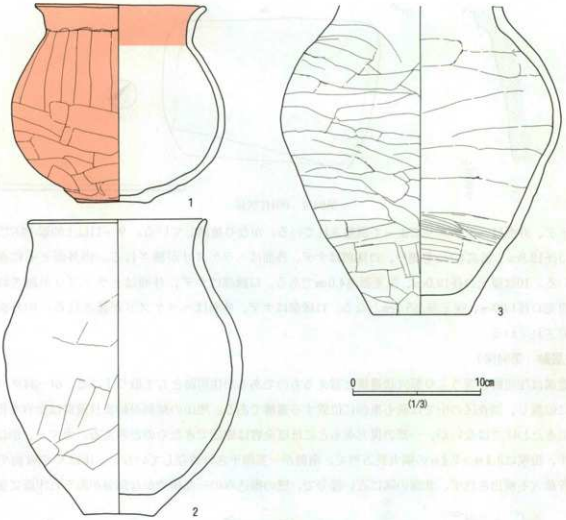
部はナデ、外面はヘラケズリによって調整されている。かなり被熱している。9～11は土師器の坏である。9は口径12.8cm、器高4.7cmを測り、口縁部はナデ、外面はヘラケズリが施される。内外面ともに赤彩されている。10は復元口径12.0cm、復元器高4.0cmである。口縁部はナデ、外面はヘラケズリが施される。11は復元口径14.0cm、復元器高5.1cmとなる。口縁部はナデ、外面はヘラケズリが施される。内外面ともに赤彩されている。

064住居跡（第94図）

本遺構は住居跡と言うより竪穴状遺構と言えるものであるが住居跡として取り上げる。61－34グリッド周辺に位置し、調査区の中では最も東側に位置する遺構である。地山の傾斜が始まり遺構は全容を把握、調査できたわけではないが、一部の復元をもとにほぼ全容は確認できたものと考える。カマド、炉は検出されず、規模は3.4ｍ×2.4ｍの隅丸長方形で、南側が一部削平され遺存していない。床はやや軟弱で、柱穴、貯蔵穴も検出されず、北側の隅に近い部分で、壁の掘込みの一部緩やかな部分がみられ床面に張り出



第95図　074住居跡



第96図　074住居跡出土遺物

している。

遺物は、出土量が少なく図示できような遺物はなかった。

074住居跡（第95・96図、図版28）

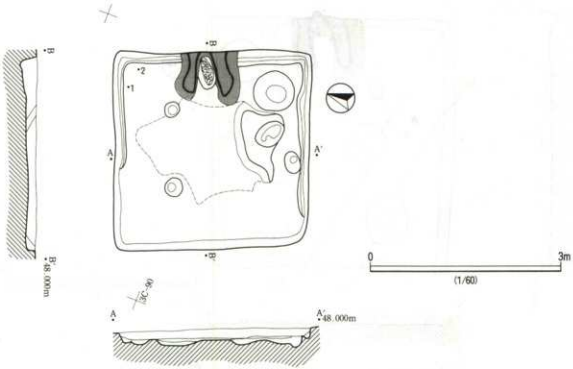
本遺構は、5D－23グリッド周辺に位置している。主軸をほぼ東に向け、規模は4.1ｍ×4.4ｍの隅丸長方形である。掘込みは浅く約15cmである。床面はやや軟弱で、遺構の遺存状態は良くなかった。壁溝は存在しない。柱穴が５本検出され、北西側の２本は建替え等によるものであろう。直径は約30cm、深さ約50cmを測る。南東隅のカマドの南隣に貯蔵穴が１基検出され、直径80cm×90cm、深さ約60cmである。

カマドは、東辺のほぼ中央に位置し袖以外はほとんど遺存していなかった。袖は白色粘性の山砂で構築され、火床は焼けて硬化していた。煙道は確認できなかった。

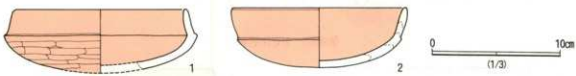
１～３は土師器の甕である。１は口径13.4cm、器高15.5cm、底径5.8cmを測る。口縁はナデ、外面は縦位から横位のヘラケズリが施される。内面はナデが施される。内面口縁部と外面全面に赤彩が施されている。２は口径14.0cm、器高22.7cm、底径5.5cmを測る。口縁部はナデ、外面胴部はミガキ、内面はヘラケズリ後ミガキが施される。３は底径7.5cmを測り、外面はヘラケズリ、内面はナデが施される。

101住居跡（第97・98図、図版28・34）

本遺構は、3C－91グリッド周辺に位置し北東に102住居跡が近接している。主軸を約70°東に向け、ほ



第97図　101住居跡



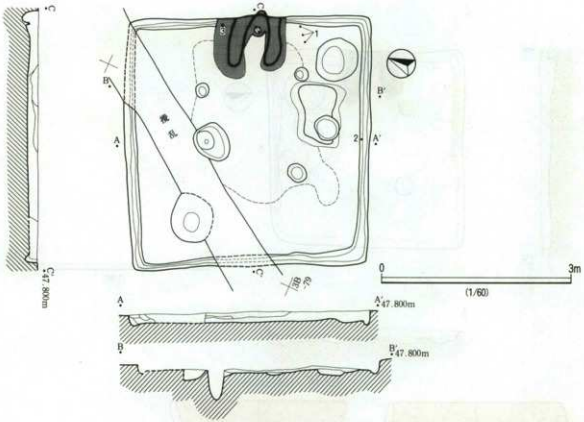
第98図　101住居跡出土遺物

ぼ東を向いているような状況である。規模はやや小形で、3.1ｍの端正な隅丸方形を呈する。掘込みはしっかりしており、深さ約10cm～15cmと浅い。床面は貼床によって構築され、中央部が踏み固めによって硬化している。北辺の一部から東辺、南辺のほぼ全部にかけて壁溝が巡り、深さ約５cmを測る。柱穴が３本と、貯蔵穴１基、土手状遺構に囲まれたピットが１基検出された。柱穴は北辺には２本規則正しく所在し、直径約30cm、深さ約30cmを測る。南辺側は壁際中央に１本、直径30cm、深さ約15cmと浅いものが所在するのみである。貯蔵穴はカマドの南隣に所在し、直径約70cm、深さ約40cmを測る。南辺側にはそのほかに、貯蔵穴の西側に50cm×35cm、深さ約10cmの浅いピット１基と、それを半周するように住居跡の中央側から弧状に取り囲む長さ1.3ｍ、幅20cm、高さ５cmほどの土手状遺構が所在する。貯蔵穴、ピット、南壁際の柱穴とで何らかの構造物を構成していた可能性がうかがわれる。

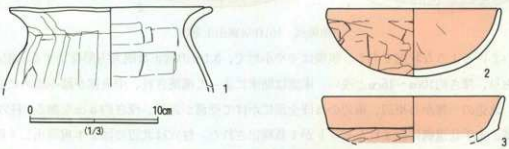
カマドは袖部分の遺存で、袖は白色粘質山砂で構築され煙道は検出されなかった。火床はよく焼けて硬化していた。カマドの下の部分にも壁溝が検出され、カマド構築前に壁溝の掘込みがなされたことがうかがわれる。

１・２ともに土師器の坏である。１は口縁がやや内傾しながら垂直に近く立ち上がり、復元口径13.4cm、復元器高4.9cmである。内面と口縁はナデ、外面はヘラケズリが施される。内外面ともに赤彩されている。２は復元口径13.8cm、器高4.6cmを測る。やや外反する口唇部の立ち上がりの見られる須恵器坏蓋の模倣坏である。１と２ではやや法量が異なり、２の方がやや小さく合わせることはできない。

102住居跡（第99・100図、図版28）

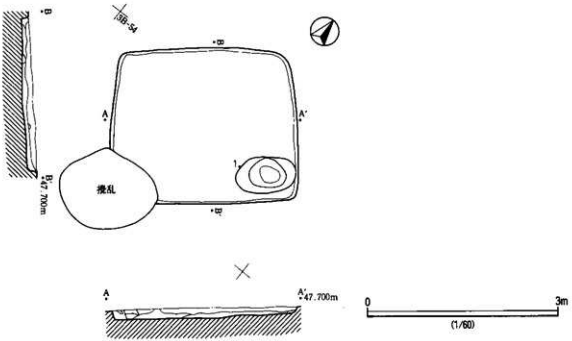


第99図　102住居跡

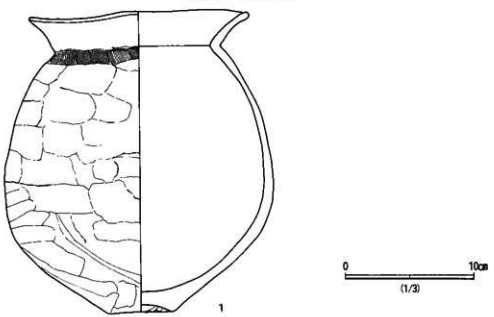


第100図　102住居跡出土遺物

本遺構は、3B－69グリッド周辺に位置し、南側に101住居跡が近接して所在する。規模は101住居跡よりやや大きく、1辺3.9ｍの隅丸正方形を呈する。カマドが約70°東を向き、ほとんど東向きと言ってよい方向の住居跡である。この方向は先の101住居跡とほぼ同一方向を向いている。一部に攪乱による破壊が見られ、掘込みはしっかりしているが浅く約15㎝を測り、床は貼床による構築で中央部は踏み固めによって硬化している。壁溝は全周し、深さ約５㎝を測る。この壁溝はカマドの下側にも巡り、カマド構築前に壁溝の掘込みがなされていたものとみられる。柱穴は、攪乱により破壊された部分に存在した可能性が高いことを考えると、４本が規則正しく存在したものと考えられ、そのうちの３本が検出されている。位置はやや中央に近づき、ややカマドに寄って存在する。直径は約20㎝、深さ約30㎝～約35㎝である。そのほかにはピットが４基検出されたが、そのうちカマドに近いものは直径約70㎝、深さ約55㎝を測り、貯蔵穴と考えられる。そのほかは直径約80㎝、深さ約25㎝、直径約70㎝、深さ35㎝の２基の用途は不明である。別に貯蔵穴に近い直径約35㎝、深さ５㎝の浅いピットは、周辺が１ｍ×70㎝、高さ２㎝～３㎝程度の高さに盛り上がり、その中にピットが掘り込まれている状態から、土手状遺構に類似した上部構築物が築かれ



第101図　103住居跡

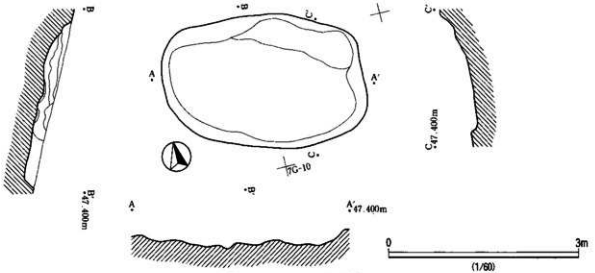


第102図　103住居跡出土遺物

た、いわばテーブル状遺構とでも言うようなものと考えられる。機能についても多分土手状遺構と変わらないものであろう。

カマドは、東辺のほぼ中央に位置し、袖は白色粘質の山砂で構築されしっかりしている。袖の内面は焼けてよく硬化しているが、火床ははとんど焼けていなかった。煙道に至る立上がり部が確認されたのは本遺跡では珍しい例である。

1は土師器の甕である。口径16.0cmを測り、口縁部はナデ、外面はヘラケズリが施される。2、3は土師器の坏である。ともに内外面に赤彩が施されている。2は口径13.8cm、器高5.2cmを測る。外面はヘラケズリ、口縁部と内面はナデによって調整され、赤彩されている。3は復元口径14.4cmで、口縁部はナデが施され、全面にわたり赤彩が施されている。



第103図　017竪穴状遺構

103住居跡（第101・102図）

本遺構は、3B－55グリッド周辺に位置し、調査区内では最も西側の住居跡である。規模は2.9ｍ×2.5ｍの隅丸長方形で長軸は約50°東に傾く。掘込みは深さ約15cmと浅く、床は踏み固めによる硬化はなく軟弱であった。壁溝、炉は検出されず、東隅にピットが１基検出されたのみである。ピットは１ｍ×60cmの楕円形に深さ約10cm掘り込まれ、さらにその中を直径約50cm、深さ約20cmの不整形に２段階に掘り込んでいる。このピットは、おそらく貯蔵穴であろう。

１は、土師器の甕である。口径17.0cm、器高23.0cm、底径5.0cmを測る。口縁部はナデ、胴部外面はヘラケズリ、内面はナデが施され、口縁部と胴部の外面に一部ハケメが残っている。

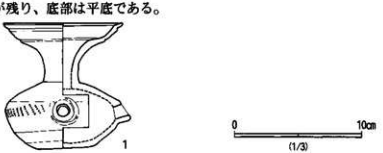
017竪穴状遺構（第103図）

本遺構は、7G－00周辺に位置する遺構で規模・形態から住居跡とはせずに竪穴状遺構とした。調査区の一番谷寄りに位置する遺構で、小さい遺構の割に遺構の台地側と谷側では標高が80cmも異なる。そのため谷側の壁は遺存せず、谷側は削平されてしまったものと考えられる。規模は3.3ｍ×2.1ｍで長楕円形を呈する。長軸をほぼ東西に向け、掘込みは深いところで約25cmである。北側の台地上方向は、1.5ｍ×0.5ｍの張り出し状に掘り窪められている。床面は柔らかく、ピット・炉など何の施設も検出されていない。

遺物は、出土量が少なく図示できるようなものはなかった。

グリッド出土の遺物（第104図、図版34）

6E－70グリッドから須恵器の瓶が１点出土している。１は口径9.4cm、器高9.6cmを測り、色調は灰白色でオリーブ色の自然釉が付着している。胴部中央には細かい刺突文がみられ注口も作られている。底部近くはヘラケズリの跡が残り、底部は平底である。



第104図　グリッド出土遺物

4．歴史時代

（1）概要

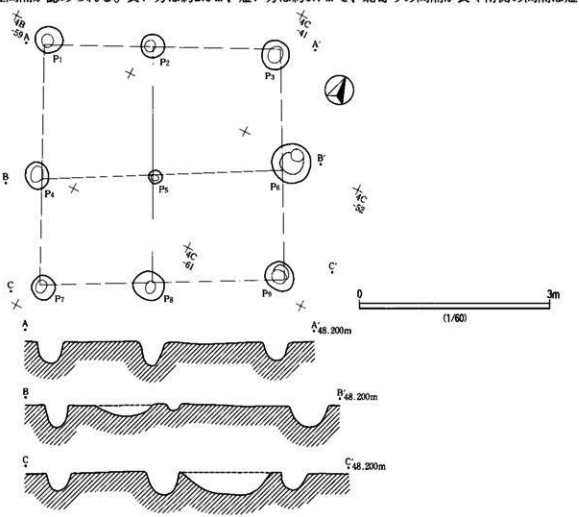
歴史時代の遺構は掘立柱建物跡3棟、方形周溝状遺構4基である。住居跡は検出されず、また出土遺物もほとんどなく時期を確定できた遺構はない。今まで一般的に言われてきたこれらの遺構の時期を本遺跡の遺構にも当てはめ、ここでは歴史時代として取り上げたが、確実な時期決定ができたわけではない。近接する076掘立柱建物跡と087掘立柱建物跡の2棟の方向性や位置関係からは同時存在は不可能で、単独で存在したものとみられる。また、やや隔たった091掘立柱建物跡は方向性が異なるが、時期決定の資料がないので同時存在については語れない。調査時に092掘立柱建物跡と名付けたピット群は、ピットごとの形態・深さ等がまちまちで掘立柱建物跡として建物を構成できるような状況、配列にないので、全測図にその位置を記すのみでここでは取り上げなかった。

（2）遺構

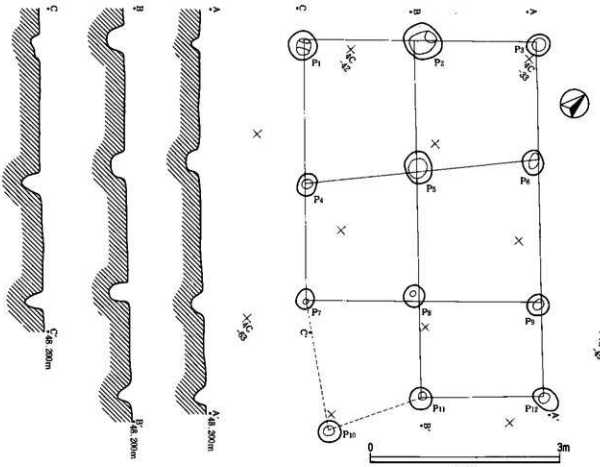
ア、掘立柱建物跡

076掘立柱建物跡（第105図、図版35）

本遺構は4C－50グリッド周辺に位置し、北東に隣接して087掘立柱建物跡が所在する。規模は2間×2間で、建物の方向は南北方向から西へ約37°傾いている。柱穴は9本存在し、柱間は等間隔ではなく、2種の柱間隔が認められる。長い方は約2.0ｍ、短い方は約1.7ｍで、北寄りの間隔が長く南側の間隔は短い。



第105図　076掘立柱建物跡



第106図　087掘立柱建物跡

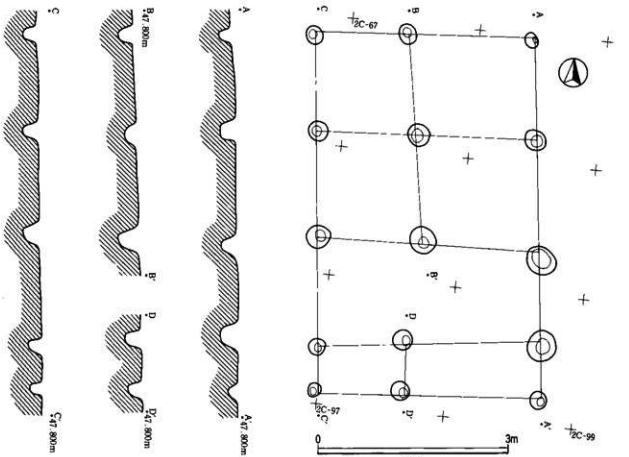
柱穴の形態は円形で、掘方は半円形に近い逆台形断面である。覆土は黒色土の単一土層で、柱痕跡や抜き取り痕は観察されなかった。掘方の底面にも柱痕跡は確認できなかった。外側を巡る柱は直径約40cm～50cm、深さ約30cmと大きく、中心に立つ柱は直径約20cm、深さ約10cmと小規模である。総柱の倉庫建物というよりは側柱のみの建物という見方の方が適切かも知れない。P_8はやや大きめの掘込みで、直径60cm、深さ約35cmを測り、掘り直したような形態がうかがわれる。

遺物は出土しなかった。

087掘立柱建物跡（第106図、図版35）

本遺構は、076掘立柱建物跡の北東に隣接し、4C－43グリッド周辺に位置する。規模は3間×2間で建物の方向は、南北方向より西へ約50°傾く。この方向は隣接する076掘立柱建物跡とは異なる。柱穴は12本存在し、そのうち北側の9本と南側列の3本とに分けられる。北側の9本は柱間距離2.0mを基長とした配列がうかがわれ、南側列は1.5mの間隔が用いられているようである。共に柱穴の形態は円形で、掘込みは半円形に近い逆台形のものが多い。覆土は黒色土の単一土層で、柱痕跡や抜き取り痕等は観察されなかった。掘方の底面にも柱痕跡は確認できなかった。柱穴は直径約30cm～60cmまでのものがあり、大きさは一様ではない。また深さは約20cm～30cmと浅めである。P_{10}は建物の配列からはかなりずれた配列で、この柱の配列で建物を構築できるものか疑問である。

遺物は出土しなかった。



第107図　091掘立柱建物跡

091掘立柱建物跡（第107図、図版35）

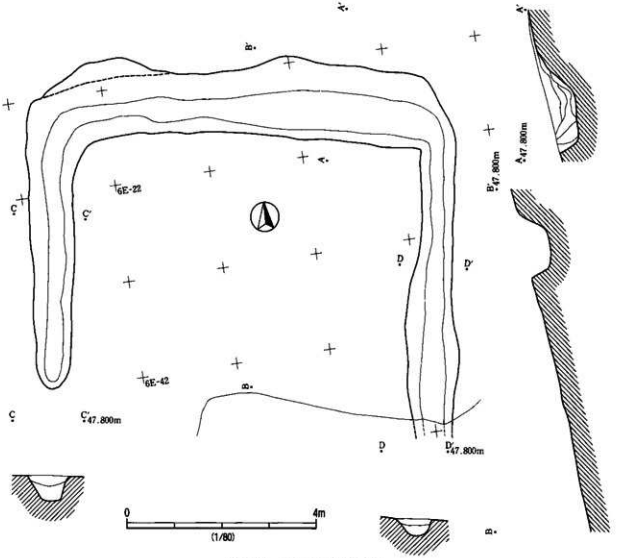
本遺構は2C－77グリッド周辺に位置する。規模は２間×２間の南面に１間×２間の庇状施設をつなげたような状態である。方向は南北方向から西へ約20°傾いている。東西方向はそれとは直交せずほぼ東西方向を向く。建物は大きく２分され、北側は２間×２間の総柱建物でかなりいびつな配列を示し、側柱の間隔は約1.6ｍ～1.7ｍである。南側は、庇又は棚状の１間×２間の施設で、妻側に当たる間隔は異常に短く70cmほどである。一方棟側に当たる間隔は2.1ｍと1.3ｍで等間隔ではない。柱穴の形態は円形で、大きさは約20cm～40cmとややばらつきがあり、深さも約20cm～30cmと一様ではない。掘方は半円形に近い逆台形である。覆土は黒色土の単一土層で、柱痕跡や抜き取り痕等は観察できなかった。掘方の底部にも柱痕跡は確認できなかった。

遺物は出土しなかった。

イ、方形周溝状遺構

015方形周溝状遺構（第108図、図版36）

本遺構は、6E－22グリッド周辺に位置し、地山の傾斜が急な部分に所在している。そのため斜面の下側は周溝が遺存していない。規模は復元を交えると、１辺が９ｍの正方形を呈する連続した周溝になるものとみられる。方向はほぼ東西南北に溝が巡り、斜面のために南側の辺が全く遺存せず、東西辺の途中から途切れてしまっている。北辺では幅約1.6ｍ、深さ約70cm、東西辺では幅約１ｍ、深さ40cm～60cmとなっている。溝の断面は逆台形に掘り込まれ、覆土はロームを多く含んだ褐色土である。



第108図　015方形周溝状遺構

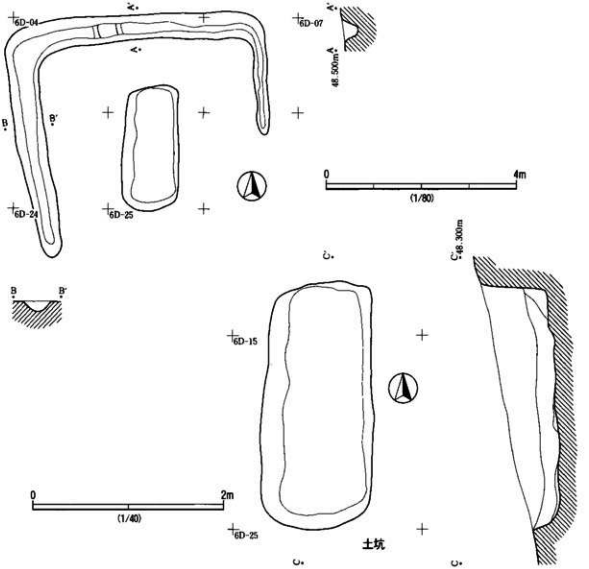
周溝の内側には盛土等の痕跡は確認できず、また何の遺構も認められず、主体部等の施設も検出されなかった。周溝の中にも土坑等の施設は認められなかった。

遺物は、図示できるようなものは出土しなかった。

046方形周溝状遺構（第109図、図版36）

本遺構は、6D－05グリッド周辺に位置し、本遺跡の中では小規模な方形周溝状遺構である。地山が谷に向かって傾斜しているために谷側の周溝は遺存せず、遺構の全容の解明には至らなかったが、概要はほぼつかめた。規模は1辺約5.5ｍの隅丸正方形の外形になるものとみられ、方向はほぼ東西南北方向に向く。北辺は遺存するが、東西辺の南側一部と南辺は傾斜地の下側に当たるため遺存せず、南北方向には全体の約2/3の遺存状態とみられる。北辺は幅60㎝～70㎝、深さ約40㎝を測り、西辺は幅約60㎝、深さ20㎝で長さは５ｍにわたってのび、東辺は幅約25㎝、深さ約10㎝と狭く浅く、長さも２ｍほどしかない。

溝はほぼ逆台形状に掘り込まれ、覆土はロームを少し含む褐色土であった。北辺の中央やや西側の底が一部わずかに高く掘り残された部分があり、長さ40㎝、高さ５㎝～15㎝にわたって底部より一段高く掘り残されている。周溝の掘削時の掘りむらのようなものか、それとも小規模ながらブリッジ状に掘り残すことを意識したものかは判断ができない。



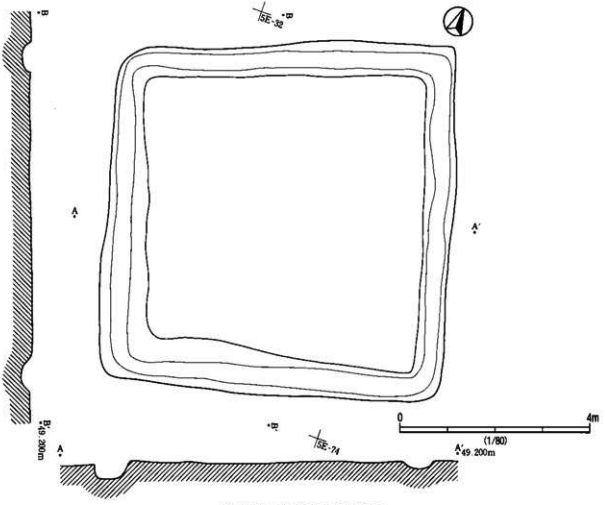
第109図　046方形周溝状遺構

周溝内側には盛土の痕跡はなく、ほぼ中央に南北方向を長軸とした土坑が1基検出され、特に副葬品に当たるものはなかったが、周溝と土坑の位置関係から本遺構に伴う土坑と判断した。土坑はほぼ南北方向を長軸とし斜面に位置するため北側は深く、南側は浅くなっていた。長さ2.6ｍ、幅1.1ｍ～1.2ｍ、深さ0.7ｍ～0.3ｍの隅丸長方形を呈する。掘込みはほぼ垂直に近く、覆土はロームを多く含む褐色土である。底部は平坦で、副葬品に当たるようなものはなく、遺物・人骨等は検出されなかった。

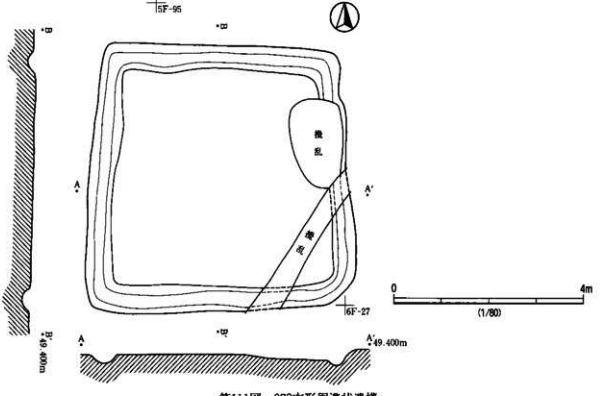
土坑に出土遺物はなく、周溝からは図示できるような遺物の出土はなかった。

073方形周溝状遺構（第110図、図版37）

本遺構は、5E－52グリッド周辺に位置し、前記の2基の方形周溝状遺構と異なり台地の平坦部に位置しているため、周溝が全周している。規模は1辺が7.4ｍの隅丸正方形になる外形で、方向は1辺が南北方向から西へ約15°傾く。周溝の幅は、ややむらがあり北側ではやや狭く、南側ではやや広くなっている。北側の最も狭い部分で約60cm、南側の最も広い部分で約1ｍ、深さは全体的に非常に浅く約15cm～20cmである。周溝の断面は逆台形状に掘り込まれ、底面はほぼ平坦で土坑等はない。周溝の内側には盛土の痕跡はなく、また土坑等の遺構も検出されなかった。



第110図　073方形周溝状遺構



第111図　078方形周溝状遺構

図示できるような遺物は出土しなかった。

078方形周溝状遺構（第111図、図版37）

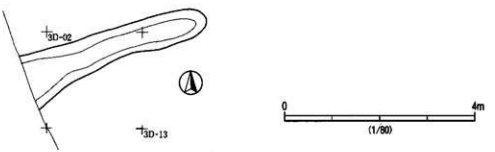
本遺構は、6F－05グリッド周辺に位置し比較的小規模な方形周溝状遺構である。台地平坦面に位置するため周溝は全周しているが一部に攪乱による破壊が見られる。形態がややいびつな正方形状であるので、規模は一様ではないが、１辺が５ｍ～5.6ｍの隅丸方形に近い形態を呈し、北辺と東辺がやや短く、西辺と南辺がやや長くなっている。周溝の方向はほぼ東西南北を向き、幅は約40㎝～60㎝、深さ約15㎝と浅い。掘込みは浅いため皿状で、覆土は褐色土であった。周溝の南東側が一部攪乱によって破壊されている。周溝底部は平坦で、土坑等は検出されなかった。また、周溝の内側についても盛土の痕跡はなく、土坑等の遺構も確認できなかった。

遺物は非常に少なく、図示できるようなものは出土していない。

090溝（第112図）

本遺構は3D－02グリッド周辺に位置し、東西方向から東端がやや北を向く方向に位置する。西端は調査不能で、全容は不明であるが、調査できた分をみると、長さ４ｍ、幅1.2ｍを測る。掘込みは皿状で深さは約20㎝である。

図示できるような遺物は出土していない。



第112図　090溝

Ⅲ まとめ

1　旧石器時代

本遺跡では13地点から石器群が出土した。特にATより上位の石器群に良好な資料が検出された。ここではまとめとして、質量ともに安定して出土している石器集中1・2について若干触れることとする。

石器集中1は南北12m、東西10mの範囲に遺物の平面分布が広がる。礫群1とした集中域a、小型石核が10点以上まとまって出土した集中域b、同一母岩系の剥片、砕片が出土した集中域cの三つの分布域に分離できる。

器種組成はナイフ形石器4、彫刻刀形石器1、石核13、微細剥離痕のある剥片3、剥片29、礫・礫片27である。石核の占める比率が非常に高いことが特徴である。ナイフ形石器の形態は台形・五角形・四角形というようにいわゆる「幾何形」を呈する。幅広の剥片を素材にして横位に用いている。打面部を除去するものとしないものの両者が見られる。調整も面的・急角度・対向調整とバラエティが豊富である。また折断によって側縁を形成しているものもある。

13点の石核のうち、11点はサイコロ状を呈した小型の石核である。剥片素材のものが1点あるが、大半は分割された小礫を素材にし、分割面を打面としたものである。打面転位・打面調整は頻繁に行われている。また、自然面を残置するものが半数以上を占め、剥片剥離作業が一部の自然面の除去のみで終了しているものがあることから、剥離作業が究極まで行われた「残核」と呼ぶには躊躇される資料が多い。同時に、これら小型石核だけが径1m内外に集中しているという分布状況と、同一母岩の剥片・砕片が1点も出土していないことを勘案しても、この小型石核のあり方は特異な存在と言える。

下総台地では従来、石器集中1のような石器群があまり注目されていなかったが、最近、新田浩三氏によって提示された芝山町の石器群の変遷によると、本石器群は第Ⅴ期に位置付けられる。ナイフ形石器は「小形化」の様相を示し、形態的には「幾何形を呈する」。また、「打面を頻繁に転位するサイコロ状の形態を呈する」石核が特徴的に組成する段階である[1]。このような特徴は、まさに本石器群について該当するものと考える。また、出土層位も新田芝山編年で示された「Ⅲ層中部からⅢ層上部の石器群」と一致し、特に問題はない。

また、新田氏は同段階に位置付けられる石器群として、空港№10遺跡[2]のD・E・P・Qブロックをあげている。そのほかには空港№11[3]第1文化層も同段階の石器群であろう。今後は、下総台地において既出資料の再検討を行うことによって、同段階の石器群は増えていくものと思われる。

相模野台地との対比では、諏訪間編年を参考とすると段階Ⅶに位置付けられよう。段階Ⅶは「砂川刃器技法」の崩壊段階、ナイフ形石器の最終末期の石器群として設定されている。また、組成に尖頭器が加わっている点で本石器群・空港№10・空港№11とは異なる。しかし、相模野台地においても、各石器群により器種組成が大きく異なるようであるので、下総台地においても尖頭器が組成に加わる可能性は高い。

以上のように、石器集中1は新田芝山編年第Ⅴ期・諏訪間編年段階Ⅶに相当する石器群と考えられる。しかしながら、本石器群のように単独母岩の小形石核が集中しているような状況は、ほかの遺跡では見られないものである。その点が今後の課題のひとつであろう。

石器集中2はナイフ形石器3、スクレイパー6、石核9、微細剥離痕のある剥片2、磨石2、剥片71、礫・破損礫33の総点数137点の石器が出土している。礫群が認められるが、石器集中1とは異なり礫群と石器分布は重なっている。ナイフ形石器3点のうち2点は素材を横位に用いている。完形のものは、いわゆる「切出形」を呈する。基部が欠損しているものも、同様の形態を呈するものと思われる。また掻指状のスクレイパーを伴い、剥片剥離技術も幅広の寸詰まりの剥片生産が主体を占めることから、本石器群はAT上位のいわゆる「V層・IV下層」段階のものと位置付けられよう。石器群の出土層位についてはAT下位からの記載もあり若干の問題もあろうが、遺物の下位への拡散と斜面での層位認定の困難さから生じたものと考えたい。

2　縄文時代

縄文時代の遺構は28基の炉穴と46基の土坑である。また、炉穴や遺物包含層から早期の比較的まとまった資料が出土し、特に燃糸文・条痕文土器の資料が量的にも多く検出され、周辺地域の縄文早期文化の解明に良好な資料を提示することができた。

28基の炉穴の中では遺存状況のよい炉穴が何基か検出され、伴出遺物から時期の特定のできるものがあった。炉穴は28基のうち11基より遺物の出土がみられ、燃糸文土器を出土したものも5基あったが、それらの出土遺物の中で、最も新しいものは条痕文土器で早期前半にまではさかのぼらず、早期後半の子母口式期から茅山式期にかけてのものと見られる。遺物を出土しなかった炉穴も、これらと同時期と見られ、炉の構築は比較的短期間しか行われなかったと見られる。炉穴・土坑ともに台地の南側の縁辺部に位置するという状況を示し、よく言われている縄文時代早期の遺跡の立地環境と符合する。

遺構外の包含層出土の土器群は、調査範囲全体から散漫に出土し、特定の時期、地区に限って集中する様な状況は見いだせなかった。しかし時期的にみると早期の包含層であり、早期前半の井草式からはじまり、大丸式、夏島式、子母口式と続き、後半の茅山下層式にかけての時期に特定されることは確実である。本遺跡周辺では、縄文時代早期の遺物を出土する遺跡の調査例がまだ少なく、今後の調査による資料の増加によって、小櫃川北岸の袖ヶ浦台地上における縄文時代早期の土器様相の解明が進むことが期待される。

3　古墳時代

古墳時代の遺構は竪穴住居跡18軒、竪穴状遺構1基が検出された。これらは古墳時代後期の小規模な集落を構成していたとみられる。竪穴住居跡は縄文時代同様に台地の南側縁辺部の平坦部から斜面の途中までに位置し、集落の専地状況が縄文時代と同様なことが分かる。竪穴住居跡は18軒のうち大きく分けると2軒～3軒で1つの群に分けられ、それらが比較的形態や方向性の点で共通するような配置を見せている。例えば001・002・007住居跡の3軒を見ると、規模は6ｍ～4.6ｍまでと大・中・小に分けられ、方向性も北東方向を向き、また、004・010住居跡も方向性は北西を向き規模は大・中の2つに分けられ、101・102住居跡も同様に方向性、規格性に共通のも認められる。001・002住居跡や、004・010住居跡の間隔から見ると、同時存在であったとは考えがたい配置を示し、共通規格による隣地への建て替えという形態が考えられる。両者の間の時期的な差は、遺物の観察からは判断できないが、古墳時代後期の大集落によく見られる住居の複雑な重複となって現れる、建て替えによる切り合い関係が1軒もないことが注意される。大規模集落のように住宅密度の高い集落では土地利用が制限を受けるのに対し、小規模集落で居住空間の利

用制限の少ない本遺跡では、隣地への新規の改築という形で行われたものとみられる。調査範囲でのグループ分けを考えると5グループに分けられ、同時に5軒の竪穴住居跡が存在し、それらが1世代程度のうちに1回ないし2回の建て替えを行って、その後移動していくという集落の展開が想定できる。

竪穴住居跡のカマドの方向性は、通常言われるように住居跡の北側方向にカマドの設置される例が多いが、本遺跡ではその方向からずれたカマドをもつものが、遺構の数の割には多いように見受けられる。例としてあげると074・009住居跡のほぼ真東を向くカマド、005住居跡の南東を向くカマドは通常のカマド方向の逆に近く、北を向くものでも一般の集落のカマドの方向より東西方向への振れが大きい。101・102住居跡はかなり東に傾き（約70°）、全体的に見ると竪穴住居跡の集落内での共通した方向性というものはないように見受けられる。建て替えによる重複と関連して、土地の利用が制限されるような大集落と異なり、集団の規制に縛られないような土地利用を認めることができるかもしれない。

4　歴史時代

本遺跡で検出された歴史時代の遺構は掘立柱建物跡3棟、方形周溝状遺構4基、溝1条である。ここで歴史時代としたのは、掘立柱建物跡、溝に見られる様に時期の確定ができなかったものを含めて時代設定したため、奈良・平安時代と限定せず、より広範囲な時期を含む歴史時代とした。掘立柱建物跡は奈良・平安時代のものとはやや様相が異なり、柱穴の掘方・規模、柱間の不規則性等を見ると、より新しい時代のものの可能性もあり得る。

方形周溝状遺構は4基検出され、遺構の時期は伴出遺物がないため明確にはできないが、奈良・平安時代の遺構とみてよかろう。規模は一辺が8ｍ～10ｍクラスが2基と、5ｍクラスが2基に分けられ、分布する地区が調査区のほぼ中央南側の斜面上に集中し、それ以外の範囲には見られない。遺構の分布する範囲は、約20ｍの範囲に収まり、斜面の中でもごく一部に限られる。埋葬施設が検出された遺構は1基であるが、遺物等は検出されなかった。台地のより奥側に集落の営まれた可能性はあるが、該期の遺構は方形周溝状遺構のみであり、住居跡等の集落遺構は検出されなかった。調査区内に限れば一部が墓域として機能していたことがうかがえる。周囲に集落遺構が検出されていないと言うことを考えると、これは集落内に建造物を構築するための空間の確保と言う観点からの墓域の設定と言うよりは、墓域の設定の必要性によって優先的に確保された区域で、それが調査区域の南斜面の一部に設定されたとみる方がよいだろう。

注　1　新田浩三　1996　「旧石器時代」『芝山町史　通史編　上』　芝山町
　　2　（財）千葉県文化財センター　1985　『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ　№2遺跡　№10遺跡』
　　3　（財）千葉県文化財センター　1995　『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅸ　一鍬田甚兵衛山北遺跡（空港№11遺跡）』

写真図版

遺跡周辺航空写真

空中写真(東から)

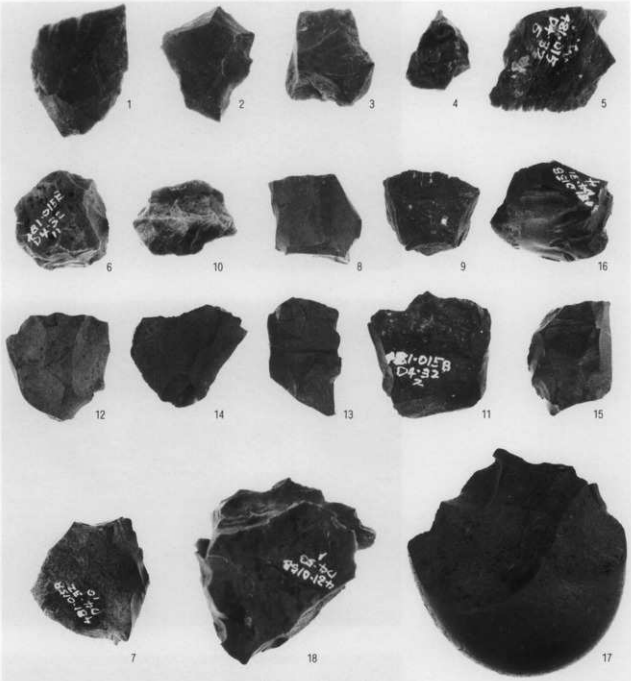
空中写真(南東から)

空中写真(4Bグリッド周辺)

土層断面

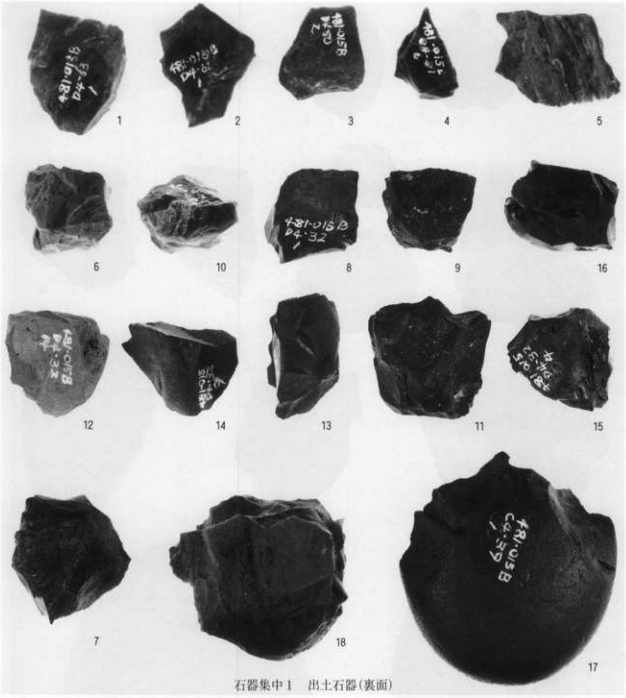
石器集中 2

石器集中 4



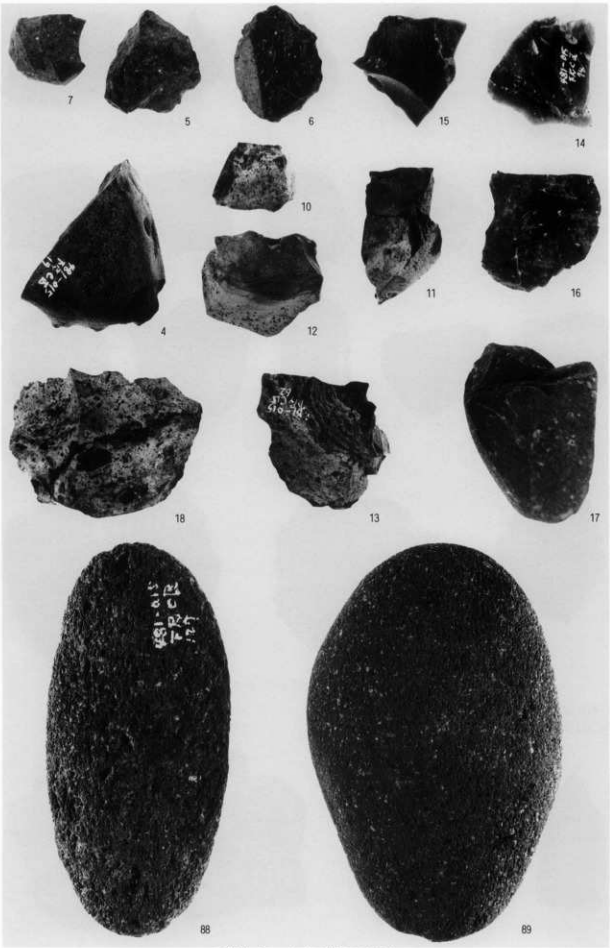
石器集中1　出土石器(正面)

石器集中2
出土石器(1)(正面)

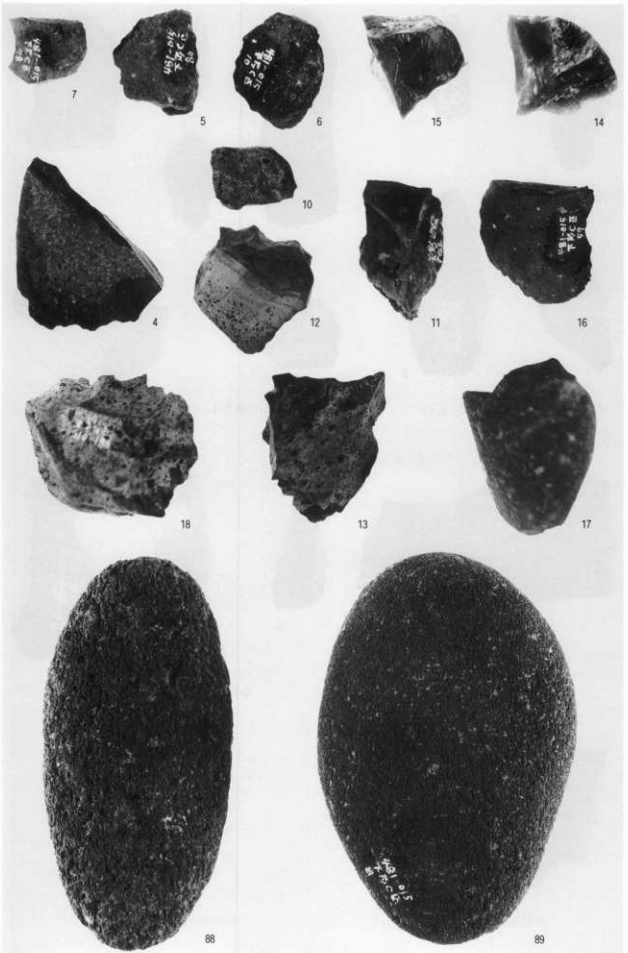


石器集中1　出土石器(裏面)

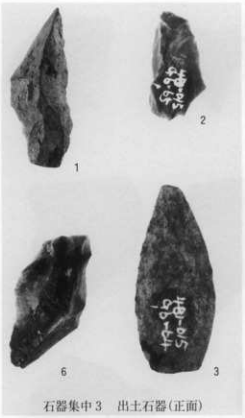
石器集中2
出土石器(1)(裏面)



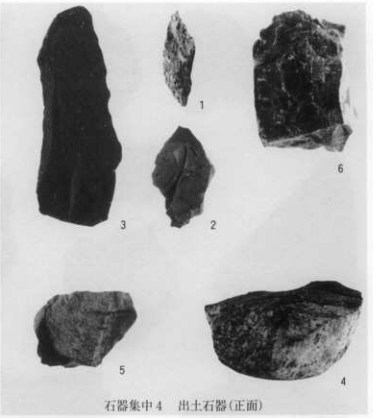
石器集中2　出土石器(2)(正面)



石器集中２　出土石器(２)(裏面)



石器集中3　出土石器(正面)



石器集中4　出土石器(正面)

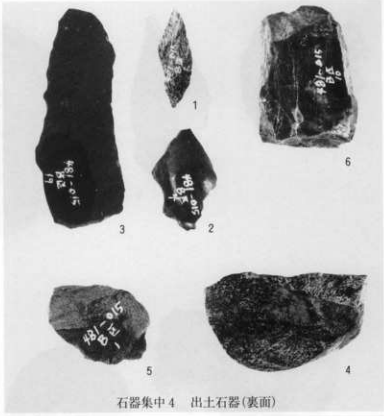
石器集中7　出土石器(正面)

石器集中9　出土石器(正面)

石器集中10　出土石器(正面)

石器集中12　出土石器(正面)

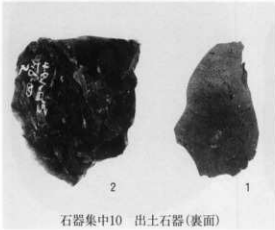
石器集中3　出土石器(裏面)



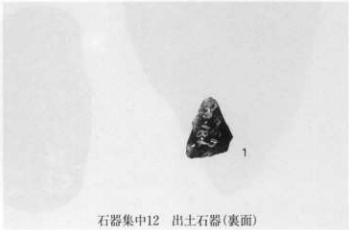
石器集中4　出土石器(裏面)

石器集中7　出土石器(打面)

石器集中9　出土石器(裏面)

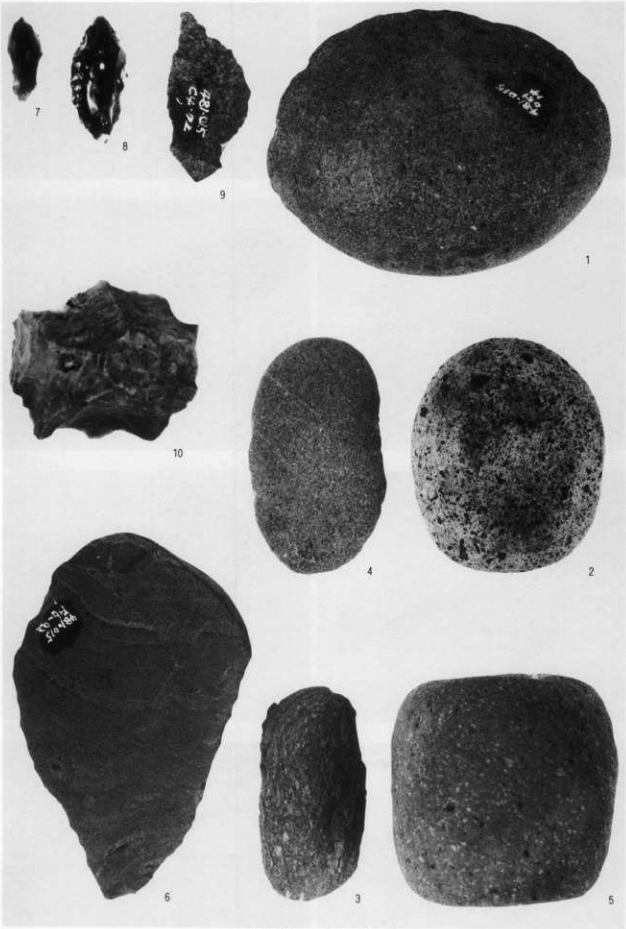


石器集中10　出土石器(裏面)



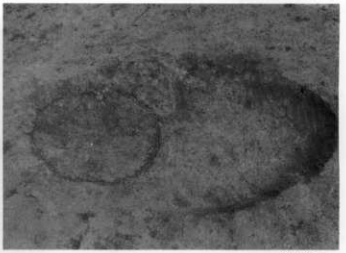
石器集中12　出土石器(裏面)

石器集中外　出土石器(正面)

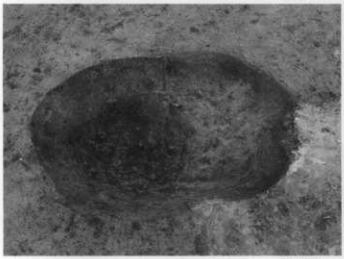


石器集中外　出土石器(裏面)

016炉穴



016炉穴



023炉穴

024炉穴

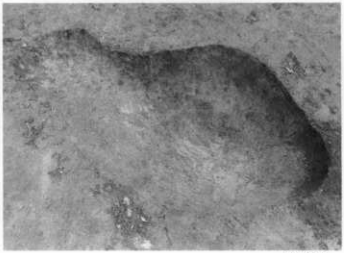
025炉穴

028炉穴

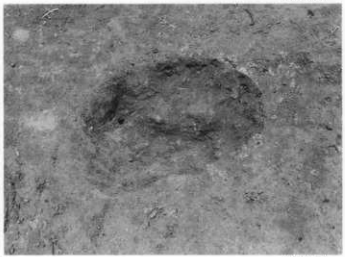
030炉穴

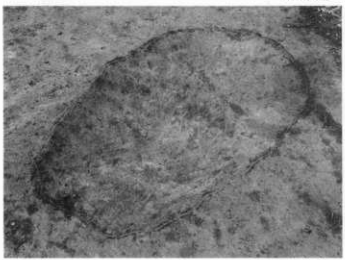
031炉穴

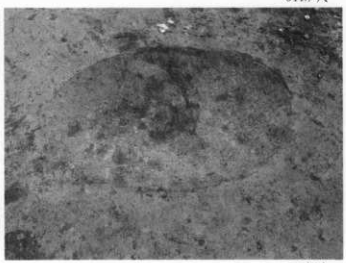
040炉穴


041炉穴

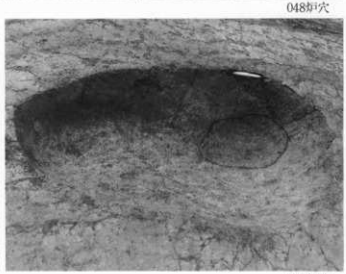
042炉穴

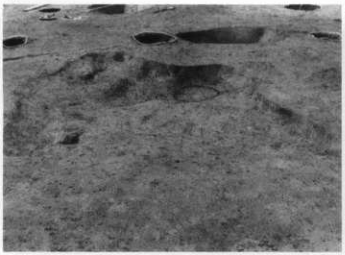

044炉穴


047炉穴


048炉穴

055炉穴


056炉穴



057炉穴

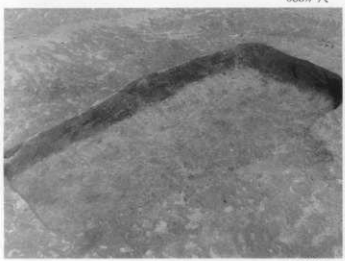
068炉穴

075炉穴

083炉穴

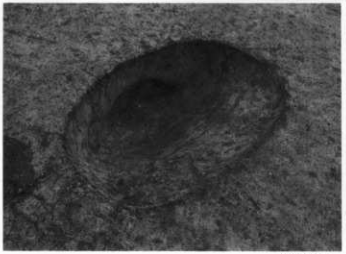
085炉穴

086炉穴

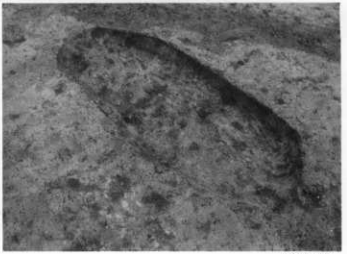


008土坑

012土坑



013土坑

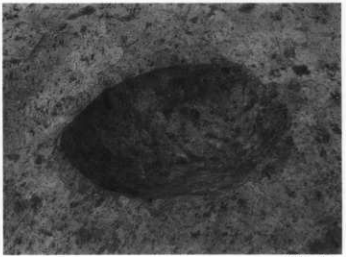


014土坑

018土坑

019土坑

020土坑

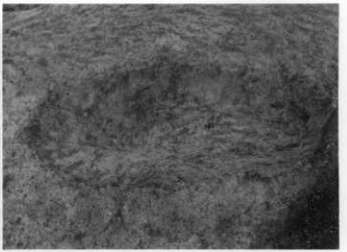


021土坑

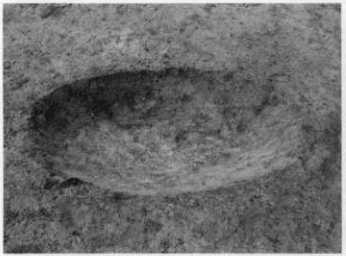
022土坑

026土坑

027土坑



032土坑



033土坑

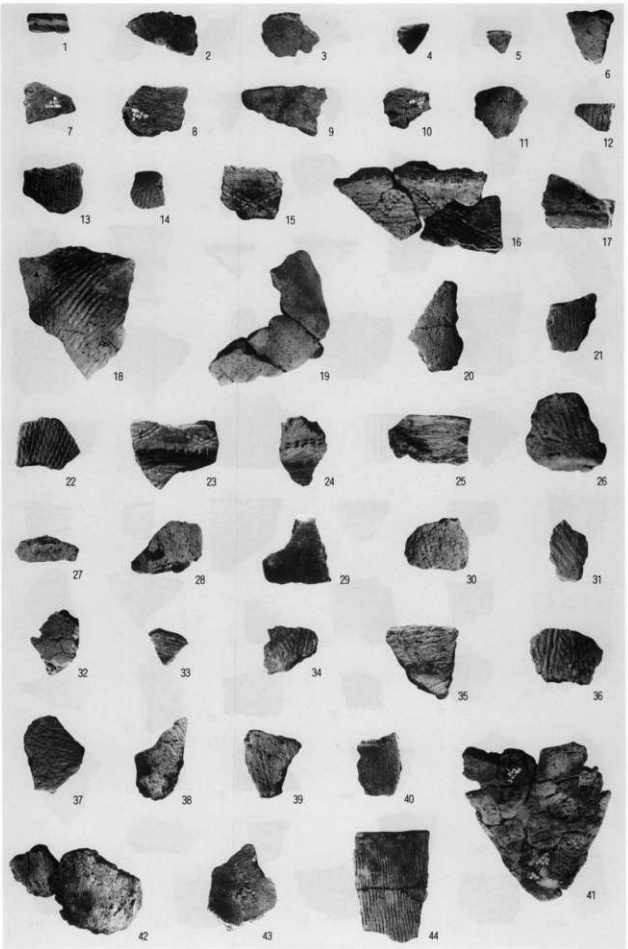
035土坑

036土坑

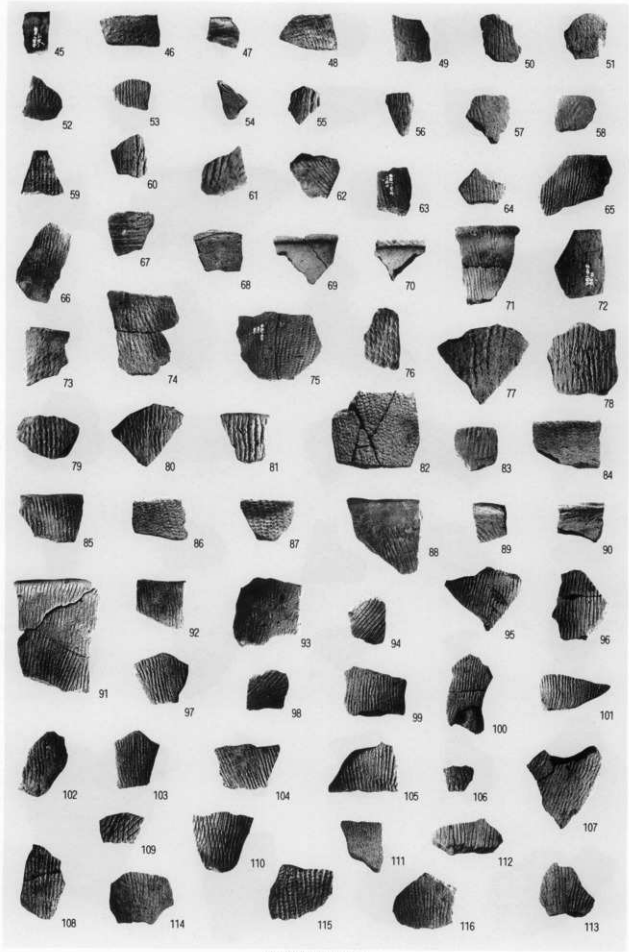
037土坑

038土坑

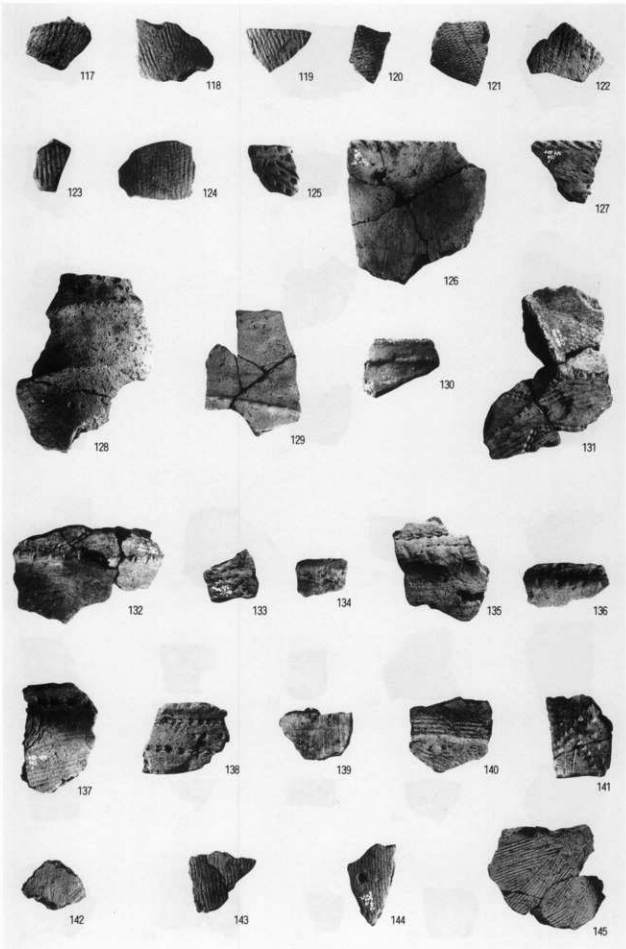
043土坑


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44

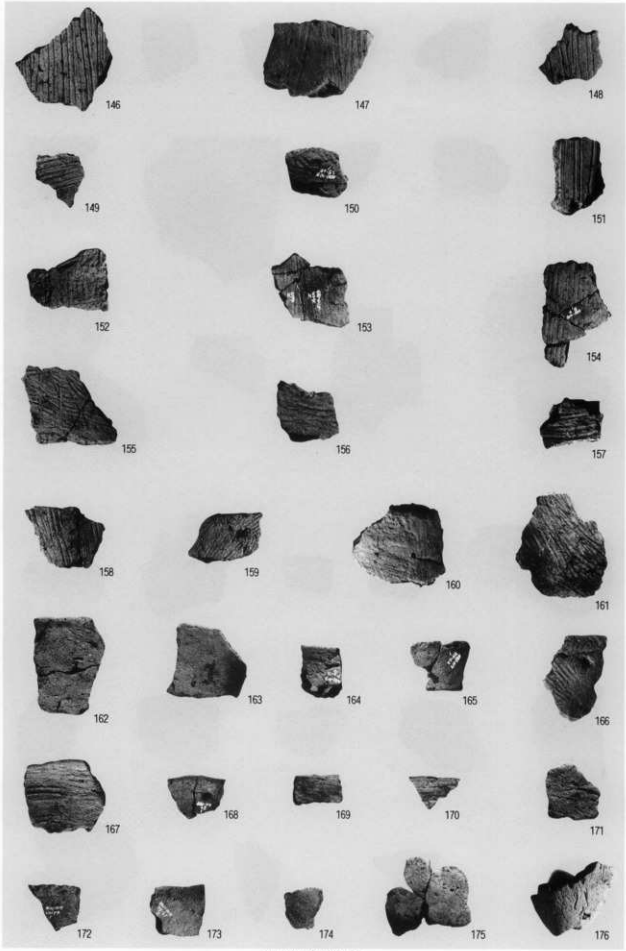
縄文時代遺物(1)


45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116

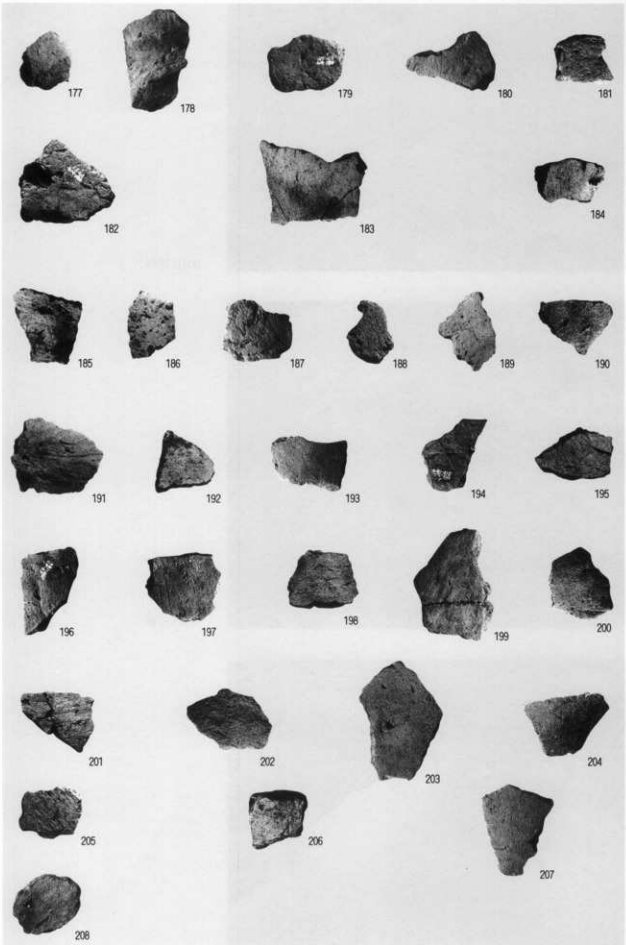
縄文時代遺物(2)


117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145

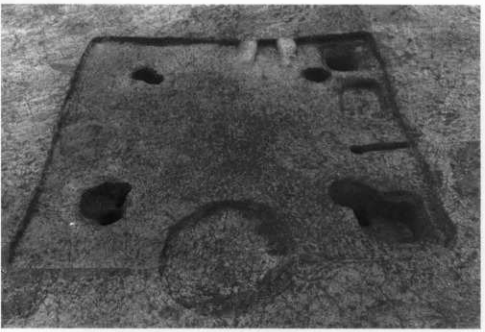
縄文時代遺物(3)


146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176

縄文時代遺物(4)


177
178
179
180
181
182
183
184
185
186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
201
202
203
204
205
206
207
208

縄文時代遺物(5)



001住居跡

002住居跡

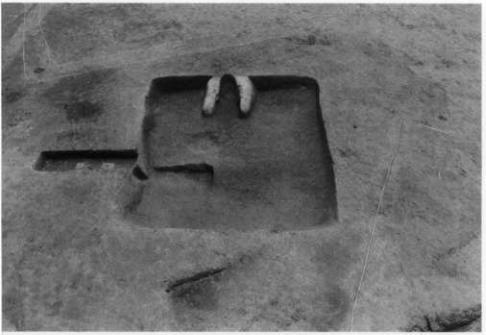
002住居跡
カマド

003住居跡

003住居跡
カマド

004住居跡

004住居跡
カマド



005住居跡

005住居跡
カマド

007住居跡

009住居跡

010住居跡

039住居跡

050住居跡

050住居跡

051住居跡

052住居跡

052住居跡
カマド

074住居跡

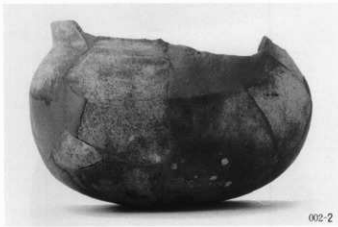
101住居跡

102住居跡

001-2

001-3

001-6


002-2

002-3

002-4

002-5

002-9

002-10

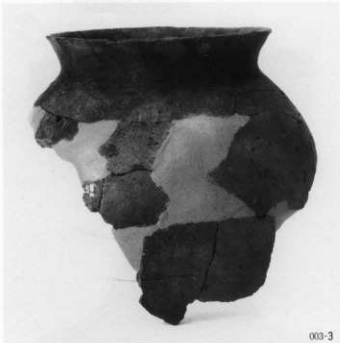
002-11

住居跡出土遺物(1)

003-1

003-5

003-6


003-3

004-1

003-4

004-2

住居跡出土遺物(2)

004-3

004-12

004-5

004-13

004-6

004-14

004-7

004-15

004-8

004-16

住居跡出土遺物(3)

005-1

007-1

005-3

007-2

005-4

007-10

住居跡出土遺物（4）

007-3

007-4

007-5

007-7

009-3

009-4

039-2

039-3

039-4

052-9

住居跡出土遺物(5)

050-1

101-1

101-2

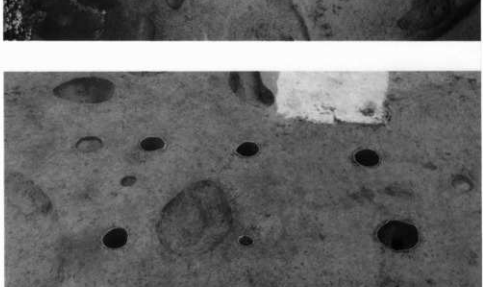
052-1

6E-70

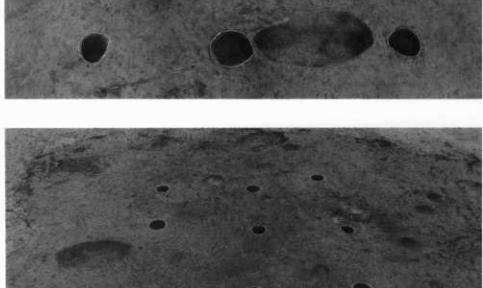
052-8

住居跡出土遺物（6）

076・087
掘立柱建物跡



076掘立柱建物跡



091掘立柱建物跡

015方形周溝状遺構

046方形周溝状遺構

046方形周溝状遺構
土坑

073方形周溝状遺構

078方形周溝状遺構

発掘調査風景

報告書抄録

ふりがな	そでがうらしどうにわやまびーいせき
書名	袖ヶ浦市堂庭山B遺跡
副書名	袖ヶ浦福祉センター授産所埋蔵文化財調査報告書
巻次	
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告第288集
シリーズ番号	
編著者名	加藤正信・永塚俊司
編集機関	財団法人千葉県文化財センター
所在地	〒284　千葉県四街道市鹿渡809－2番地　TEL 043-422-8811
発行年月日	西暦1996年3月29日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
どうにわやまびー 堂庭山B	ちばけんそでがうらし 千葉県袖ヶ浦市 くらなみ 蔵波3,312-1	12481	015	35° 26′ 00″	140° 01′ 50″	19930401～ 19930731 19940201～ 19940228	8,700㎡	袖ヶ浦福祉センター授産所整備に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
堂庭山B	集落跡 散布地	旧石器時代	石器集中地点13地点	ナイフ形石器、彫刻刀形石器、スクレイパー、微細剥離痕のある剥片、剥片、石核、礫	
		縄文時代	炉穴　28基 土坑　46基	縄文式土器（早期）	
		古墳時代	竪穴住居跡　18軒 竪穴状遺構　1基	甕、甑、坏、高坏、碗、土師器、須恵器、石製品、ガラス玉	古墳時代後期の集落を検出
		奈良・平安時代	掘立柱建物跡　3棟 方形周溝状遺構　4基 溝　1条		

千葉県文化財センター調査報告第288集

袖ヶ浦市堂庭山B遺跡

袖ヶ浦福祉センター授産所埋蔵文化財調査報告書

平成8年3月29日発行

編　集　財団法人　千葉県文化財センター

発　行　千葉県社会部
千葉市中央区市場町1-1

財団法人　千葉県文化財センター
四街道市鹿渡809-2

印　刷　大和美術印刷株式会社
木更津市潮浜2-1-10